

魅力あふれる香川型教育メソッド〈1〉

～ 社会と出会い、問うことを楽しむ「香川型探究学習」編 ～



香川県教育委員会
香川型教育メソッド研究会

はじめに

本書は、香川県教育委員会「魅力あふれる県立高校推進事業」(令和3～5年度)における研究成果物です。

令和2年3月に、香川県教育委員会は「魅力あふれる県立高校推進ビジョン」を策定しました。これは、令和3年度からの10年間を対象とし、本県の県立高校が今後進むべき方向を示した基本計画です。

「魅力あふれる県立高校推進ビジョン」の理念に基づいた、学校現場における新しい教育の在り方を具体的に示す方法論を「香川型教育メソッド」と呼んでいます。

「魅力あふれる県立高校推進事業」では、「香川型教育メソッド」の開発と実現の第一段階として、「香川型教育メソッド」のコアとなる「探究的な学び」の充実と推進に重点を置いた取組を実施しました。リーディングスクール3校による2年間の実践研究が行われる中で、ある探究学習の姿が見いだされ、その基盤となる考え方や実現のための方法論についての検討を重ねました。本書は、この探究学習の在り方を「香川型探究学習」と名付け、その考え方や実現のための方法論の、県立高校における普及の手引きとして作成したものです。

なお、本書に示した探究学習の方法論を「香川型」としたのは、主に次のような特徴によるものです。

- 香川県教育委員会が策定した「魅力あふれる県立高校推進ビジョン」を踏まえて、探究学習の考え方や方法論を整理したものであること
- リーディングスクールの実践研究を中心とし、他の様々な県立高校における探究学習の取組も踏まえることで生み出された、香川県における教育実践をもとにした考え方であること
- 香川県の状況や学校を取り巻く環境を踏まえつつ構築したものであること
- 探究学習についての、本書独自の切り口による具体的な解説を含むこと

本書に示した方法論が浸透し、教育現場における探究学習を下支えするものとしてはたらくことで、全ての県立高校が一層魅力あふれる学びの場となることをめざし、今後とも取組を進めて参ります。

香川県教育委員会
香川型教育メソッド研究会

魅力あふれる香川型教育メソッド〈1〉
～ 社会と出会い、問うことを楽しむ「香川型探究学習」編 ～

目 次

はじめに	1
目次	2
第Ⅰ章 「香川型教育メソッド」の構想にあたって	
(1) 探究的な学びの意義	3
(2) 「香川型教育メソッド」の構築と展開	5
第Ⅱ章 香川型探究学習の考え方	
(1) 郷土への理解や郷土愛	8
(2) イノベーション創出力	11
(3) グローバル社会への対応	16
(4) まとめ	21
第Ⅲ章 探究的な学びを充実させるポイント	
1 課題設定の指導	22
2 地域、企業、他校種等との連携	29
3 数学的、科学的手法の活用	34
第Ⅳ章 リーディングスクールにおける実践	
1 郷土への理解や郷土愛(高瀬高等学校)	38
2 イノベーション創出力(善通寺第一高等学校)	46
3 グローバル社会への対応(高松西高等学校)	54
おわりに	64
資料編	65

第Ⅰ章 「香川型教育メソッド」の構想にあたって

この章では、今後の社会を見据えての探究的な学びの意義について概観した上で、「香川型教育メソッド」をどのように構築・展開しようとしているかについて論じています。

(1) 探究的な学びの意義

① 社会の変化による教育の質的転換

AI技術の発展等による社会の構造的な変化を見据えた教育の質的転換は、世界各国で追究が進められている今日的な課題となっています。我が国においても、目指すべき未来社会の姿は Society5.0 と呼ばれ、そのような社会において豊かに生きていくために必要な力とは何か、またそれをどのように育成していくかについての追究が行われています。

文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」(平成30年6月)においては、Society 5.0 において共通して求められる力として、「①文章や情報を正確に読み解き、対話する力」「②科学的に思考・吟味し活用する力」と並んで「③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」が挙げられています¹。さらに、高等学校における学びの在り方について、「多様な選択肢の中で、自分自身の答えを生徒が自ら見いだすことができるような学習が中心となる場」となり、「生徒一人一人の興味や関心に沿って、学校だけにとどまらず、地域社会、企業、NPO、高等教育機関といった多様な学びの場を活用し、異なる年齢や背景を持つ相手とコミュニケーションしながら「社会に開かれた教育課程」による学び」を進めていくことが述べられています²。

平成30年に改訂された高等学校学習指導要領では、改訂の基本方針の一つとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が挙げられています。「主体的・対話的で深い学び」とは、「生徒が各教科・科目等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習」のことです³。各教科・科目等では、生徒は「主体的・対話的で深い学び」の中で、「事実的な知識」をもとに学習活動を行い、「生きて働く知識」を獲得することがめざされます。そして、総合的な探究の時間では、各教科・科目等で獲得した「生きて働く知識」が、探究的な学びを通して統合・一般化され、教科や科目の垣根を越えた、より汎用的な「生きて働く知識」が形成されることが求められています⁴。このように、「主体的・対話的で深い学び」と探究的な学びは深いつながりをもつものとして捉えられています⁵。

¹ 文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」(平成30年6月)7ページ

² 同上 12ページ

³ 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」第1章総則第3款1(1)

⁴ 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」第3章2 16ページ

⁵ 一方で、「主体的・対話的で深い学び」については、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点で捉え、授業改善の取組を行うことが示されていることに留意する必要があります。(「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編」第4章第1節1 117ページ)

さらに、従来の「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」と改められ、さらなる充実が図られている点、「古典探究」「地理探究」「理数探究」等の「探究」という語が含まれる科目が、総合的な探究の時間の他に6科目設定されている点など、「探究」は今回の改訂を象徴する言葉の一つであるといえるでしょう。

ただし、「学習活動の中心が、知識の習得から探究にシフトした」と捉えることは適切ではありません。生徒が身に付けた確かな知識や技能に支えられ、思考力、判断力、表現力等を縦横に駆使して行われる探究的な学びをこそ、めざしていかなければなりません。

② 高大接続改革及びキャリア教育との関わり

学習指導要領の今回の改訂は、「高大接続改革という、高等学校教育を含む初等中等教育改革と、大学教育の改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革という一体的な改革や、更に、キャリア教育の視点で学校と社会の接続を目指す中で実施されるもの」とされています⁶。

高大接続改革は、大学入学共通テストの導入等、「大学入試」の制度的な改革と考えられがちですが、それだけではありません。「大学入試」の改革を一部に含むものではあるが、高等学校教育と大学教育において、十分な知識・技能、十分な思考力・判断力・表現力、及び主体性を持って多様な人々と協働する力の育成を最大限に行う場と方法の実現をもたらすこと」が目標であるとされています。また、「知識・技能の習得を無視する改革ではないという点も重要」とされ、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」のすべてを十分に向上させることを目指すものであり、「改革によって高校生、大学生が身に付けられるようになる力は、十分な水準の知識・技能はもちろんのこと、自分で目標を持って他者と協力しながら新しいことを成し遂げていく力までも含むもの」であるとされています⁷。さらに、「高等学校における教育の在り方として、「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図る」ことが示されています⁸。今後は「大学入試」においても、このような学びの経験や、そこで生徒が身に付けた資質・能力の評価が重視される方向に進んでいくと考えられます。

大学での学びへの接続を意識しつつ高校における学びを改善していくことで、大学に進んだ生徒たちが主体性を持って学び続け、自己実現を果たしていく道のりをより確かなものにしていくことができます。探究的な学びを通して身に付けることができる、課題を見いだして解決する力、自らの考えを論理的に表現する力、自らの探究テーマに対する関心や深い理解等は、その点でも重要な意味を持っていると考えられます。

キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されています⁹。キャリア教育は小学校から段階を追って進められるものであり、高校卒業後にどのような進路を選択する生徒に対しても実施することが求められるものです。

⁶ 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編」第1章第1節2(3) 3ページ

⁷ 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」(平成26年12月)9ページ

⁸ 同上 10ページ

⁹ 文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」(平成24年2月)14 ページ

キャリア教育の充実は、「特別活動を要しつつ各教科・各科目等の特質に応じて」図るものとされています¹⁰、特に総合的な探究の時間においては、「社会への出口に近い高等学校が、初等中等教育の縦のつながりにおいて総仕上げを行う学校段階として、自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自ら課題を発見し解決していくための資質・能力を育成すること」が求められており¹¹、キャリア教育においても重要な役割を担うものとされています。

③ 令和の日本型学校教育

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(令和3年1月)では、ツールとしてのICTを基盤としつつ、従来の日本型学校教育を発展させ、2020年代を通じて実現をめざす学校教育の在り方が、「令和の日本型学校教育」として示されました。

その中で「(1)子供の学び」の在り方としては、目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が示されています¹²。

また、高等学校教育においてめざすべき学びの姿としては、次のようにまとめられています¹³。

- 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力や、社会の形成に主体的に参画するための資質・能力が育まれる
- 地方公共団体、企業、高等教育機関、国際機関、NPO等の多様な関係機関との連携・協働による地域・社会の課題解決に向けた学び
- 多様な生徒一人一人に応じた探究的な学びや、STEAM教育など実社会での課題解決に生かしていくための教科等横断的な学び

このように、本答申においても探究的な学びの実現は重要な課題とされています。

(2) 「香川型教育メソッド」の構築と展開

① 「魅力あふれる県立高校推進事業」のねらい

香川県教育委員会は、「魅力あふれる県立高校推進ビジョン～未来を生きる力を育む特色ある学びの場をめざして～」(令和2年3月)を策定し、各高校におけるこれまでの特長的な取組を生かしつつ、時代の変化に対応し、生徒一人ひとりの夢や希望、目標の実現に必要な資質・能力を育成する学校づくりのための基本計画を示しました。

この「ビジョン」に基づいた、学校現場における新しい教育の在り方を具体的に示す方法論を「香川型教育メソッド」と名付けるとともに、令和3～5年度において「香川型教育メソッド」構築の第一

¹⁰ 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」第1章総則第5款1(3)

¹¹ 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」第2章1 10ページ

¹² 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(令和3年1月) 19ページ

¹³ 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～【概要】(令和3年1月) 3ページ

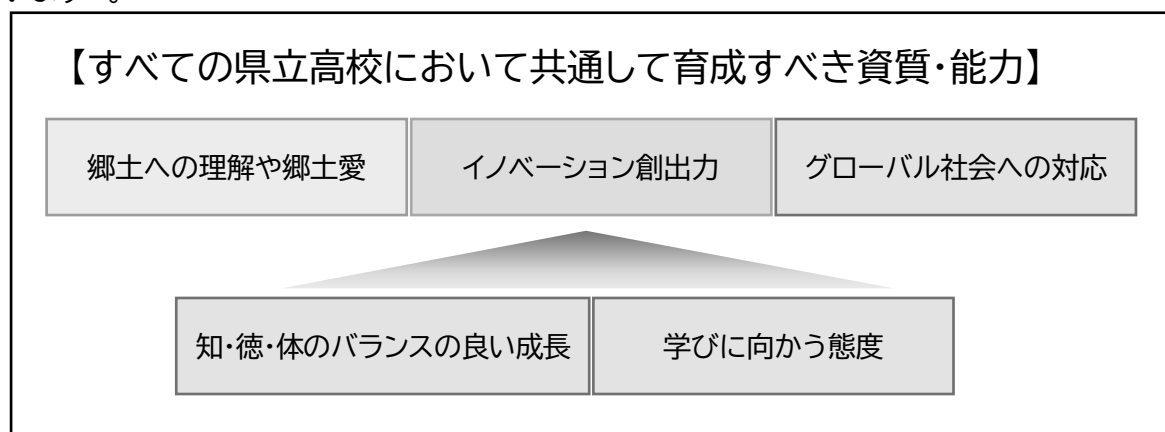
段階として「魅力あふれる県立高校推進事業」を実施しています。

「香川型教育メソッド」は既に存在しているものではなく、机上で理論的に構築することができるものでもありません。様々な県立高校の個性豊かな教育実践の情報が共有され、学校内外の多くの方々の知が結集されることによって作り上げられるものです。そのような過程を経て構築されてこそ、「香川型教育メソッド」は、真に効果的で有益な、香川県らしい教育の在り方を示すものになっていくといえます。

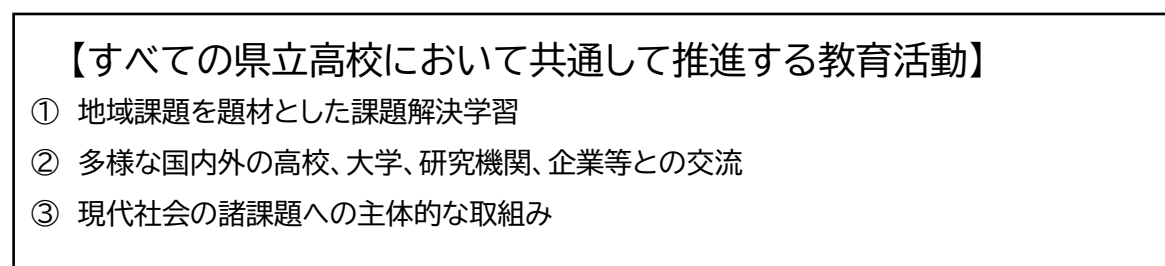
「魅力あふれる県立高校推進事業」では、「香川型教育メソッド」のコアである「香川型探究学習」を実現する方法論の構築に取り組みました。新しい県立高校の在り方を具体的にイメージし、「香川型教育メソッド」構築のための議論を加速するためにも、まずは「香川型探究学習」とはどのようなものかを明らかにすることは、重要な意義を持っています。

② 「香川型教育メソッド」の基礎となる考え方

「魅力あふれる県立高校推進ビジョン」においては、「すべての県立高校において共通して育成すべき資質・能力」及び「すべての県立高校において共通して推進する教育活動」を次のように整理しています¹⁴。



またこの資質・能力を育成するために「すべての県立高校において共通して推進する教育活動」を、次のように示しています¹⁵。



このように、香川県教育委員会では、すべての高等学校において、「地域課題を題材とした課題解決学習」を行う中で、「郷土への理解や郷土愛」「イノベーション創出力」「グローバル社会への対応」に関する資質・能力を育成する学びが実現することをめざしています。

¹⁴ 香川県教育委員会「魅力あふれる県立高校推進ビジョン～未来を生きる力を育む特色ある学びの場をめざして～」(令和2年3月) 13～15ページをもとに図を作成

¹⁵ 同上 16～19ページ なお、ここで挙げたほかに「それぞれの高校の特長的な教育活動によって育成すべき資質・能力」とその育成のための「各学科・課程において推進する教育活動」についても示しています

なお、ここで挙げられている「郷土への理解や郷土愛」「イノベーション創出力」「グローバル社会への対応」は、県立高校で育成したい資質・能力を3つの要素に分けて示したものであり、それぞれが独立しているものではありません。どのような課題に取り組む探究活動であっても、生徒の探究が深まっていく中で、これら3つの要素の資質・能力がおのずから必要になっていくと考えられます。また、探究学習の中でこれらの資質・能力に関する指導を組み合わせつつ行うことは、生徒が高度な探究活動に取り組むことを促す上でも有効であると考えられます。このように、これら3つの要素を併せて育成することで、大きな相乗効果をもたらす教育活動が展開されることが期待されます。

③ 本書の位置付けと今後の展開

「魅力あふれる県立高校推進事業」では、令和3年度～4年度において、3校のリーディングスクールを指定し、実践研究を行いました。実践研究にあたっては、「すべての県立高校において共通して育成すべき資質・能力」の全体を網羅する研究とするため、次のように主眼を置く資質・能力を各校に設定しました。

- 「郷土への理解や郷土愛」に関する資質・能力の育成に主眼を置く研究—高瀬高校
- 「イノベーション創出力」に関する資質・能力の育成に主眼を置く研究—善通寺第一高校
- 「グローバル社会への対応」に関する資質・能力の育成に主眼を置く研究—高松西高校

さらに、3校の情報交換と研究協議を目的にした「香川型教育メソッド研究会」を定期的に開催しました。本研究会には、有識者からなる研究委員やリーディングスクール以外の研究協力者として、高松東高校、琴平高校(令和3年度)、観音寺第一高校の教員も参加しました。

令和4年度に、香川県教育委員会及び「香川型教育メソッド研究会」によって、本書「魅力あふれる香川型教育メソッド〈1〉～社会と出会い、問うことを楽しむ「香川型探究学習」編～」を作成しました。

令和5年度には、コネクティングスクールを指定し、本書をもとにした実践事例を蓄積しつつ、すべての県立高校への普及を進めていく計画です。

本書で示した香川型探究学習の方法論は、各高校での今後の教育活動の在り方を制約するものではありません。具体的な探究学習の進め方は、教室における様々な工夫によって進化を続けていくものです。本書に示した方法論を土台として、すべての県立高校において、「すべての県立高校において共通して育成すべき資質・能力」をよりよく育成できる教育活動の在り方が様々に形作られ、実践されていくことを願っています。

第Ⅱ章 香川型探究学習の考え方

「すべての県立高校において共通して育成すべき資質・能力」のうち、「郷土への理解や郷土愛」「イノベーション創出力」「グローバル社会への対応」にそれぞれ主眼を置いた実践研究が、リーディングスクール 3 校によって行われました。その取組をもとに、すべての県立高校で活用・応用してほしい、探究学習を進める上で基本となる考え方と、それに基づく指導上のポイントを抽出しました。

(1) 郷土への理解や郷土愛 ～高瀬高校の取組より～

県立高校では様々な形で地域との連携が進み、学習指導要領で謳われている「社会に開かれた教育課程」が実現しつつあります。また「香川県教育基本計画(令和 3 年度～7 年度)」においても、重点項目の一つとして「郷土を愛し、郷土を支える人材の育成」を挙げ、すべての校種において取り組むこととしています。

基本となる考え方

① 日常的な貢献活動を探究のベースに

高瀬高校は、「郷土への理解や郷土愛」の育成という目標の実現に向けて、まずは基本的な枠組みを作るところからスタートしました。

その枠組みは、総合的な探究の時間を中心とした「地域課題探究活動」と、様々な学校行事や特別活動による「郷土への貢献活動」の両輪で構成されています。

生徒が日常的に様々な「郷土への貢献」を意識した活動に取り組み、郷土と自らのつながりを体験を通して感じていることは、探究活動を行う際にもよい影響を与えます。生徒には、自分の大切な場所をより良いものにしたい、自分が知っている人が抱える課題について一緒に考えたいという切実な思いを持ち、手応えを感じながら探究活動を行ってほしいものです。郷土の課題に取り組む探究活動の良さの 1 つとして、そのような自分事の探究活動を実現させやすいという点があります。

以前から学校で行われてきた校外での活動であっても、「郷土への貢献」という新しい目的を設定し、個別に行ってきた活動の中につながりや系統性を持たせることで、相乗効果を高めていくことが可能になります。また、このような活動が生徒に与える効果を高めるためには、活動の成果や感想を小さな生徒集団の成果にとどめず生徒間で共有させることが効果的です。さらに、様々な貢献活動を 1 つのプロジェクトとしてまとめ、名称をつけてアピールしていくことで、学校の魅力を地域に強く発信していくこともできます。

② 地域の現場に触れる体験を

高瀬高校の「地域課題探究活動」は、三豊市との連携が活動の基盤となっています。市長の激励

のメッセージを受け、市の職員から地域の課題を学んで総合的な探究の時間がスタートします。また、地元企業との関わりの中で、SDGsやデータサイエンス等の探究の高度化に繋がる知識を学びつつ、探究活動が進んでいきます。そのような連携を容易にするツールとして、生徒1人1台のICT端末が大いに効果を発揮しています。

指導上のポイント

① 国内外の様々な地域を調べさせる

郷土への理解を深めるためには、郷土に深く関与し、その姿をしっかりと見つめるという視線が最も大切ですが、それだけではその郷土が持つ課題や良さに気づきにくい場合もあります。新たな気づきを得るためには、あえて他の地域を調べさせ、比較を通した客観的な地域理解を促すことが効果的です。

どのような「他地域」に注目するかについては、様々な考え方があります。隣接して関連のある地域、郷土と類似点のある地域、郷土と類似する課題に先進的に取り組んでいる地域などの他にも、一見郷土と関わりがなさそうな地域からも、思いがけない課題解決のヒントが見いだされるかもしれません。

遠距離から通学している生徒や、せとうち留学を活用して県外から入学した生徒などは、学校がある地域を「郷土」と感じていないこともあります。しかしその状況は、学びのきっかけに転化させることも可能です。そのような生徒に、「自分の郷土」と感じている地域について皆で教わって学んだり、それぞれの「郷土」のそれぞれの良さを考えたりすることは、豊かな学びの可能性があります。

さらに、比較の対象として海外の事象を取り上げさせたり、外国の方の意見を取り入れる活動を行わせたりすることによって、「グローバル社会への対応」へとつなげていくこともできます。

② 郷土の課題からどのように問いを見出すか

自治体の職員が、「観光」「教育」「防災」「交通」等、担当しているそれぞれの側面で郷土を捉えているように、一言に「郷土」といっても、どの側面に着目するかによって、その見え方は全く異なるものです。行政の視点を参考にするには、郷土を様々な側面から見る探究活動の出発点となります。

ただ、生徒が行政と同じ課題に同じ方法で取り組んでも、既に行われている以上の課題解決法を見つけたことは容易ではありません。では、生徒にはどうアドバイスをすれば良いのでしょうか。

例えば、生徒に次のような問いかけをして、生徒ならではの切り口による課題の捉え方を見いださせる方法があります。

㊐ 教科・科目における学びを課題解決に生かす方法を考えてはどうか

(例:地理特性から見た交通、英語を用いた防災の改善など)

㊑ 地域の2つの側面を組み合わせた視点を考えてはどうか

(例:学びに繋がる観光、災害に強い交通など)

㊒ 日頃感じる率直な思いや、高校生目線の感性を大切に考えてはどうか

(例:高校生にとって使いやすい観光施設、町並みの SNS 映えの向上など)

また、「郷土」と認識する範囲を捉え直してみるのもよい方法です。郷土の範囲を「高瀬町」とみる

か、「三豊市」とみるか、「香川県」とみるかによって郷土に対する感覚は異なります。例えば、高瀬高校生物部では、観音寺市沿岸の調査をするうちに、^{ひうち}灘全域を1つのまとまりと考えるようになり、瀬戸内海の対岸へと調査対象を広げようとしているとのこと。このように郷土を探究していくことで、今までにない、新しい郷土のとらえ方が見いだされることもあります。

③ 「郷土から学ぶ」から「郷土で活躍する」へ

生徒が郷土の大人たちから生きがいや苦勞、蓄積された知恵などを聞いて学ぶことは、郷土愛を育む上でも、生徒が郷土で生きていくロールモデルを得る上でも意義のあることです。

さらに、高瀬高校では、受け身の活動から一歩進み、生徒が学校活動で身につけた資質・能力を発揮して、地域のために活動する側に回ることで、同じ志を持つ大人たちとの出会いを経験し、主体的に郷土に関わっていこうとする気持ちや郷土愛を育むことにつながった事例がありました。

地域活性化の課題に取り組む中で、生徒たちは「公民館に中高生や若者が集まるにはどうすればよいか」というリサーチクエストを見だし、その解決のため、他の高校生や地域の方々に集まってもらい意見を出し合うワークショップを、公民館の協力を得て開催するという活動を行いました。生徒が地域活性化に対する思いを地域の方々に伝えることで、地域の方々の普段は聞けないような考えを知ることができたこと、地域の方々にとっても地域活性化について改めて考える機会となったことなど、大きな意義のある探究活動となりました。

「郷土への貢献活動」においても、生徒が地域の子供たちを教える側に回ったり、ダンスや吹奏楽による、郷土の文化活動の一翼を担ったりする活動が行われています。

このように、高校生ならではの新しい発想や学校における学びを生かし、郷土で主体的に活躍する体験をさせることは、生徒にとってもより深い学びに繋がります。

④ 個々の生徒の「郷土理解」をつなぐ場作り

郷土への理解が進むにつれ、個々の生徒が理解する「郷土」は、探究や体験の内容によって、それぞれ異なったイメージを持つものになっていきます。そのような探究活動の成果をお互いに報告し合い、学びを深め合う機会を設けることで、郷土への理解がさらに多面的で奥深いものになることが期待されます。

また、探究活動の成果を報告書等の形でまとめさせ、学校図書館などに毎年蓄積していけば、貴重な学校の財産となってゆき、生徒に与える効果や学校の特色を形成していく効果も見過ごせないものとなっていくことでしょう。

⑤ 総合的な探究の時間の評価について

総合的な探究の時間等では、つい探究の成果の善し悪しに注目しがちになりますが、より重要なことは、実施した探究活動によってどのような資質・能力が育成されたかを適切に見取り、評価することです。また評価には、生徒の成長を把握する側面とともに、実施した探究活動を振り返り、指導の在り方を改善するという側面もあります。

高瀬高校では、総合的な探究の時間に関する評価を、「④探究活動を行うための資質・能力の向上に関する評価」と「⑥郷土理解及び郷土愛の深まりに関する評価」に分けて実施しています。

① 探究活動を行うための資質・能力の向上に関する評価

「総合的な探究の時間の目標」に基づいて観点別の評価を行っています。その中には、「情報を集め整理・分析し、発信する力、課題や新たな価値を見出す力、自己理解・他者理解、仲間と繋がる力」等、探究活動の遂行に関わる資質・能力と、「自らが取り組む地域課題に関する知識、地域をよりよくしようとする態度・地域と繋がる力」等、地域課題を題材とした探究活動の中で育成したい資質・能力に関する評価が含まれています。

② 郷土理解及び郷土愛の深まりに関する評価

郷土への理解や郷土愛の深まりは、総合的な探究の時間だけでなく、様々な学校活動を通して養われるものです。これに関する評価は、年度の始めと終わりの時期に行うアンケート調査で行っています。その目的は、生徒の意識の変化を把握し、指導の在り方の改善につなげることにあります。また、生徒一人ひとりの考えの深まりを見取り、成長を認めることで、生徒のさらなる向上につなげようとしています。

(2) イノベーション創出力 ～善通寺第一高校の取組より～

イノベーションとは、経済学者ヨーゼフ・シュンペーターによって「従来と異なる方法で資源を組み合わせ、新たな価値を創出すること」と定義された概念です。必ずしも新しいテクノロジー等を用いる必要はなく、新しい発想で「新しいつながり」を作り出すことが重視されています。

香川県においても、人口減少や少子高齢化をはじめとする様々な課題の中、地方創生への取組が強く求められています。地域で見過ごされてきた資源を結びつけることで新しい価値を見いだしたり、従来とは異なる考え方で課題の解決をめざそうと試みたりすることができる人材の育成が、県立高校には求められています。また、「自分には将来の夢がありそれを実現する力を持っている」「自分は社会を良くしていく力を持っている」という自己有用感を育むことも重要です。生徒が今後の人生において困難な状況に置かれたときに、すぐにあきらめてしまうのではなく、「何か解決策があるのではないか」と考えて、情報を集めたり、仲間と協働したりすることによって粘り強く状況を打開しようとする姿勢を育成したいものです。このような意味でも、「イノベーション創出力」はこれからの時代を生きる生徒にとって重要な資質・能力ということが出来ます。

高校教育課では、平成30年度から(一社)日本社会イノベーションセンターが開催するワークショップであるTISPを誘致し、イノベーション教育の取組を実施してきました。その経験を生かして、令和3年度からは香川大学創造工学部と連携し、「かがわイノベーションプログラム」として新たな試みを展開しています。

基本となる考え方

① 「イノベーション創出力」をどう捉えるか

善通寺第一高校では、「イノベーション創出力」の育成という目標の実現のため、その基盤となる考え方としてロジカル思考、デザイン思考等の新しい思考法を取り入れた実践を展開しました。

これらは、ビジネス等の現場では、イノベーションを支える思考法として、近年大きな注目を集め

ているものです。全国的にも一部の先進校では、これらの新しい思考法を学校活動に取り入れるための実践研究が進められています。

善通寺第一高校は、「イノベーション創出力」を育成するためには、「チームワーキングへの理解」「デザイン思考」「ロジカル思考」及び「それらを駆使した探究活動の蓄積」の4つの要素が重要であると捉えており、本メソッドにおいてもこの考え方を踏襲しています。

ここに挙げた各要素については、様々な捉え方や定義が存在しますが、本メソッドにおいては、高校の探究活動の指導に用いる観点から、次のように捉えています。

●チームワーキングへの理解

チームが協働によって創造性を発揮するためには、チーム内に多様なメンバーが存在していることが優位に働くとされています。またそのためには、チームのメンバーが、お互いの異なった性格や考え方を受け入れながら同じ課題に向き合おうとする姿勢を、共通理解していることが大切です。チームワーキングへの理解を深めさせることのねらいは、そのような協働の基盤としてのチームの在り方について学び、実践に生かせるようにすることにあります。

●ロジカル思考

ものごとを体系的に整理し、根拠と結論などの論理的なつながりを捉えながら、矛盾や飛躍のない筋道を立てる思考法です。因果関係を正しく把握して論理的に思考を整理しようとする際や、説得力のある論理的な結論を作り出して、それを他者に分かりやすく正確に伝えようとする際などに効果を発揮する考え方です。

ロジカル思考への理解が深まることは、生徒同士の協働がしやすくなり、情報の収集や発信が円滑になるだけでなく、論理的な曖昧さや誤りに自ら気付いて追究を続けることができるようになるという点で、深い学びの実現のためにも重要です。

●デザイン思考

善通寺第一高校では、デザイン思考を捉える際、香川大学による次の説明を用いました。

製品に対する審美力を持ち、ユーザーが潜在的に求めている価値等を追求することで得られた抽象的なアイデアから、実現可能なプランに落とし込み、全く新しい価値を生み出す思考プロセス(手順)のことです。ビジネスや日常生活において、あらゆる分野の問題解決・イノベーション創出に活用できます。

【基本的な考え方】

1. ユーザー中心
2. チームメンバーやユーザーとのコミュニケーションを重視
3. 試作→テスト→改善を繰り返す
4. 問題解決の方法は1つではなくてよい

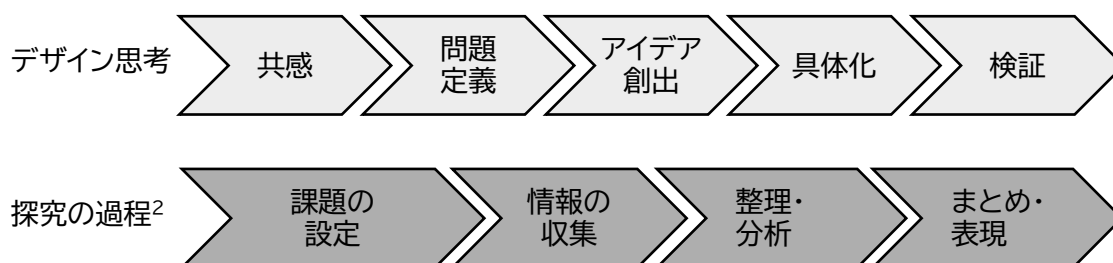


香川大学 Web サイト(https://www.kagawa-u.ac.jp/kagawa-u_ead/concept/)から引用

このうち、右の図で示されている思考プロセスの各要素は、次のようなものと考えられます。¹

- ① 共感：インタビューや観察等を通して情報を集め、ユーザーのニーズに寄り添って、真の問題は何なのかを考える
 - ② 問題定義：今自分たちが解くべき問題を1つに絞る
 - ③ アイデア創出：チームでのブレインストーミングなどによって多くのアイデアを出し、その中から良さそうなものを選ぶ
 - ④ 具体化：アイデアを検証できる簡単な試作品(プロトタイプ)を素早く作ってみる
 - ⑤ 検証：ユーザーにプロトタイプを使ってもらい、アイデアの評価をもらい、その結果をもとに試作品を改善していく
- ※この①～⑤は、一直線に進むものではなく、行きつ戻りつしながら進んでいく

デザイン思考における思考プロセスは、共に問題解決の流れを示したものであるという点で、総合的な探究の時間における「探究の過程」と通じる部分があると考えられます。



両者を並べてみることで、例えば、「課題の設定」の前段階としての「共感」の大切さに気付かされるかもしれません。あるいは、「整理・分析」の代わりに、試作品を作ってユーザーの意見を聞きつつ試行錯誤を重ね、粘り強く課題解決を進めるという活動を取り入れ、よりアクティブな探究活動を行うことも、意義深い学びとなることでしょう。

このように、生徒がデザイン思考の考え方を意識して探究活動を進めていくことで、探究活動がより充実したものになることが期待できます。

【もっと深く知りたい場合】 ※この他にも様々な書籍で論じられています。

- チームワーキング
エイミー・C・エドモンドソン「チームが機能するとはどういうことか―「学習力」と「実行力」を高める実践アプローチ」(2014年5月 英治出版)
- ロジカル思考
照屋華子 岡田恵子「ロジカル・シンキング 論理的な思考と構成のスキル」(2001年4月 東洋経済新報社)
- デザイン思考
ティム・ブラウン「デザイン思考が世界を変える[アップデート版]イノベーションを導く新しい考え方」(2019年11月 早川書房)
ジャスパー・ウ著 見崎大悟監修「実践 スタンフォード式 デザイン思考 世界一クリエイティブな問題解決」(2019年9月 インプレス)

¹ ジャスパー・ウ著 見崎大悟監修「実践 スタンフォード式 デザイン思考 世界一クリエイティブな問題解決」(2019年9月 インプレス)等を参考にした

² 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」第3章第2節1 12ページ

② まずは教員も学ぶ

ロジカル思考やデザイン思考は教員にとっても新しい思考法です。学校での指導に取り入れるために、まずはどのようなものであるかをじっくりと理解する必要があります。

善通寺第一高校では、香川大学創造工学部の協力を得て、生徒向けの講座と平行して教員の研修も行いました。生徒の講座では、これらの思考法を活用することで、生徒が生き生きと困難な課題に取り組み、変わっていく様子を見ることができます。それを踏まえながら教員も考え方の理解につながる研修を受けることで、徐々に高校内でロジカル思考、デザイン思考等に関する指導ができるようにしていくことがめざされています。

③ 可視化によって共通理解を図る

「思考法」「指導の目標や 3 年間の流れ」を共通理解するために、生徒向けには「掲示物」、教員向けには「指導の手引き」によって示し、重要ポイントを可視化しています。「イノベーション創出力」は、従来は単なる偶然のひらめきと思われてきたものを、能力として認識し、育成しようとするものであるため、そのような新しい考え方が校内に浸透するためには、継続的な取組が求められます。

④ 3 年間の学習計画による段階的な学び

通寺第一高校では、「イノベーション創出力」の育成のために、「チームワーキング」「ロジカル思考」「デザイン思考」の各講座を受け、順を追って学んでいく 3 年間の学習計画が立てられました。

計画の立て方によっては、1 年次に探究の基礎としてこれらを集中的に学び、一通り身につけた後で探究活動へと移る、という流れも考えられますが、善通寺第一高校ではその方式は採用していません。それぞれの段階で「思考法の理解」と「探究活動における活用」を何度も繰り返す学習計画によって、生徒が実践的に学んでいけることを重視しています。

1 年次の「チームワーキング講座」は、他者との協働の基礎として「イノベーション創出力」の出発点となるものです。チームワーキングの考え方を体験を通して学ばせるとともに、協働によって新しいアイデアが重なり、一人ではなしえなかったイノベーションに繋がっていくことを実感させます。

チームワーキングへの理解が深まることで、生徒は他者との的確な情報のやりとりの大切さを感じ、「ロジカル思考」を学ぶ意欲に繋がると考えられます。また新しい発想を生み出すことの面白さを感じることで「デザイン思考」への関心にも繋がると考えられます。3 年次の「ロジカルコミュニケーション」では、それらを振り返りつつ効果的な情報発信の仕方を考え、探究の成果をレポートにまとめます。この活動は、結果として進路実現にも繋がっていくものとなります。

⑤ 全学年で共通の課題に取り組む

「ロジカル思考講座」で行ったワークショップを独立させ、全学年で共通の課題に取り組ませるプレゼンテーション大会が実施されました。このように生徒の学びを縦横につなげ、生徒が様々な楽しみを感じながら主体的に取り組む活動があることで、生徒は「イノベーション創出力」の意義を体験的に知り、3 年間を通して身に付けるべき学習課題であると感じることがめざされています。そのような生徒の意識の醸成は、学校独自の学びの特色を形成することにつながっていくことでしょう。

① ロジカル思考、デザイン思考から何を学ばせるか

ロジカル思考、デザイン思考等の考え方を学校での学習に取り入れる際には、「何のために取り入れるのか」という目的をきちんと考えておく必要があります。目的がはっきりしていないと、単に学習内容が増えただけ、という結果に終わってしまいかねません。「これらの思考法を取り入れるのは、そもそも生徒にどのような能力や態度を育成したいからなのか」について考え、育成をめざす資質・能力をより明瞭に把握し直すことによって、「ロジカル思考、デザイン思考を学ばせる」だけでなく、「ロジカル思考、デザイン思考から学ばせる」という発想による指導が可能になります。

善通寺第一高校では、総合的な探究の時間において育成したい資質・能力を、次の5項目で示しています。

- ① 他者と協働する態度：自他の個性と価値観を認め合い、協力して課題に取り組む態度
- ② 復元力(打たれ強さ)：協働の中で、他者の意見を受け入れつつ、自分の意見も大事にする力
- ③ ロジカル思考：論理的な根拠を示し、説得力のある論証をする力
- ④ 表現力：聞く人を引きつける声や態度、手法で自分の意見や知見を効果的に表現する力
- ⑤ デザイン思考：対象を洞察して困りごとに共感し、自分ごととしてとらえ、適切な課題を設定する力

この5項目の資質・能力は、善通寺第一高校における教育目標を、ロジカル思考、デザイン思考の考え方を取り入れながら整理することで構想されたものです。この5項目の中にロジカル思考、デザイン思考の考え方がどのように反映されているかを示すと、概ね次のようになると考えられます。

① 主にロジカル思考が反映されている項目【資質・能力③④】

ものごとを体系的に整理し、根拠と結論などの論理的なつながりを捉えながら、矛盾や飛躍のない筋道を立てる思考法である「ロジカル思考」の考え方を理解することを通して、正しい情報を根拠として説得力のある論証を行ったり、自らの意見を効果的に表現したりする能力を、「③ロジカル思考」とともに「④表現力」として捉え、育成を図ろうとしています。新規性のあるアイデアを説明するためには、論理的で分かりやすい表現力が必要になります。その意味で「ロジカル思考」と「デザイン思考」は相互補完的な役割を持つものと考えて実践が行われています。

② 主にデザイン思考が反映されている項目【資質・能力①②⑤】

デザイン思考は、「人々が持つ本当の課題を解決するための考え方(マインドセット)」³「人々が自分でさえ気付いていない内なるニーズを明らかにする手助けを行うこと」⁴とされています。このように、デザイン思考ではユーザー(問題を抱えている人)とそのニーズを常に中心において考えることや、問題解決のためにチームで協働し、試作を繰り返していくことが大切にされています。このようなデザイン思考が持つ、イノベーションにつながる姿勢の在り方を「⑤デザイン思考」に加えて「①他者と協働する態度」「②復元力(打たれ強さ)」という形で捉え、育成を図ろうとしています。

³ ジャスパー・ウ著 見崎大悟監修「実践 スタンフォード式 デザイン思考 世界一クリエイティブな問題解決」

⁴ ティム・ブラウン「デザイン思考が世界を変える[アップデート版]イノベーションを導く新しい考え方」

② 「イノベーション創出力」の育成に向けて

これまで述べたとおり、善通寺第一高校による実践研究においては、「チームワーキングへの理解」「デザイン思考」「ロジカル思考」及び「それらを駆使した探究活動の経験」によって、「イノベーション創出力」の育成を実現しようとする取組が行われました。

善通寺第一高校で生徒が実施した探究活動の一つの例として、「食べられるストロー」を取り上げたものがありました。ある生徒たちは、環境問題への対応から近年用いられる紙製のストローには、使用感の改善の余地があり、紙資源の消費という新たな問題もあることに気付きました。そこで、使った後はそのまま食べてしまえるストローを作ってみようかという、新しい発想による探究活動が行われました。小麦粉を練って作ってみた試作第1号は、「筒状のだんご」のような、使用に耐えられないものとなりました。しかしそれを出発点として、ワクワクしながら試行錯誤を重ねていくことこそが、デザイン思考が示すイノベーションを起こす道筋です。この生徒たちにとっても、イノベーションによって社会をより良くしていこうとする粘り強い挑戦の面白さに気付く体験となったのではないのでしょうか。このように、ロジカル思考、デザイン思考等の考え方を身に付けることは、活動的な探究活動を行うための大きな武器となると考えられます。

とはいえ、「イノベーション」とは、これまで世の中には存在しなかった新しい価値を創造することであり、それを真の意味で実現させる能力を育成することは、容易なことではありません。そのため、「生徒が探究活動においてイノベーションを起こしたかどうか」を評価規準として評価を行うなどの、イノベーションを性急に求めようとし過ぎる考え方は、かえって生徒が柔軟な発想で主体的な活動を行うことを妨げることになりかねません。高校における探究活動は「イノベーション創出力」の育成の初期段階と位置づけ、生徒が今後の成長の過程において様々に試行錯誤の経験を積み重ねようとするための態度を形成することが重要であると考えられます。

本研究の成果として、「イノベーション創出力」の育成の初期段階では、次の2つの目標を設定することが重要であるという示唆が得られました。

- ㉑ 他者の困りごとに深く共感し、自分事ととらえて粘り強く解決を目指そうとする、デザイン思考の基本姿勢を身につけさせる
- ㉒ 他者と協働しイノベーションを起こそうとすることの意義や価値を、体験を通して実感させる

各学校において、教員がまだロジカル思考、デザイン思考等の思考法に不慣れだったとしても、この2つの目標を総合的な学習の時間の学習目標に組み込んで指導を行うことは、十分可能なことなのではないでしょうか。生徒による様々な探究活動において、部分的にでもロジカル思考、デザイン思考を活用しつつ、新しい価値の創造をめざす試みがより積極的に行われるようになっていくことが期待されます。

(3) グローバル社会への対応 ～高松西高校の取組より～

今日の私たちの生活は、様々な面で既に国際的なつながりの中で営まれています。海外の経済状況に影響を受けたり、外国で起こった様々なニュースに触れたりといった情報のつながりだけでは

なく、生活の基本である衣食住ですら、海外で作られた製品や食材などの物質的なつながりがなければ、これまで通り営むことができません。

香川県においても、近年の在留外国人数は1万4千人前後で推移しており、県内の学校にも外国にルーツを持つ生徒が在籍しています。高校生の日常生活では、インターネットを介して海外の動画を視聴したり、コンビニエンスストアで外国人の店員から商品を受け取ったりすることは、ごく一般的なことになっているのではないのでしょうか。直島や紫雲出山が海外のメディアで大きく取り上げられたことなどから、アフターコロナ時代には多くの海外からの旅行客が香川県を訪れるようになることも考えられます。

「グローバル社会」という概念そのものは、規模が大きく実感しにくいものですが、このようにそれを構成する要素を取り出して注目することで、手触りをもって実感し、探究活動につなげていくことができます。

「グローバル社会」が既に現実のものとなりつつあり、今後さらに進展していくことが予想される中で、グローバル人材の育成を図っていくことは、重要な教育課題の一つです。「香川県教育基本計画(令和3年度～7年度)」では、重点項目「郷土を愛し、郷土を支える人材の育成」の基本的方向の1つとして、「地域を担うグローバル人材の育成」を挙げて取組を進めています。

基本となる考え方

① 「総合的な探究の時間」と「希望者が参加する体験学習」

高松西高校では、世界や地域が抱える課題を自分事として捉え、生徒が主体的に探究活動を進めていく状態を実現するために「グローバル社会への対応」の視点が活用されています。

全体の構成としては、「MDP(マイ・ドリーム・プロジェクト:総合的な探究の時間)」と「OP(オプション・プログラム:希望者が参加する体験学習)」の二本立てになっています。

OPには、高松西高校が中心となり企画したものと外部団体主催のプログラムに生徒を参加させるものがあります。いずれも学校内で参加者を募り、学校が展開する学習活動の一環として生徒に提示することで、生徒の積極的な参加に繋がっています。

MDPにおいては、「グローバル社会への対応」に関する資質・能力として次の4点を重視した取組が行われています。

- ① 現代社会が抱える課題を自分事として捉える主体性
- ② 現代社会が抱える課題を多面的・多角的な視点から考察するグローバル感覚
- ③ 課題解決にむけて筋道立てて考える論理的思考力
- ④ 課題解決にむけて導き出した対策を実現する実践力

② 「楽しさ」をキーワードに、興味・関心の感度を高める

高松西高校の取組では、「生徒が夢中になって楽しめる活動になっているかどうか」を大切に、それを実現するための様々な工夫が行われています。言い換えれば、学校が探究活動に関する教育活動を自己評価するための評価規準として「生徒が活動を楽しんでいるかどうか」を大切にしているともいえます。

生徒は、日常の出来事やメディアやインターネット等を見た情報など、狭い範囲の表面的な物事に強く興味を引かれ、その外側の領域に関心を持つとしないことがしばしばあります。これには様々な要因が考えられますが、生徒の興味・関心に根ざした探究活動を実現するには、生徒が「楽しい」と感じられる活動を体験させることで、興味・関心の感度を少しずつ高め、主体的な探究活動の面白さを感じさせることが効果的であると考えられます。

例えば高松西高校で1年次に実施される「ブラ☆きなし」では、学校周辺を歩きながら、地形や歴史、産業等について学びます。「学校を離れた非日常性」「実物に触れる体験ができること」等はそれだけでも生徒にとって楽しい活動となります。その他にも、「自分が好きなものについて、級友に説明するために改めて調べてみる」「授業で知識としては知っていた日本の名刹を訪れることで、実物に接し魅力を体感する」「自分がよく知っている物事を海外の高校生に説明しつつ交流する」といった活動が行われています。既知の物事をより深く捉えたり、国際的な視野で捉え直したりする体験を通して、知らず知らずのうちに生徒の視野が大きく広がっていくことでしょう。

③ タイムリーなコツの共有

課題設定の指導の前に探究活動の目的や進め方などについて教員同士で話し合ったり、中間発表会の前に評価規準について共有したりするなど、探究活動の節目節目でのタイムリーな情報共有は、指導を担当する先生方にとってありがたいものです。また、うまくいった指導のコツを共有することは、教員の負担軽減の上でも重要です。

生徒の興味・関心を大切にしようとしても、生徒は教員の思い通りに動くものではありません。つい生徒の興味・関心の高まりを追い越して指示を与えてしまい、急に気持ちが冷めてしまうといったこともあるかもしれません。また逆に、ほんの少しの声かけやアドバイスによって、生徒の意欲が思いがけず燃え上がるようなこともあるものです。指導の際にどんな心構えで臨むべきか、どんな進め方や声のかけ方が効果的だったかなど、取組を進めながらの教員同士の情報交換が促進されるとよいでしょう。

④ 探究活動を SDGs で深める

SDGsの視点を取り入れることは、グローバル社会における課題を考える上で有効です。

高松西高校では、課題設定ではなく、主に課題解決の場面でSDGsの視点を取り入れるようにしています。「自らが取り組んでいる課題が国際的な課題の中ではどう位置づけられるものであるかを理解する」「自らの課題を他の視点から見たときに新しい改善策があるのではないかと考える」「自らが提案する改善策が別の課題を引き起こす可能性について考慮する」等の効果によって、生徒は探究の成果を客観的に捉え直し、深めることができます。

課題設定の場面において、SDGsの中から探究のテーマを探すという探究活動の進め方もありますが、その際は、抽象的な調べ学習に留まってしまうことなく、調べたことをもとに改めてリサーチクエスチョンを絞り込むようにさせるなどの工夫によって、具体的な調査や活動を伴う探究活動を促すなどの指導が求められます。

① 「グローバル社会への対応」の視点の生かし方

探究活動の指導における「グローバル社会への対応」の視点の生かし方としては、次の 2 つの方向性が考えられます。

㉑ 国際的な課題をリサーチクエストとし、自分事として向き合う探究活動をさせる

㉒ 生徒自らが関心を持つテーマについて、グローバルの視点を取り入れた探究活動をさせる

高松西高校の MDP(総合的な探究の時間)では、すべての生徒が「国際理解」をテーマとする探究活動に取り組んでいるわけではありません。「地域活性化」「ものづくり工学」「自然科学」「地産地消・食文化」等、生徒が自らの興味・関心に応じて様々なテーマに関する探究活動に取り組めるように計画されています。

㉑は「グローバル社会への対応」に関する探究活動として、まず想定される方向性です。もとより国際社会とその課題、異文化理解等に関心の深い生徒には、ぜひチャレンジしてほしい課題です。しかし全ての生徒が国際的な課題を最も探究したいということはありません。

㉒の方向性による指導を行うことで、多くの生徒にとって「グローバル社会への対応」の視点を取り入れた探究活動をすることが可能になります。「一見当たり前のように思える文化や習慣を改めて考えるきっかけになる」「課題解決の方法や先事例を海外に目を向けて探そうとする」「異なる文化を持つ人々にも理解され、興味を持ってもらえるような発信の在り方を考えようとする」などの面で探究の高度化につながることでしょう。

一例を挙げると、ある生徒は食文化について興味を持って探究活動を進めるうち、世界には珍しい食材や、自分の感覚ではおいしいと思えないような料理があることに気づき、「異食」に関する多くの事例を集めていきました。ところがそのうち、外国人の視点からは「ふぐ料理」が大変奇妙な食文化であると思われることを知ったことで、そもそも自らが考えていた「異食」も、日本文化の視点からそのように見えているに過ぎないことに思い当たり、そこから国際的な視点から文化を相対的に捉えることへの理解に進もうとしています。

このような気づきは、人から教えられると、数ある知識の 1 つとして取り入れられてしまうだけのものですが、生徒が自ら探究した成果として見いだした際には、その生徒の認識の枠組みを変えるような大きな価値を持つものであると考えられます。このような発見を通して国際的な視点を獲得していくことが「グローバル社会への対応」に関する取組によって実現されています。

② 越境体験による学びと意欲の喚起

令和 3~4 年度の高松西高校の実践においては、新型コロナウイルス感染症の影響により海外に赴いての研修は実現しませんでした。オンライン会議システムを用いた交流やプレゼント交換などの手法を用いて、海外の人々を身近に感じられるような取組を行っています。

自分と異なる文化や考えを持つ人と直接交流することは、自分が属している文化圏から一歩外に出る「越境体験」であるといえます。相手が持つ文化にさらされつつ独力でそれと向かい合うことや、話し合うことを通してお互いに影響を与えあうことは、世界を身近に感じ国際的な視点を獲得する

ことができる学びとなります。

このような体験は、「グローバル社会への対応」の必要性を考えるためのきっかけになり、まだ見ぬ世界への好奇心とともに、グローバル社会に関する探究を主体的に行っていきたいという意欲をかき立てるものです。

またそれだけではなく、自分と異なる文化・価値観を寛容な姿勢で受け入れて理解しようとする態度を養うことにもつながります。「越境」した先で、そこにいる人々に助けてもらった体験も、様々な学びをもたらすことでしょう。

③ 心理的安全性

越境体験から充実した学びを得るためには、心理的安全性が不可欠です⁵。

無理に活動させられるのではなく、自分がやろうとする範囲内の挑戦になるよう活動を自分で調整できることが大切です。また、語学力の面で不安があるときは、話したい内容についての十分な準備や、困ったときにサポートしてくれる友人や教員の存在があることによって思い切った挑戦をすることができます。たとえうまくいかなかったとしても責められることなく、果敢な挑戦を認めてくれる存在があるということも重要です。

このような心理的な安全性の確保は、越境体験のみならず、あらゆる探究活動の環境を整える際の考え方としても重要です。生徒には、予定調和の結論に満足するような探究活動よりも、たくさんの試行錯誤や失敗を重ねる探究活動にこそ、挑戦してほしいものです。途中で横道にそれてしまったとしても、それは本当に探究したい課題に気付いたということかもしれません。謎が謎を呼んで全く結論に到達できなかったとしても、それは1つ1つの謎に向き合った結果なのかもしれません。

結果の善し悪しに関わらず、果敢に挑んだ過程を皆で認め合える心理的安全性が保たれていることは、思い切った探究活動を試みるための重要な基盤となります。

④ 評価活動を通じた学びの振り返りと評価の在り方

高松西高校では、生徒に自己評価や相互評価の活動を行わせる際に、評価項目を示すことで、育成したい資質・能力に着目させた振り返りをさせ、自分自身に課題解決能力が身に付いたか、またそれを発揮することができたかについて、生徒自身がメタ認知することを促そうとしています。

一方、高瀬高校の事例では、文章表現による自己評価活動が取り入れられ、自らが獲得した資質・能力を自らの言葉で表現させるとともに、それを蓄積したポートフォリオを作ることを課しています。自己評価活動をどのような方法で行わせるかは、学習のねらいに応じて選択するとよいでしょう。

これらの活動は、一般的に「評価」と呼ばれますが、あくまで生徒に自らの活動を振り返らせ、生徒自身のPDCAサイクルを回させるための「学習活動」です。生徒の自己評価の結果は、そのまま成績に組み入れるべきではありません。自己評価などの、生徒による学びの成果の報告をもとに評価を行う方法は間接評価と呼ばれますが、評価を行うのはあくまで教員であることに注意が必要です。

⁵ 石井遼介「心理的安全性のつくりかた」(日本能率協会マネジメントセンター 2020年9月)によれば、「チームの心理的安全性とは、チームの中で対人関係におけるリスクをとっても大丈夫だ、というチームメンバーに共有される信念のこと」です。また、ビジネスの現場において「日本の組織では、①話しやすさ、②助け合い、③挑戦、④新奇歓迎の4つの因子があるとき、心理的安全性が感じられる」としています。

一方で、生徒の活動やその成果を教員が観察・分析して行う方法は直接評価と呼ばれ、その手法としては、ルーブリックがあります。ルーブリックは、間接評価の際にも、生徒の評価活動を適切に評価する手法として有効であると考えられます。

適切な評価を行い、それを生徒に説得力を持って伝えることで、生徒の学びを導き、促進することができます。関係機関との連携のもとでの探究活動であっても、評価は教員が行うものです。

(4) まとめ

前項までにおいて、香川型探究学習の考え方について、3校の実践研究に即して論じました。

高瀬高校の「郷土への理解や郷土愛」の取組では、最良の学びの素材である「郷土」を生かしつつ探究活動を進めていくための考え方や、学校における様々な教育活動をつなぐことで郷土愛を醸成していくことの価値や効果について示しました。

善通寺第一高校の「イノベーション創出力」の取組では、チームワーキング、ロジカル思考、デザイン思考を取り入れつつ、生徒が取り組む探究活動の中でどのような資質・能力を育成するかという点について示しました。

高松西高校の「グローバル社会への対応」の取組では、国際的な視点を取り入れつつ、主体的で自分事の探究活動の実現のための道筋を示しました。

3校の実践研究の根底には共通する指導観や学力観があることから、各校の実践は、研究が進むにつれてお互いを参考にし合い、補完し合うものとなっていきました。

また、3校の実践において特に重要視されている点は、概ね次のようなものです。

- ① 主眼を置く育成したい資質・能力を踏まえて、どのように学習目標を設定し、評価を行うか
- ② 興味・関心や意欲を高め、探究的な学びの充実につなげるために、総合的な探究の時間と、他の学習や学校活動をどのように組み合わせ、組織していくか
- ③ 生徒の学びの過程を想定しつつ、3年間の学習の流れをどのように設定するか
- ④ 教員間での情報や好事例の共有、生徒間での学習目標や学びの成果の共有をどう図るか
- ⑤ 効果的な指導のために大切にしたい考え方や着眼点を、どう言語化するか

これらの点について工夫をすることで、探究学習の向上を図ることができると考えられます。

各県立高校においては、この香川型探究学習の考え方を取り入れつつ、それぞれの学校がこれまで築き上げてきた教育活動の特長を大切にしながら、探究的な学びを推進することによって、さらなる魅力を発揮し、各校それぞれの特色を伸ばしていくことが期待されます。

第Ⅲ章 探究的な学びを充実させるポイント

この章では、探究学習を進める際のキーポイントとなる部分について、リーディングスクール各校の実践において共通する考え方や指導の在り方をもとに解説しています。

1 課題設定の指導

(1) はじめに

探究的な学びを指導する際に、強い関心を持って取り組める課題を生徒が設定できたかどうかは、実りある探究活動の実現を左右する上で重要なポイントの1つです。

しかし、実際の指導では、どのようにアドバイスすれば良いのか分からないケースもあります。

「生徒が提出した課題では、探究はうまくいかないだろう。しかしどのように言えばそれが伝わるのか。」

「生徒に『やらされている雰囲気』が漂っていて、自分から進んで探究を行う気配がない。一つひとつ指示をして活動させなければならないのか。」

「インターネットで調べたらすぐに答えが出るような課題ばかり持ってくる。」

「生徒が取り組もうとしている分野にはあまり詳しくないので、教えられることがない。」

このような様々な思いを抱きつつ、日々の指導に当たっている先生方も少なくはないのではないのでしょうか。

本章では、探究的な学びの指導で最も重要である、生徒が課題を設定する場面での指導の進め方について考えていきたいと思います。

生徒は自ら設定した課題に主体的に探究活動に取り組み、教員は必要な助言を与えながら生徒の学びを見守るといった学習活動を実現させていくにはどうすればよいのでしょうか。

(2) 「課題の設定」の捉え方と指導の在り方

① 「探究の過程」における「課題の設定」の位置づけ

総合的な探究の時間の目標の(2)は、次のように示されています¹。

(2)実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができる。

ここからは、探究活動が「①課題の設定」→「②情報の収集」→「③整理・分析」→「④まとめ・表現」の4つの段階を経るものと考えられていることが分かります。この4つの段階からなる一連の流れは「探究の過程」と呼ばれています。この過程は固定的なものではなく、順序が入れ替わったり、あ

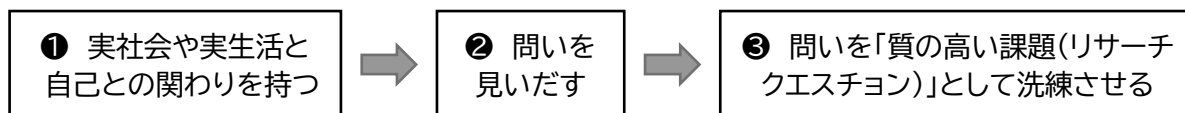
¹ 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」第3章第2節1 12ページ

る活動が重点的に行われたりすることもあります。

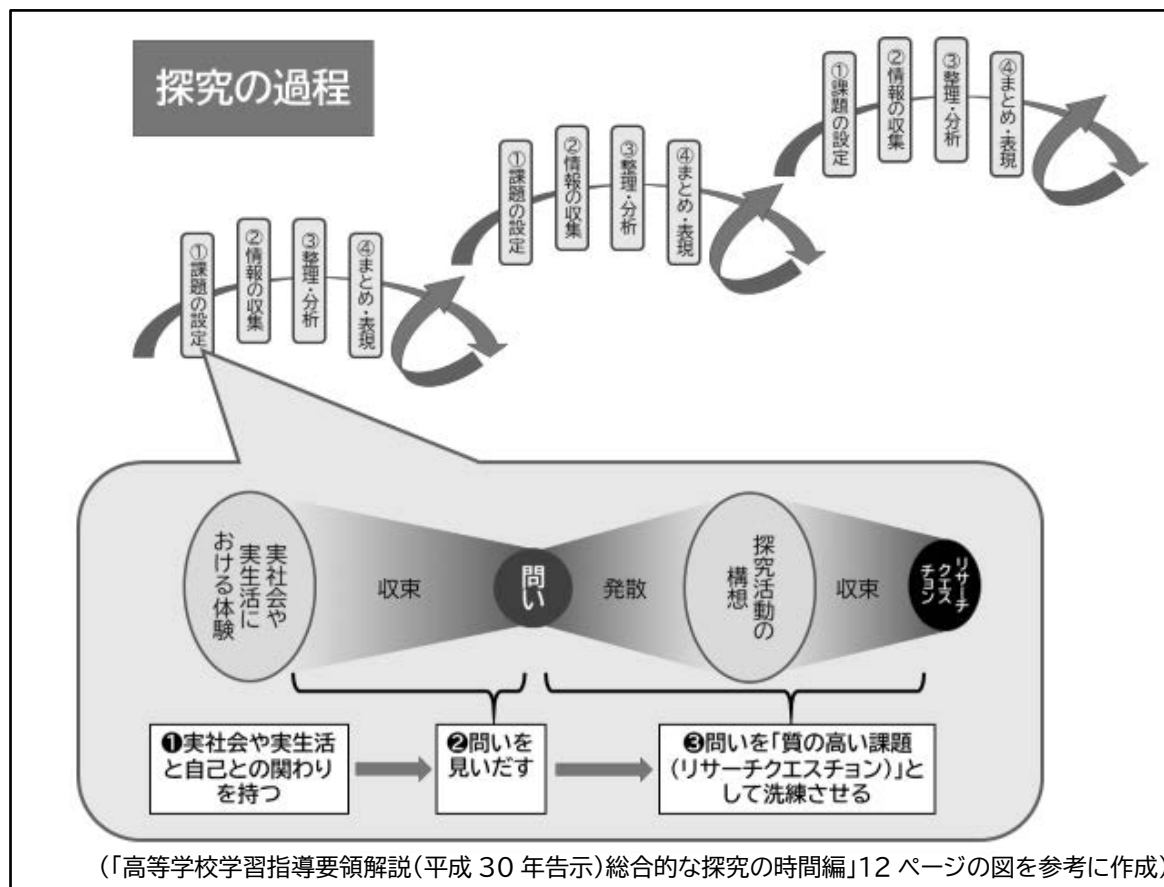
「課題の設定」は、「探究の過程」の最初の段階にあたります。「総合的な探究の時間」では、この段階に対する指導がとりわけ重要視されています。

② 「課題の設定」の3つの段階

「①課題の設定」の段階で生徒が行う活動は、さらに次の3つの段階に分けることができます。



②と③を分けて捉えることで「課題の設定」の過程が明確になります。②は、①で見つけた気づきの中から探究すべき問いを絞り込んでいくという「収束」に向かう段階です。それに対して、③は、問いをもとにして、これから行う探究活動を見通しながら、リサーチクエスチョンを再構成するという、「発散」→「収束」を行う段階です。このように考えると②と③は異なる思考を行う段階であることが分かります。(ただし、常に一方向の流れであるとは限りません。リサーチクエスチョンをうまく作ることができなかつたときは、②の段階に戻ってみることが効果的な場合もあります。)



「課題の設定」をこのように整理すると、「課題の設定」の指導において難しい部分は、①や②ではなく、主に③の「問いを「質の高い課題(リサーチクエスチョン)」として洗練させる」段階であることが分かるのではないのでしょうか。

ただ、③がうまくいくためには、①や②の活動がしっかりと行われていることも大切です。そこで、次のセクションからは、①と②の指導で留意したいことがらを簡潔におさえたのち、③の指導の進め方について考えていきたいと思います。

③ 「課題の設定」の各段階における指導

① 「実社会や実生活と自己との関わりを持つ」段階

実社会や実生活において、人、社会、自然等に直接関わる体験が探究活動の出発点となります。そのために、実社会・実生活で体験したことと自らの考えとの「ずれ」や「隔たり」といった違和感に注目したり、対象に対するあこがれを抱いたり、逆に改善の可能性を感じたりすることなどが、「自己との関わり」の出発点となります。生徒一人ひとりが自己の感覚や疑問を感じる気持ちを大切に、実社会・実生活との関わりの中で感じた「引っかかり」が何であったかを把握しようと試みていることが重要です。

地域の方々から直接話を聞くなどの体験をすることは、大変有効です。その際には、事前に「どのような話が聞けそうか」といった予想や見通しを立てさせておくと、実際の体験との違いに気づきやすくなります。また、生徒は「体験を通して新しく知ったこと」に注目しがちですが、体験を通して生徒自身が「疑問を感じたこと」「思いついたこと」「はっきりとは説明できないが何か引っかかりを感じたこと」などが、課題の設定をする際には重要になります。体験中に感じたちょっとした気づきをこまめに書き留めておくように指導をすることも大切です。

◆ポイント◆

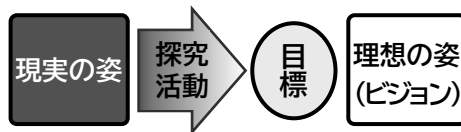
- ★実社会・実生活と生徒自身の考えの「ずれ」や「隔たり」等に着目させる。
- ★予想や見通しを立ててから体験に臨ませると「ずれ」や「隔たり」に気づきやすい。

② 「問いを見いだす」段階

生徒が①の段階で感じた気づきや引っかかりについて洞察を深め、問題意識を明確化していく段階です。①の段階は個人的な気づきが重要ですが、②ではグループで意見を出し合う活動が有効な場合もあります。グループで問いを見出す方法として、付せんに個々の気づき等を書き出して、それをホワイトボードなどに貼って整理していくKJ法的な手法がしばしば用いられます。

さらに、見出した問題意識をはっきりと捉えたり、分かりやすく説明したりする方法として、「現実の姿」と「理想の姿(ビジョン)」の対比という形を用いることも有効です。なぜならば、「問題を感じている状態」とは、「実社会・実生活の現実の姿」と「めざすべき理想の姿(ビジョン)」の間に差を感じていることと考えることができるからです。

生徒に問題意識を「現実の姿」と「理想の姿(ビジョン)」の対比という形で説明させてみると、「『現実の姿』をイメージや思い込みでしか捉えていなかった」と気付くこともあります。探究活動において課題解決を行う過程とは、「目標」を設定して、「現実の姿」を「理想の姿」に近づけることだ、ということもできます。生徒が「現実の姿」と「理想の姿」を考えてみることは、〔⑤問いを「質の高い課題(リサーチクエスション)」として洗練させる〕段階において、生徒が探究活動の「目標」を設定する上でも役立つと考えられます。



◆ポイント◆

- ★書き出させたり話し合ったりすることを通して、問いを明確化させていく。
- ★「現実の姿」と「理想の姿(ビジョン)」の対比という形で整理させる。

③ 「問いを「質の高い課題(リサーチクエスト)」として洗練させる」段階

1) 「リサーチクエストとはそもそも何なのか」を理解させる

(2)②で示したように、問いとリサーチクエストの違いを理解できれば、リサーチクエストを立てやすくなります。まずは、「リサーチクエストとは何か」「何のために立てるのか」などについて生徒全員に理解させることで、生徒の思考や話し合いの土台を作ることができます。

2) 生徒同士が話し合う機会を十分に設ける

教員が具体的なリサーチクエストについて直接指導をすることも効果的ですが、生徒同士がグループ内でそれぞれの考えを話し合う時間を十分に設けることが何よりも大切です。生徒が話し合うときは、発言力の強い生徒の意見だけが取り上げられることのないように、まずは個人作業で自分の意見を考えさせることで、全員の意見を踏まえた話し合いを行わせることが大切です。また、グループで考えたことをワールドカフェ方式でグループ外の生徒に説明させ、つじつまが合わない部分を指摘し合ったり、別の視点からのアイデアを出し合ったりさせる活動は、リサーチクエストを多面的・多角的に捉えさせる上で効果的です。

優れたアイデアは、自問自答によってだけでなく、良い聞き手に聞いてもらうことによっても作り出されるものです。話し手の言葉を遮ったり否定したりせず「聴く」力、話し手のアイデアを引き出す質問を投げかけて「訊く」力は、ぜひ生徒に身につけさせたいものです。

3) リサーチクエストは疑問文で

リサーチクエストを疑問文の形で表現させると、探究活動の方向性が考えやすくなります。例えば、「〇〇市の観光について考えたい」という漠然とした問いを、「〇〇市の観光を盛んにするにはどうしたらいいか。」という表現に変えると、この疑問文の答えを探すことがそのまま探究活動の方向性を定めるための思考になります。ただし、このままではまだ実際にどのような探究活動を行うのが明らかになっているとはいえません。

「盛んにするにはどうしたらいいか」の答えを探させることで、例えば「観光スポットを作る」「新しい観光資源を発掘する」「情報発信をする」「イベントを仕掛ける」などの探究活動の方向性が様々に出されることでしょう。その中から方向性を選択させ具体化させていくことで、実際の探究活動につながる質の高い課題(リサーチクエスト)となっていくます。

4) 文末まで言語化させる

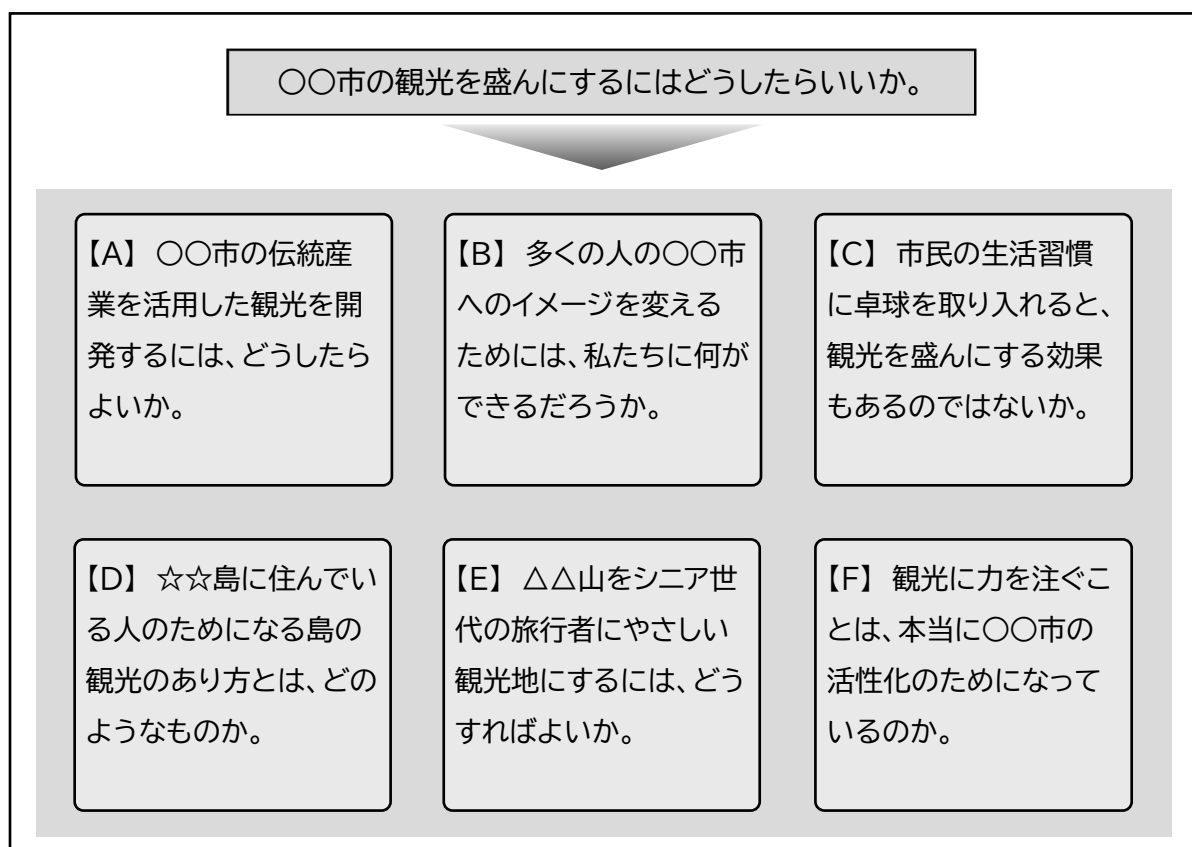
課題の設定の際には、「〇〇市の観光を盛んにするには？」といった形ではなく、文末まで言語化させることも重要です。これによって、グループ内の生徒同士で、互いの考え方のズレに気付きやすくなります。例えば「〇〇市の観光を盛んにするにはどうしたらいいか。」と、「〇〇市の観光を盛んにするためには、誰に何を協力してもらうのがよいか。」とでは、探究活動の進め方が大きく異なります。

5) リサーチクエストを立てるねらい

リサーチクエストを立てるねらいは、探究活動の目標を考えつつ、活動全体を見通した構想を考え、それをグループ内で共有しながら具体的な探究活動の計画を立てていくことです。

例えば、次ページの図のようにリサーチクエストを洗練させていくと、何をどのように調べ、活動していけばよいかといった探究活動の具体的な計画がイメージしやすくなっていきます。

自分たちが立てたリサーチクエスチョンが、まさに今探究したいことを言い当てたものだと感じられたとき、生徒は楽しく主体的に探究活動に取り組むことができるのではないのでしょうか。



6) リサーチクエスチョンを洗練させるための指導の方法

前項のように、生徒はまず「〇〇市の観光を盛んにするにはどうしたらいいか。」といったような、大まかな課題を立てた後、それを質の高いものに洗練させていく必要があります。

実際は、上の図の【A】～【F】から考えを深めていくことで、さらに独創性の高い探究活動になっていくこともあります。

ここでは、生徒が大まかな課題から、より洗練されたリサーチクエスチョンを考えていく際に、教員はどのような問いかけを用いて指導を行うことが効果的かについて、上の図を用いながら5つのポイントをまとめました。生徒に任せきりにするのではなく、生徒の状況を踏まえて、最適なタイミングで働きかけ、指導を行うことで生徒の思考を促進することが教員には求められます。

① 生徒の言葉の意味を確認する「そもそも」

生徒は、「観光」を「盛んにする」と言っただけで意図が伝わったと思いがちですが、実際は「盛んにする」という言葉が何を指しているのかの解釈は人によって様々です。「盛んにする」という言葉の意味を、【A】では「新しい観光の形をつくり出すこと」、【B】では「〇〇市のイメージを向上させること」、【D】では「島の住民に満足感がもたらされること」と捉えています。解釈の違いが、全く異なるリサーチクエスチョンを生み出すことに繋がっています。

教員が、生徒の立てたリサーチクエスチョンに対して、「そもそも『盛んにする』とはどうすることですか」と丁寧に意味を確認していくことで、生徒は見過ごしていたことに気づき、思考が深まることがあります。さらに【B】に対しては、「そもそも『多くの人』とは、どのような人を指しているか」

と問うことで、さらに焦点化した探究活動に繋がっていきます。指導の際には、あえて生徒たちの空気を読まず、「何も知らない人」という態度で尋ねることが効果的です。

⑥ 論理の正しさを疑ってみる「そもそも」

「観光」といえば無条件で良いものと思ってしまうがちですが、「そもそも本当にそうだろうか」と考えることで、【D】や【F】のリサーチエスチョンが作られています。【D】は観光に良い側面と悪い側面を見出そうとしているのに対し、【F】は観光そのものを一度疑ってみようとしています。

このように「無条件で良いもの」「無条件で悪いもの」と考えられている物事に対して、「そもそも」と疑ってみることで、新たな視点で物事を捉えることができることがあります。

また、生徒が用いた論理を改めて問い直すことは、リサーチエスチョンをさらに洗練させることにも効果的です。例えば、【A】に対して「そもそも伝統産業に従事している人は、それを観光に取り入れることを本当に好ましく感じるのか」と問うことで、生徒は当事者に話を聞く必要性を感じることでしょう。また、【E】に対して、「そもそもシニア世代の旅行者が求めているのは『やさしさ』だけなのか、本当に『やさしさ』なのか」と問うことで、より深い探究活動につながります。

このようにあえて「天の邪鬼」な発想で尋ねることは、リサーチエスチョンを洗練させる上では効果的ですが、生徒が否定されたと強く感じ過ぎないような言葉がけが大切です。まずはできている部分をしっかりほめた上で、励ましつつ指導する必要があります。

⑦ 仮説を疑ってみる「他には」

リサーチエスチョンを立てることは、仮説を立てることであります。例えば【A】は「伝統産業の活用は観光活性化のための良い方法なのではないか」、【B】は「〇〇市の観光が盛んではない原因は、あまり観光地がないイメージを持たれていることなのではないか」といった仮説の上に立てられたリサーチエスチョンです。

このような仮説に対して「他の原因や解決法はないのか」と疑ってみることは、生徒が立てたりリサーチエスチョンの有効性や価値を捉え直させるきっかけとなります。

ただし、「他に」と問うのは生徒の仮説を否定し考え直させるためではありません。考え得る他の原因や仮説、解決法と比較しつつ、この探究のアイデアがベストであることを再確認することは、その探究の意義を多面的に捉え、説得力を増す方法の一つです。

⑧ 「誰のため」を意識させ、自分事の探究活動に

「誰かのために少しでも役に立ったらいい」という曖昧な目標を設定すると、探究活動のねらいが定まらず、成果をはっきりと感ずることも難しくなります。【E】のように対象がはっきりしている探究や、【D】のように顔が見える相手のための探究であれば、生徒は大きなやりがいを感じるのではないのでしょうか。また、【A】は「伝統産業の従事者」「観光客」「地域」のそれぞれが納得できるプランを開発しようとする必要があることに早い段階で気づかせておくことで、説得力のある結論に繋がります。

【B】は不特定多数の人を対象とするリサーチエスチョンですが、「私たちに何ができるだろうか」という自分事の視点で、実際に活動した成果をもとに考察をするといった探究をさせること

ができれば、生徒にとって価値のある経験を得ることができるのではと考えられます。

④ 対象を限定したり、別のものと組み合わせたりしてみる

【D】や【E】のように探究する対象を限定することで、課題を深く追究することができます。

また、【C】のように一見無関係に思えるようなものと組み合わせてその可能性を探究することは、うまくいけば新しい発見も大きいと考えられます。ただし、斬新な組み合わせを思いついたことだけで満足してしまうことのないように、多角的な視点で考えを深めるよう促すことによって、説得力のある成果に繋がるような指導が求められます。

その際の方法としては、「卓球の導入」によって誰にどのような波及効果を期待することができ、「市民の生活習慣」と「観光の振興」にどのようにつながるのかを、相関図を描きながら具体的に示した上で、その中の主要な波及効果が実際に起こるのかどうかを検証するという形になると思います。このように、探究活動における目標と、めざすべき「理想の姿(ビジョン)」との関係を具体的に考えることで、より洗練されたりサーチクエスチョンにつながることがあります。

7) リサーチクエスチョンは探究の途中で変えることもある

【F】は〇〇市における観光業の位置づけ自体を問い直そうとしたものです。このような課題を解決するためには、観光業そのものについて調べることも大切ですが、〇〇市全体の産業構造全体を俯瞰し、その中での観光業の位置づけについて考える必要があります。

また、【F】は YES-NO で答えられるクローズドクエスチョンであるため、答えが出た時点でリサーチクエスチョンを改めて立てる必要があります。「観光は地域の活性化のためになる」と分かたら、「地域の活性化により貢献する観光のあり方」について、「ためにならない」ならば、「観光の代わりに力を注ぐべき産業」についての新しいリサーチクエスチョンを立てることになると思われます。

このようにリサーチクエスチョンは探究が進み、課題への理解が深まった段階で改めて立て直した方がよい場合もあります。むしろ必要に応じて柔軟に変えてよいものだと生徒自身も理解しておくことがよいと考えられます。

特に産業に関わる課題などは、複雑な利害関係や法の規制など、予想とは異なる部分が見えてくることもあると思われます。もしかすると懸命に努力したにもかかわらず、目標の一部分しか達成できないこともあるかもしれません。そのようなときは、探究の成果を体裁よくまとめようとせず、リサーチクエスチョンを修正し、到達した部分までの成果を自信を持って発表し、残りの部分は今後の課題とするという方法もあります。おそらくは、狭い領域を深く追及した、見応えのある探究活動になっているのではないのでしょうか。

〔主要参考文献〕

文部科学省『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 総合的な探究の時間編』(H30.7)

文部科学省『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 中学校編』(R4.3)

佐藤浩章『高校教員のための探究学習入門 問いから始める7つのステップ』(2021.3 ナカニシヤ出版)

岡本尚也『課題研究メソッド2nd edition よりよい探究活動のために』(2021.3 啓林館)

安斎勇樹 塩瀬隆之『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』(2020.6 学芸出版社)

平井孝志『本質思考 MIT式課題設定&問題解決』(2015.2 東洋経済社)

ハル・グレガーゼン『問いこそが答えだ！ 正しく問う力が仕事と人生の視界を開く』(2020.3 光文社)

ウォーレン・バーガー『Q 思考 シンプルな問いで本質をつかむ思考法』(2016.6 ダイヤモンド社)

2 地域、企業、他校種等との連携

生徒の探究活動がより広く、深いものになるためには、地域、企業、他校種等との連携は大きな力になります。その一方で、連携をどのように進めてよいかという不安などによって、なかなか一歩を踏み出せないということもあるかもしれません。

ここでは、主に香川型教育メソッド研究会の協力校である高松東高校の連携の事例をもとに、連携の在り方について考えてみました。連携の相手や形態は、学校の特性、地域の特性、これまで学校が築いてきたつながりなどによって、学校ごとに様々であると考えられます。一方で、そのために、連携のためのノウハウが共有しにくく、連携の相手を探しづらいという側面もあります。

このページの内容を参考に積極的な連携が進み、県立高校の探究活動が社会の力を得て活性化することで、生徒の学びがより深まるとよいと思います。

(1) どのような場面で連携が生きてくるか？

学校外との連携があると、次のような様々な場面や機会を作り出すことができます。

- 生徒が探究活動の意義や基本的なスキルを学ぶ講話をしていただく〔主に大学、専門学校〕
- 生徒が探究したいテーマについての基本的な知識や、問題点などについて講話をしていただく〔あらゆる連携先〕
- 生徒が課題を解決する過程で、定期的にグループの話し合いに加わっていただき、伴走的な支援をしていただく(商品開発を行う活動などでは、何度も打ち合わせを行うこともある)〔主に大学、専門学校、企業、自治体〕
- 地域の方々を訪ねて地域の課題等について聞き取りを行ったり、生産やビジネスの現場などと一緒に活動したりする〔主に企業、自治体〕
- 商店等に依頼をして、店舗に来たお客様にアンケートをさせていただく〔主に企業、公共施設〕
- 小学校、中学校の総合的な学習の時間の取組に関わり、異校種で協力して学びを進める〔小・中学校〕
- 生徒が地域の子供たちなどを教える体験をさせていただく〔小・中学校、幼稚園など〕
- 生徒が試作品の製作や実験等に使用するための資材等を分けていただく〔主に企業〕
- 中間発表や成果発表の際などに、発表内容への指導助言をしていただく〔主に大学、専門学校、自治体、経済団体〕
- 生徒が制作した商品、サービス等の販売や展示をさせていただく〔主に企業、公共施設〕
- 生徒が探究の成果をもとに政策提言を行う〔主に自治体、経済団体、企業〕
- 継続して連携し、次年度の計画への助言や、計画立案の協議への参加をしていただく〔あらゆる連携先〕
- 学校の取組の情報発信に協力していただく〔主に企業・自治体〕



企業の協力を得て実施した化学実験

(2) 連携をすると、どのようなよい点があるか？

① 学校生活だけでは経験できないことが数多くある

地域の方々と話をするだけでも、生徒には様々な刺激になります。また、自らの意見や取組について大人たちに対して説明をする機会は、責任感を持って主体的に活動に参加しなければと感じるきっかけになるかもしれません。

また、生徒にとって、自分が普段生活している地域について改めて考え、郷土に対する意識を持つ機会になる点も重要です。地域の魅力や、地域が抱える課題を身をもって知ること、地域の問題を自分事として考え、社会の創り手としての意識にまで高められるとよいと考えられます。

② ユニークな活動を行わせることができる

普段の学校業務を多く抱えた教員だけでは、探究学習の準備に多くの時間を割くことはなかなか困難です。地域や企業の方に協力をいただければ、その連携先が持つ得意分野を活かした授業が展開でき、教員の負担軽減のみならず、生徒にとっても魅力的な活動となりえます。例えば高松東高校では、企業や他校種の学校との連携が、次のような探究活動につながっています。



小学校の放課後児童クラブでの活動

- 製造業を営む企業から講師の派遣や資材の提供を受けて、普段の学校生活では実施できない実験を体験した後、生徒が講師を務め、小学生を対象とした実験教室を実施する
- 飲食店と連携し、近隣の小学生や保護者を対象とした子ども食堂を実施する
- 専門学校、短大と連携し、インバウンド観光客、リハビリテーション、看護、介護等の分野についての専門知識に触れ、課題を見つけて探究を行う
- 様々な立場の人に集まってもらい、生徒が運営する会議を開く

生徒が探究しようとする様々なテーマについて、教員が全て知っておくことは不可能なため、教員が「にわか専門家」になって教えようとするのには限界があります。探究の内容については、それをよく知る連携先の方々に任せ、教員は活動の環境を整えることと、生徒の資質・能力を伸ばすための支援をすることに注力するという関係を築けるとよいでしょう。

③ 継続的な活動によって学校の特色づくりにつながる

たとえ担当教員の異動・変更があっても、連携先の担当者との関係を維持しておくことで継続した活動を行うことができます。また、連携先が生徒の指導を担う探究学習であれば、担当する教員の教科や得意不得意に関わらず展開することが可能です。

継続的な連携のためには、連携先とのつながりを、特定の教員の個人的な関係にするのではなく、校内組織としての連携にすることが必要です。連携に関する資料を教員間で共有することで、誰が総合的な探究の時間を担当しても実施できるようにすることが理想だといえます。

④ キャリア教育の観点

学校の中で一日の多くの時間を過ごす生徒にとっては、身近な大人が保護者と教員だけになってしまうことも珍しくありません。連携によって多様な大人たちと関わることは、キャリア教育の観点から見ると、次のような効果が期待されます。

- 社会人として信頼されるコミュニケーションの在り方を学び、人間関係を形成する力を養う
- 人生の先輩として、大人たちの人生観や職業観、社会活動への貢献の意欲等を学び、生徒自身の在り方生き方を考えていく上での参考とする
- 大人として豊かに生きていくためには、今後どのような能力や知識を身に付けていく必要があるかについて気づき、学びへの意欲が向上する
- 社会の仕組みや仕事を行う上で従うべきルール等を現実の場で学ぶ
- 地域の産業への理解を深め、将来の生活をどのように設計していくかの参考とする



外国人留学生との交流

学校外との連携で出会う相手は大人だけとは限りません。外国人留学生との交流などは、生徒の将来の考え方や世界観を大きく広げる可能性もあります。

(3) 連携先との連絡で気をつけるべきこと

① 活動の最終目標の確認

企業等の探究活動への協力には、先方にも目的があるものです。純粹に地域や地域人材の育成に貢献をしたいという場合もありますし、PR活動やSDGsの取組(「4 質の高い教育をみんなに」など)の一環、若者の視点を取り入れた商品開発やパッケージデザインを作りたい、自社の社員教育のためなど、様々な目的が考えられます。

協力していただいたことを通して、相手方にも成果やメリットがある探究活動にするためには、連携先のねらいについて理解を深めるとともに、探究活動の最終目標をどういったものとするかをはじめの打ち合わせで決めておくことが大切です。

一方で、探究活動はあくまで教育活動の一環としての限られた時間内での活動であるため、それを越える活動は困難であることを理解してもらうことも重要です。

② 日程調整、急な日程や時間帯変更の連絡

年間や月の行事予定を早い段階で提示し、スケジュールの調整を綿密にしておくことが大切です。

急な日程等の変更は、最も気を遣うべき部分です。短縮授業や、急な変更が生じた場合(例:時間割の入れ替え・変則的な時間割など)には、直ちに連絡を入れる必要があります。先方にも当然予定があり、その合間に来ていただいていることを常に意識して連絡を密にすることが重要です。

③ 予算・費用の問題

講師を派遣していただく際、謝金や交通費をどのように処理するのか、誰がどれくらい負担するのか(生徒負担・学校負担・先方持ち)を、管理職や事務室を交えて協議した上で派遣先に伝え、事前に共通理解を得ておくことが大切です。また生徒の氏名をはじめとする個人情報の取り扱いや守秘義務に関する考え方にも、あらかじめ共通理解があることで、お互いに動きやすくなります。

④ 生徒の肖像権

連携先の広報等の目的で、活動の様子の写真や動画の撮影や利用を求められることがあります。撮影の許諾が得られていない生徒がうつり込まないように配慮するとともに、画像等の用途について事前に明確にしておくことが必要です。

⑤ 連絡方法の確認

学校と連携先の連絡方法や誰と連絡を取ればよいかを確認することが重要なことはもちろんですが、授業等で対応できない時間帯もあることを事前に理解していただくようにしておくといでしょう。高校ではごく当たり前の習慣や用語がすれ違いの原因になることも少なくないために、丁寧な対応が求められます。

一方で、時間外の学校への電話連絡や生徒への直接の連絡など、学校として受け入れられないことについてもあらかじめ共通理解を図っておくことが大切です。

⑥ 大学・専門学校などとの連携

大学・専門学校等との連携は、生徒が専門性の高い知識を学び、自らの探究活動に生かすことができる点が大きな魅力です。また、大学・専門学校等に訪問したり、教員や学生との交流を行ったりすることは、生徒が進路について考えるきっかけになるという側面もあります。

双方の授業時間や学校行事、教員のスケジュールに合わせて日程を調整する必要があるため、早い段階(年度初めや長期休業中など)での打ち合わせが必要となります。また依頼文書をはじめとする各書類は学校間での正式なやり取りとなるので、きちんと段階を踏んだ手続きが求められます。

探究活動への伴走型の支援をお願いできる場合は、講師が次に来校するまでに生徒に何を取り組ませておけばよいかなど、指導の方向性をよく話し合いながら進めていく必要があります。

⑦ 積極的な外部への情報発信、報道提供

企業等と連携をした活動を行った際は、報道提供や学校のホームページを用いた情報発信を積極的に行うことが、連携した相手の労に答える方法でもあります。また、それによってさらなる外部とのつながりが開拓できることもあります。

報道提供を行う際や、SNSによって情報を発信する際などは、県の規定に従って実施する必要があります。

(4) 生徒への事前指導のポイントは何か？

① 受け身の参加にならないように

講師が来校した際に、せっかくの講話なのに生徒が真剣に聞こうとしなかったり、「言われたことをすればよい」といった受け身の姿勢が目についたりして、思わずがっかりしてしまうときもあります。しかしそのようなとき、もしかすると生徒は「目的も分からないまま急に集合させられ、話を聞かされている」と感じているかもしれません。また、一生懸命聞こうとしても、知らない内容の話聞き続けることは集中力を求められ、思いのほか疲れるものです。

事前に「講師はどんな人か」「どのようなことを学ぶことができるか」などを生徒に説明したり、講話の内容をメモする用意を指示しておくなどのちょっとした工夫で、生徒が講話に主体的に臨む準備をすることができます。また、生徒が知りたいと思っていることを事前に講師に伝えておくことで、生徒に合わせた講話をしていただける場合もあります。

② 積極的な質問のための準備をさせる

生徒たちが連携先の方々に気後れすることなく、分からないことを率直に質問したり、逆に質問に答えたりといったことができるとうよいと思います。生徒が自信を持ってやりとりができるようになるために、次のようなことが考えられます。

- 普段から生徒同士で質疑応答をさせることで、質問することに慣れさせるとともに、質問に答えることで新しい発想が生まれることがあることを実感させておく
- 事前に質問したいことをまとめさせておく
- 連携先の活動概要・扱っている商品やサービス・理念などの予備知識を学習しておく
- 知らないことは恥ずかしいことではないということ、当たり前に見えることでも尋ねてかまわないことを説明する
- 活動に入る前にアイスブレイクの時間を取る

③ 自己紹介やマナーの練習をさせる

あいさつや自己紹介の仕方などを練習することで、礼儀正しく胸を張って大人と話し合えるようになることは、生徒の自信にもなります。生徒の意識が高めるために、生徒にパソコンで簡易な名刺を自作させ、名刺交換の練習をしてから連携先との交流に臨ませてもよいでしょう。

3 数学的、科学的手法の活用

この項では、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)である観音寺第一高校による理数教育普及の取組の一環として、同校の教育実践を踏まえた、探究学習における数学的、科学的手法の活用の在り方が論じられています。

(1) はじめに

探究的な学びを進めていくなかで、数学的手法や科学的手法を活用し、事象や課題に対する理解を深めたり、より適切な判断を下したりすることは、探究的な学びを深くし、単なる調べ学習で終わらせないための重要なポイントの1つです。

特に、探究の過程(「①課題の設定」→「②情報の収集」→「③整理・分析」→「④まとめ・表現」)における「④まとめ・表現」で述べられた主張が、根拠をもって組み立てられ、説得力をもった結論になるためには、数学的・科学的な手法を活用して「②情報収集」、「③整理・分析」をすることが重要となります。一方で、総合的な探究の時間の指導体制は学校によって様々であり、理科や数学の教員が必ず指導に関わっているとはいえない状況なのではないでしょうか。

本章では、探究的な学びの指導の中で、特に「②情報の収集」→「③整理・分析」の場面において、すべての教員が指導できる、数学的・科学的な手法の指導について考えていきたいと思います。生徒が自ら設定した課題に主体的に探究活動に取り組み、根拠を持った説得力のある主張を形成する学習活動を実現させていくには、どうすればよいでしょうか。

(2) 「探究の過程」における「数学的・科学的手法の活用」の位置づけ

数学的・科学的手法の活用の位置づけは、総合的な探究の時間の目標をもとにして考えることができます。総合的な探究の時間の目標は、次のとおりとなっています¹。(傍線部は執筆者による)

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

傍線部に示されているように、総合的な探究の時間では、生徒が、広範かつ複雑な事象を多様な

¹ 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」第4章総合的な探究の時間第1

角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の複雑な文脈や自己の生き方在り方と関連付けて問い続ける、総合的な探究の時間に固有のものの方・考え方を働かせることが重要です。一方で、探究の過程において各教科・科目における見方・考え方を、統一的・統一的に活用していくことも重要です。社会で生きて働く資質・能力を育成する上では、扱う事象や解決しようとする方向性などに応じて、生徒が自覚的に各教科・科目における見方・考え方を活用することで、教科・科目の学習と往還することが重要となります。

例えば、数学的な見方・考え方を働かせて、事象を、数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的・統一的・発展的に考えることや、科学的な見方・考え方を働かせて、自然の事物・事象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的視点でとらえ、比較したり、関係づけたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えることが挙げられます。

生徒が「④まとめ・表現」する主張を形成するために、「②情報収集」、「③整理・分析」において数学的、科学的手法を活用することで、教科・科目の学習と往還する学びが実現できます。

(3) 情報収集についての指導…その事実・データの収集方法は正しいか

主張・結論が説得力をもつためには、それを根拠づけるための情報(事実・データ)の収集が、正確に行われることが重要です。事実・データの収集方法には、観察、実験、アンケート調査、オープンデータの活用等がありますが、その方法が妥当であり、再現性があることが必要となります。

事実・データの収集の方法について指導する観点としては、次のようなものがあります。

- データを収集する目的と手段、対象は一致しているか
- どのような原理・理論をもとに、目的の事実・データを得るのか
- どのような結果が得られると予測し、それに対してどのような考察が行えるか、見通しが立っているか
- 用語、言葉の定義が正確に使われているか

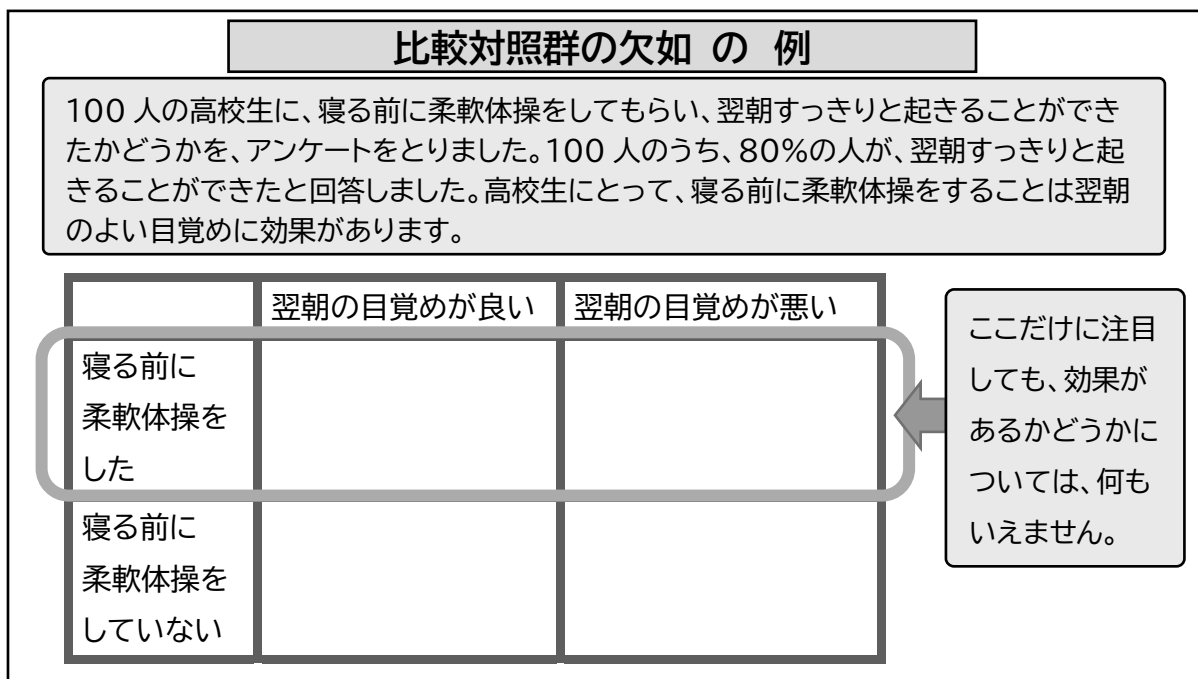
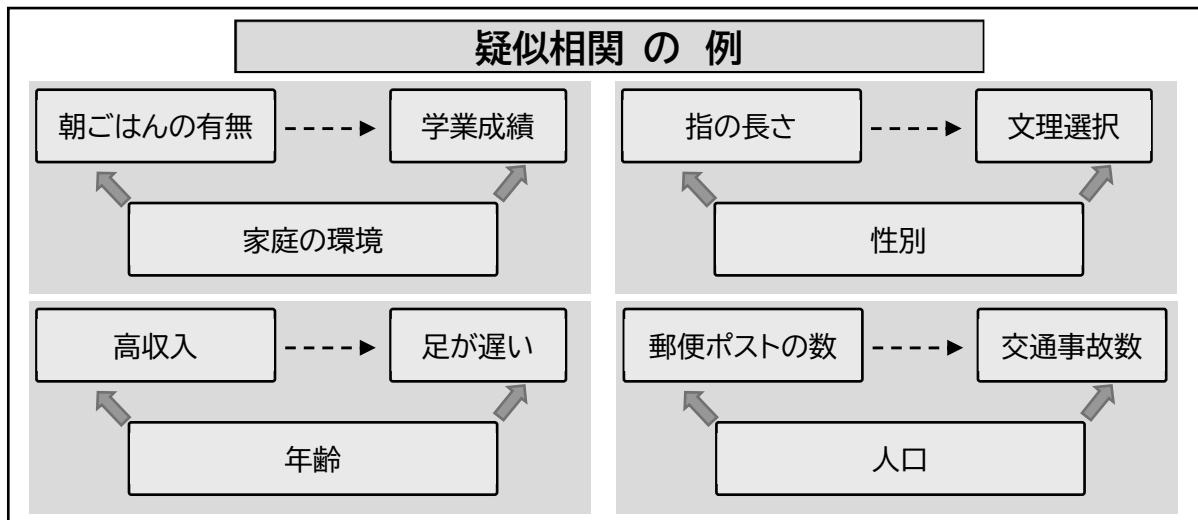
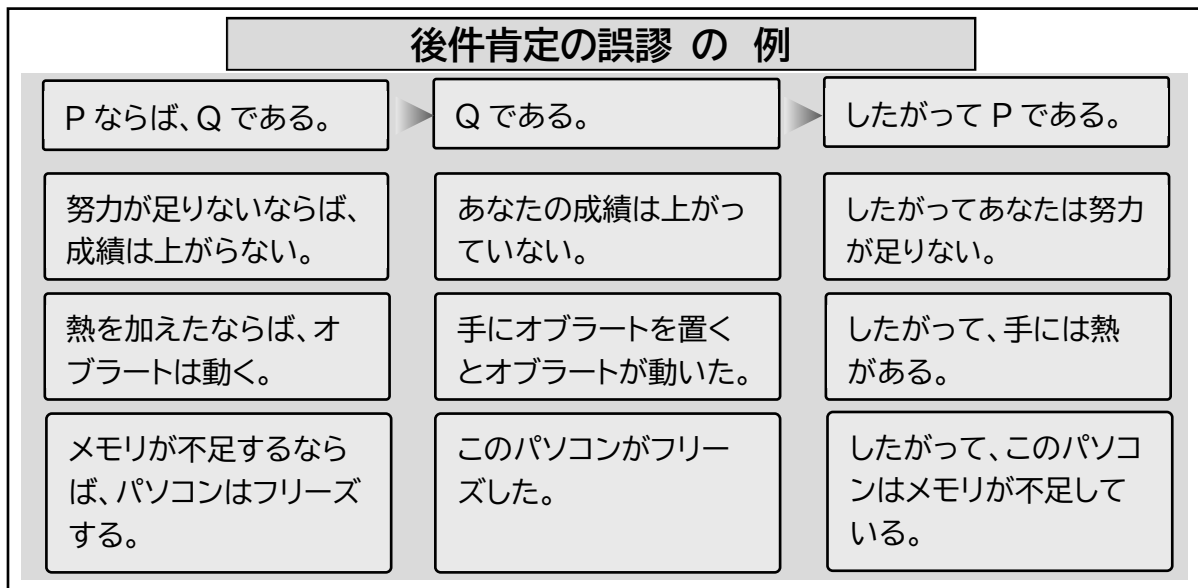
調査や実験によって得られた事実・データは、再現性を持つよう、できる限り詳しく、正確に記録をとることが重要です。文献調査の場合には出典を明記すること、オープンデータを収集した場合にはデータの出所を記録すること、アンケート調査をしたときには対象者の属性やサンプル数、実施時期、地域、配布数、回収数なども記録しておくことが重要です。また、データを加工した時には再現できるように計算式や関数式を残しておくことも重要です。

(4) 整理・分析についての指導…その推論は妥当か

整理・分析では、得られた事実・データから何が分かったのか、なぜそうなったのか等をしっかりと考察・議論することが重要です。そのためには、得られた事実・データがどのような性質を持つかを把握し、性質にあった分析手法や、可視化の手法を用いることが必要です。どの代表値を用いるべきか、どの表やグラフを用いて分析するか、議論をさせていきます。

得られた事実・データが正しくても、妥当な推論がなされなければ、説得力のある主張にはなりません。生徒が陥りがちな誤った推論には、後件肯定の誤謬(「Pならば、Qである。」→「Qである。」→「したがって P である。」)や、疑似相関(2つの事象に関係がないにも関わらず、交絡因子によって

あたかも関係があるかに見えること)、比較対照群の欠如(対照実験をしていないこと)などがあります。



これらの誤った推論に陥らないためには、対話により、多面的、多角的に考察・議論することが必要であり、まさに、数学的手法や科学的手法が発揮される場面です。例えば、後件肯定の誤謬 の例でいえば、成績が上がらない原因は努力だけではありませんし、オブラートが動く原因は熱以外にもあるかもしれません。パソコンがフリーズする原因もメモリ不足以外にもあるかもしれません。条件をそろえて実験計画を立て直したり、ほかの原因を考えたりと、多面的、多角的に考察・議論することが必要です。

(5) 留意点

一方で、教員が生徒の探究の先回りをして指示を具体的に出しすぎることや、最初から細かい「べからず集」や「ねばならない」のチェックリストを示しすぎるべきではありません。「やらされ感」や「こなし感」が出てしまったり、失敗を恐れて初動が遅くなったり、教員を頼って指示待ちになってしまったりするなど、探究の学びの良さが損なわれてしまうおそれがあります。教員が生徒の探究に対して、「正しいか、正しくないか」という視点で向き合うよりは、生徒とともに対象に向き合い、一緒に考えるという姿勢が大切です。

先ほど誤った推論として紹介した後件肯定の誤謬は、内容によっては、仮説を生み出す推論として積極的に用いられるべき推論で、新しい発見につながる可能性もあります。たとえば、「陸地で標高の高い地域から魚の化石が発掘された」という一つの事実から、「ここはかつて海であった」という仮説が成立します。たとえ収集した事実やデータが1つであっても、その事実やデータが生じる理由や原因を十分に説明できる場合には、仮説の1つとして考慮する価値があります。

生徒の主体的な学びを活かしながら、生徒同士や、生徒と探究対象との対話を促し、まずやらせて小さい失敗を経験させたり、そこから気付かせたりすることも重要な学びです。また、先回りして教えようとするより、生徒に先行研究を調べさせて説明させたり、途中で専門家や現場の方に整理・分析した内容について助言を求めたりすることなども重要です。

〔主要参考文献〕

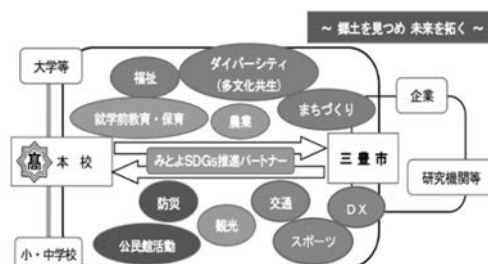
- 文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」(H30.7)
- 文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 理数編」(H30.7)
- 佐藤浩章「高校教員のための探究学習入門 問いから始める7つのステップ」(2021.3 ナカニシヤ出版)
- 岡本尚也「課題研究メソッド2nd edition よりよい探究活動のために」(2021.3 啓林館)
- 総務省統計局「なるほど統計学園」<https://www.stat.go.jp/naruhodo/index.html>
- 総務省統計局「統計学習の指導のために」<https://www.stat.go.jp/teacher/index.html>
- 向井大喜、松本伸示「大学生の仮説検証活動における演繹的推論過程の分析」(2021理科教育学研究)

第IV章 リーディングスクールにおける実践

この章では、リーディングスクール各校の実践研究においての、取組の基本となった考え方や2年間の取組の成果をまとめています。

1 郷土への理解や郷土愛

高瀬高校では、「高瀬高校ミライ塾 ～郷土を見つめ 未来を拓く～」と題したプロジェクトで、三豊市と連携し、「郷土への理解や郷土愛」を生徒に育む取組を続けてきました。



(1) 郷土と関わる中で学ぶことの意義とは？

① 地域や社会で自分らしく生きていく生徒を育てる

地域の課題に最前線で取り組む三豊市職員の話を生徒は真剣に受け止め、解決策を考えます。そんな体験の積み重ねが自信や自尊感情、責任感を育み、生涯にわたって、地域の未来をよりよくしようとする志につながっていくと考えています。

また、地元自治体や大学、企業等と連携・協力し、持続可能な開発目標(SDGs)も踏まえながら、地域の課題を探究し解決を考えることは、郷土への理解を深めるとともに、世界中の多様な課題解決への挑戦にもつながります。

さらに、地域の課題に真剣に向き合う大人の多様な生き方に触れることで、地域や社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく姿勢を育てることができます。

② 地域との協働を通して、生徒に成長をもたらす

地域と協働することで、「身近な課題に取り組むことによる探究的な学びの充実」と、「学校の中だけではできない多様な社会体験」を通じた生徒の成長が期待できます。

公民館活動をテーマとした生徒たちが、三豊市公民館の方と協働して「変えようみんなの公民館」キックオフミーティングを企画・実施し、地域の方にも御参加いただきました。ワークショップ形式で、理想の公民館の姿についてアイデアを出し合うなどの話し合いを行いました。

「地域をよくするのはそこに住む人々であり、どこかの誰かではないということを実感した。自分たち自身で三豊市を住みやすいまちにしていくきっかけとして公民館での活動を積極的に行い、たくさんの人を巻き込んでいきたい。」生徒たちは様々な業種、世代の方と意見を交わす中で、公民館の課題や展望について、自分のこととして具体的に考えられるようになっていきました。イベント実施などの社会体験を通して生徒たちは自信をつけ成長しました。

高瀬高校ミライ塾を始めて3年目、高瀬高校だったら地域課題探究活動ができるから入学した

という生徒がでてきています。中には入学当初から三豊市の「みとよ探究部」¹にも所属して活動する生徒もいます。このような生徒が活躍できる学校でありたいと考えています。

③ 地域活力に貢献する体験を

将来を予測することが難しい時代、香川県においても少子高齢化や人口減少、それに伴う地域活力の低下が懸念されています。生徒が地域に飛び出して、様々な活動に取り組むことは、それだけで地域の大人たちに元気をもたらし、地域活力の向上につながるものです。

生徒にとっても、郷土における探究活動は、地域の発展に自らの力で貢献できたという感覚や、自分を育ててくれたかけがえのない場所として郷土を思う気持ちをもたらし貴重な機会となることでしょう。生徒が将来どのような人生を送るかは人それぞれですが、どのような境遇にあっても郷土香川に思いを寄せ、そのつながりを大切にしながら育んでいきたいと思えます。

また同時に、地域の課題に主体的、協働的に取り組み、解決策を生み、新たな価値を創出することのできる資質・能力の育成が高校には求められています。この意味でも、地域の中でリアルな課題に向き合い、探究活動を通して学ぶことには大きな意味があります。

(2) 育成をめざす資質・能力

総合的な探究の時間で育成をめざす資質・能力を、「郷土への理解や郷土愛」との関わりの中で次のように捉えています。

① 知識及び技能

ア 情報を集める力

聞く(聴く、訊く)力、記録する力(メモや ICT 機器を活用した記録)、図書館や ICT の活用

イ 課題解決に必要な知識

自らが取り組む探究課題に関わる基本的な知識、各教科での学び、SDGsに関わる知識

② 思考力、判断力、表現力等

ア 情報を整理・分析する力

論理的思考力、統計的手法の活用、「考えるための技法」²の活用

イ 見いだす力

課題を見いだす力、新たな価値を見いだす力、進路を見つける力

ウ 伝える力

文章を作成する力、資料を作成する力、話す力、議論する力

③ 学びに向かう力、人間性等

ア よりよくなろうとする力

自己理解・他者理解、学ぶ意欲、価値を学ぶ、地域をよりよくしようとする志

イ 繋がる力

地域と繋がる、仲間と繋がる、考えと考えを繋ぐ

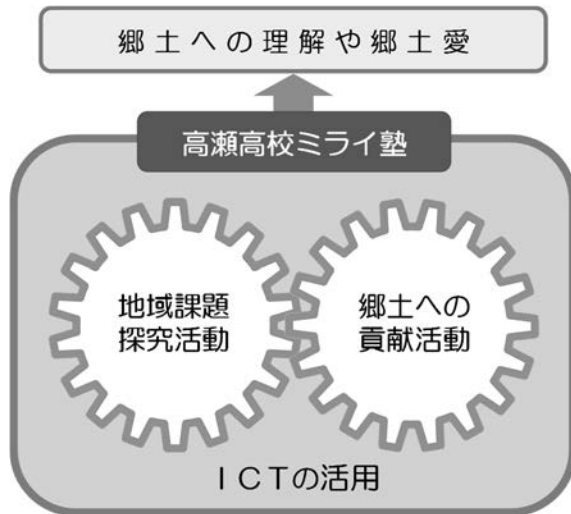
¹ 市内の中学生・高校生が身の回りの課題解決や地域の魅力発信に関するテーマで探究学習を行う、三豊市による取組。

² 考える際に必要になる情報の処理方法を「比較する」「分類する」、「関連付ける」のように具体化し、技法として整理したもの。「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」第7章4 95ページ

(3) プロジェクトの全体像は？

① 「地域課題探究活動」と「郷土への貢献活動」を両輪として

高瀬高校では、「郷土への理解」を深め、「郷土愛」を育むため「地域課題探究活動」と「郷土への貢献活動」を両輪として取り組んでいくことを重視しています。



「地域課題探究活動」は、三豊市との連携をもとに、1年次の「総合的な探究の時間」を中心として実施しています。生徒がそれぞれの興味・関心に沿った探究を行えるように、個人研究を原則として取り組ませています。

「郷土への貢献活動」は、部活動単位や希望者のグループ単位で実施しています。従来から行ってきた活動も多くありますが、単なる校外での活動にならないように、活動を通して郷土を知り、貢献を通して郷土の一員としての自覚を深めることで「郷土への理解」を深め、「郷土愛」を高められるような意識付けを重視しています。

(4) どのような取組を行っているか？

【地域課題探究活動】

① 三豊市との連携

○ 地域の現状や課題の聴き取り(三豊市の市長と各課からのメッセージ)



市長から市の現状や力を入れていること、高校生に求めていることについて直接話を聴きます。また、各課からそれぞれが抱える課題や現状を聴きます。後でどのような情報が必要になりそうかの見通しをもってメモを取ること、課題を考えながら聴くことを指示します。



○ 探究したい分野の選択からテーマ設定へ

各課からのメッセージを聴いた上で、「地域のミライを見据えた課題研究」として、「まちづくり」「観光」「DX」「就学前教育・保育」「ダイバーシティ」「交通」「農業」「防災」「スポーツ」「公民館活動」「福祉」の分野から自分が探究したい分野を選び、探究テーマを設定します。

生徒自らが分野を選択することは、自己決定の機会となり主体的な取り組みにつながります。探究テーマの設定は、毎年担当教員も苦勞をしているところですが、少しでも課題を自分ごととして捉えるために興味・関心のある分野を自ら選択させることを大切にしています。

○ 地域の方々との関わりを通じた学び



三豊市役所の各部署と連携をとりながら、探究活動を進めます。探究する分野ごとに地域の方を本校に招いての「地域の方を囲む会」では、地域の方も「高瀬高校の先生」です。また、必要に応じて、生徒は市役所等に出かけていき、そこでの多様な大人との交流の中で社会への関心を高めていきます。自分の探究していることが誰かの困りごとの解決になったり、

誰かを笑顔にさせたりするという意識できるような声かけを心がけています。

地域に出かけることには、様々なデータ(数字)の後ろ側には多様な人の生活があることを知るという意味もあります。地域が学びのフィールドになります。

三豊市では生徒の探究活動の様子を市の広報紙やWEBサイトで取り上げていただいております、本校生の活動を地域に知っていただくとともに、学校の魅力発信の機会にもなっています。

② 三豊市について、他地域との比較を通して考えさせる

希望に応じて複数のグループに分かれ、様々な地域の様子を探る校外研修を実施しました。「宇多津町コース」では、香川短期大学の教授に、宇多津町と三豊市仁尾町をまちづくりや交通整備の観点から比較する内容の解説をしていただきました。生徒からは、「校外学習では、現地ではしか得られないものを見ながら、大学教授からお話を聞くことができた。これまで、三豊市ばかりに目が向いていたが、他の地域と比較することで、より三豊市について理解を深めることができた」という感想が聞かれました。



地域を離れたところから見る機会を作ることは地域課題の探究を深めるために有効です。

③ SDGsへの理解を深めさせる



「SDGs未来都市」に選定されている三豊市とともに、「みとよSDGs推進パートナー」として、SDGsの視点から課題解決への道を探求しています。

生徒のSDGsへの理解は「ただ知っているだけ」という状態だったため、理解を深める上で効果的とされるカードゲーム「2030SDGs」を用いたワークショップを、公認ファシリテーターを招聘して実施しました。これがきっかけとなり、生徒は地域課題に取り組む際に、環境への意識や社会的責任を考えるようになりました。自己理解や他者理解の促進も期待できます。「自分のことも大切だけど、もっと周りのことを見て行動するともっと良くなると思った」「知識があり、気づくことができても行動しないと何も得ることができないので少しのことからでも行動していこうと思った」「個人だけでは何もできなくて、協力をしていくことでバランスが保たれていくこと



がわかった」「SDGsの目標を達成するためにはたくさんの人の協力と考える力が必要だと思った」「みんなとの交渉が難しくて楽しかった」など生徒の様々な「気づき」を大切にします。教員集団が生徒より先にこのワークショップを経験しておく、より効果的です。

④ データサイエンス講演会

三豊市と WiDS SHIKOKU の協力のもと、第一線で活躍するデータサイエンティストを招聘し、データサイエンスについて学ばせました。講話を通して、生徒の身の回りのデータ活用の状況や、世の中の動きを数字の傾向として見える化できることなどを学ばせることができました。

世の中に溢れる情報を正しく扱うためのデータリテラシーを身に付けさせることは、探究活動におけるデータの活用や、根拠に基づいて解決策の提案を行う能力の育成につながります。データリテラシーを学ぶことで生徒に多角的な視点で考え主体的に考える力が育っていくと考えています。

また、生徒が地域で活躍するデータサイエンティストについて知ることは、将来の進路や働き方に対する視野を広げることにもつながりました。

⑤ 中間発表会、成果発表会

10月に中間発表会、3月に成果発表会を実施し、探究活動のマイルストーンとしています。

生徒相互の批評では、建設的な批評を受けさせることがポイントです。そのため、アドバイスや批評をする際、研究やプレゼンテーションの改善に役立つ具体的な批評を行うよう指導します。

今後、オンラインで他県の高校とつないで発表会を実施したいと考えています。他県の高校生からも助言や批評をもら



うことで、生徒の探究活動へのモチベーションが向上することが期待されます。特に、地域課題の探究をしている他県の高校とつながっていけば、学校の枠を超えたテーマコミュニティをつくることで、教員の専門性を活かしながら生徒どうしも学び合える環境をつくり、学びのレベルを上げることができると考えています。

⑥ ICT の活用

平成28年度(2016年度)に、総合クラスの生徒に1人一台端末を整備したのをきっかけに、他校に先駆けて端末の整備とその活用に取り組んできました。

令和2年度(2020年度)からBYADにより新入生全員がタブレットを購入し、令和4年度からは、全校生が自分のタブレットを持って授業に臨んでいます。県内の県立高校では最も早く1人一台端末の環境を実現しました。



いつでもどこでも調べられる、情報を共有できる、模造紙にまとめるより格段に発信が早い、な

どの利点を活かし、「総合的な探究の時間」においても「課題の設定」や「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」の各場面でタブレットを活用しています。アンケートをフォームでとったり、プレゼンテーション用のスライドを画像や動画を取り入れながら工夫して作り上げたりしています。

授業支援クラウドを用いて、学習状況や学習成果を教師と生徒の間で共有し、進捗状況を把握するようにしたり、時間ごとの学びや活動の振り返りを残し、ポートフォリオ化して1年間の学びの振り返りを支援したりすることにも取り組んだりしています。

⑦ 評価方法の工夫

生徒の進歩の状況を、観点に応じた適切な方法で評価し、積極的にフィードバックするようにしています。それを通して生徒自身も自分のよい点や進歩の状況に気付けるように留意します。

○ 郷土理解及び郷土愛の深まりに関する評価

1年生5月(活動前)と2月(活動後)にアンケート調査を実施し、意識の変化から「郷土への理解や郷土愛」の育成を評価します。

○ 探究活動を行うための資質・能力の向上に関する評価

次のように生徒の相互評価・自己評価の活動を行わせ、それらを踏まえつつ教員による評価を行います。

ア 相互評価の活動

発表会の際、「発表態度」「調査の方法」「レポートのまとめ方」「結論」の4項目について、評価表を用いて相互評価をさせます。

イ 自己評価の活動

発表しての感想や1年間の活動について、良かった点、改善点などを文章表現で自己評価させます。また、授業支援クラウドを用いて、時間ごとに学びや活動の振り返りを残し、ポートフォリオ化して1年間の学びを俯瞰して振り返らせ、自己評価をさせるようにします。

文章表現の、「三豊市のことを考えているうちに、もっとよい市にしたいと思った」「三豊市のことを深く考え、より理解することができた。もっと詳しく知りたいと思った」などから「郷土への理解と郷土愛」の育成状況も見取ることができます。

ウ 教員による評価

学習や活動の状況の観察やポートフォリオによる評価の他、発表会では評価表を用いて評価しています。

【郷土への貢献活動】

○ 少年野球教室「高瀬エンジョイベースボールプロジェクト」

野球部が地域の小学生を招いて実施する野球教室です。生徒による企画・運営・実施であることが大きな特徴です。野球を通して地域の子供たちの成長のために貢献をする意識をもつことで、地域の中にいる自分を再認識することができます。

活動の様子は学校祭で展示して報告しています。



○ 陸上競技部の「合同練習会」



市内の中学生を招いて合同練習会を実施しています。陸上競技の楽しさとともに触れつつ、近い年代の生徒同士で交流を深めます。中学生を対象とするため、本校生が教える内容も高度なものとなり、生徒にとっては的確に教える難しさとともに、陸上競技の楽しさを改めて感じる機会になっています。また、地域で同じ競技に取り組む

生徒同士の連帯感が生まれることや、それが発展し、競技を通じた年齢を超えたつながりが築かれていくことにも留意して開催しています。

○ 吹奏楽部の「参加型ワークショップ」

世界で活躍する郷土香川出身の奏者を招いての参加型ワークショップです。一流奏者のメソッドを体感し演奏技術や表現力の向上を図ることを目的とするだけでなく、世界を見て歩いた経験から、郷土香川をどのように捉えているのかについてお話しいただく時間を設けることで、生徒が郷土を見つめ、郷土を知る機会になるように実施しています。また、近隣の県立高校と合同で実施しているため、同じ地域の生徒同士が交流し、お互いの学びを確かめ合う機会ともなっています。



○ 生物部の「科学体験交流会」



高瀬中央保育所の年長児を招いての、科学体験を交えた交流会です。生徒が主体となって実験演示を行ったり、スライムづくりのガイドをしたりします。また、「発達と保育」の授業選択者も参加します。生徒の感想に「交流会を通して、改めて人に教えることの難しさを認識しました。子供たちに生物について興味を持ってもらえるような説明の仕方を勉強してみようと思います。」というものがありません。実際に幼児と接することで授

業での学びに現実感が生まれます。

○ グローバルな視点を得る「異文化交流」

「異文化理解」の授業選択者とハワイの高校生とのオンライン交流です。三豊市国際交流協会の協力を得て行っています。グループに分かれ、お互いの国・地域や学校の紹介動画を作成し、ハワイの生徒は「日本語」で、本校生は「英語」で発表します。

生徒は紹介動画を作成する際に、日本や郷土のことについて、外国の高校生に説明するためには知識が全く足りないことに気づき、深く理解することの必要性を再認識します。グローバルな視点を意識せざるを得ない場面を設定することは、「郷土への理解や郷土愛」の育成のためには大変有効です。



○ 地域の行事での「ダンス発表」

スポーツコースの生徒による「専門体育」の授業の学習成果として、地域の夏祭りや地域の文化祭、イベント等でダンスの発表を行います。演技の後は、ボランティアとしてその行事を手伝います。生徒は普段話したことのない地域の方とも、活動を通して気負わずに交流することができ、地域への愛着が無理なく高まっていく取組であるといえます。また、地域の方に「ありがとう」と言葉をいただくことも多く、地域の方に認められたという思いや地域の方との信頼関係が生まれ、生徒の自己肯定感の向上にもつながっています。

○ 清掃活動「高瀬クリーン作戦」

高瀬駅および本校周辺の広域にわたり、生徒の自主的な参加で地域への日頃の感謝の気持ちを込めて、年 2 回清掃活動を行っています。



(5) 成果と課題

三豊市担当課の方と一緒に取組みを模索してきたことで、連携する外部機関を紹介していただくこともあり、多様な視点で取組を考えることができました。生徒は市役所等の地域の方々と接する機会を得たことで、様々な考え方や意見に触れる事ができ、自己の生き方についても考えるきっかけとなりました。

アンケート結果(資料編に掲載)から、本校生は地域課題を「自分ごと」として捉え、その解決を前向きに考える生徒が多いことがうかがえます。そのような生徒の1年生での学びが2、3年生での学びにつながるよう3年間を見通した「総合的な探究の時間」のカリキュラムの改善が課題です。また、多様な評価を実施できるよう職員研修を充実しながら、生徒とともに学びを進め、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて実践を続けていきたいと考えています。

[参考文献]

文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」(H30.7)

文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 中学校編」(R4.3)

2 イノベーション創出力

善通寺第一高校では、「ロジカル思考」・「デザイン思考」による地域の魅力創出プロジェクト」と題した取組を進めています。この取組により、本校がどのようにして「イノベーション創出力」を生徒に身につけさせようとしているかについてご紹介します。

(1) 「イノベーション創出力」を通して学ばせたいこと

私たちが生きる現代社会は、世界的に情報化やグローバル化が進展しており、技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しています。一方で日本国内に目を向ければ、都市の過密化、地方の過疎化、少子高齢化社会といった社会問題や、毎年のように襲い来る大規模自然災害等、様々な問題が山積しています。このような予測不能で価値観も大きく変わり続ける時代に、これから社会の一員となる高校生には、唯一の正解が存在しない課題に対し、個々で、あるいは集団で、その状況における最適解を導き出す力や、それまでにない新しい物事を創造するイノベーションの力が求められています。

本校の生徒は素直で穏やかで優しいという優れた美徳を備えており、協働の素地はできています。このリーディングスクールの取組をきっかけに、生徒に論理的（理性的）に他者と意見を交わす方法や楽しさを実感させ、協働して新しいものを生み出すという、さらなる喜びを味わわせ、生涯を通じて主体的に社会の課題に取り組む姿勢を育成したいと考えています。



(2) そもそも「ロジカル思考」「デザイン思考」とは？

○ ロジカル思考

ものごとを体系的に整理し、根拠と結論などの論理的なつながりを捉えながら、矛盾や飛躍のない筋道を立てる思考法です。因果関係を正しく把握して論理的に思考を整理しようとする際や、説得力のある論理的な結論を作り出して、それを他者に分かりやすく正確に伝えようとする際に効果を発揮する考え方です。

本校では、話し合いの場における基本的なルールや、説得力のある話し方なども含めて学ばせたいと考えています。

○ デザイン思考

製品に対する審美力を持ち、ユーザーが潜在的に求めている価値等を追求することで得られた抽象的なアイデアから、実現可能なプランに落とし込み、全く新しい価値を生み出す思考プロセス（手順）のことです。ビジネスや日常生活において、あらゆる分野の問題解決・イノベーション創出に活用できます。

【基本的な考え方】

1. ユーザー中心
2. チームメンバーやユーザーとのコミュニケーションを重視
3. 試作→テスト→改善を繰り返す
4. 問題解決の方法は1つではなくてよい



(引用:香川大学 Web サイト https://www.kagawa-u.ac.jp/kagawa-u_ead/concept/)

(3) 育成をめざす資質・能力

「ロジカル思考」「デザイン思考」の知識としての理解も大切ですが、本校では、それらの考え方を
知ること、「生徒が発想の幅を広げる」「自らの探究活動を客観的に把握する」「創造的な探究活動
の進め方をイメージし実践する」といった形で、高度な探究活動のために活用できるようになること
を、より重要視しています。

そのため、課題解決に必要な様々な資質・能力に加えて、「ロジカル思考」が示す「他者の話を聞いてその考えを認めつつ、自分の意見もわかりやすく他者に伝え、互いに納得する」という協働の在り方や、「デザイン思考」の基本的な姿勢である、他者と協働する態度を身につけさせる必要があると考えています。そこで本プロジェクトでは、「思考力」「表現力」「復元力」を鍛えることを重視し、多様性社会で他者と協働できる人材の育成のために、育成をめざす資質・能力を次のように捉えています。

- ① 他者と協働する態度:自他の個性と価値観を認め合い、協力して課題に取り組む態度
- ② 復元力(打たれ強さ):協働の中で、他者の意見を受け入れつつ、自分の意見も大事にする力
- ③ ロジカル思考:論理的な根拠を示し、説得力のある論証をする力
- ④ 表現力:聞く人を引き付ける声や態度、手法で自分の意見や知見を効果的に表現する力
- ⑤ デザイン思考:対象を洞察して困りごとに共感し、自分ごととして捉え、適切な課題を設定する力

これらの資質・能力は学力の3つの観点に分けて捉えることが難しい部分もありますが、おおむね「知識及び技能」と関連が深いものは「③ロジカル思考」、「思考力、判断力、表現力等」と関連が深いものは「④表現力」及び「⑤デザイン思考」、「学びに向かう力、人間性等」と関連が深いものは「①他者と協働する態度」「②復元力(打たれ強さ)」であると考えられます。

これらの資質・能力を、探究学習を中心にしつつ、カリキュラム・マネジメントの考え方に基づいて、各教科の学習においても育成を図ります。

(4) 総合的な探究の時間における指導の流れは？

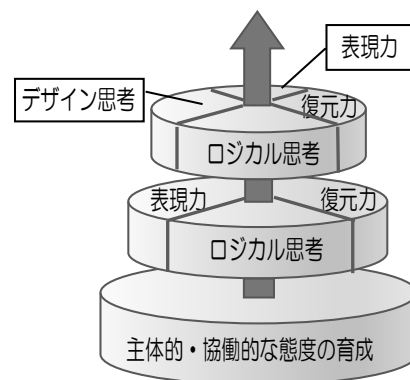
① 基本的な方針

総合的な探究の時間では、「①講義・演習を通じたイノベーション創出に関する知識や技能の獲得」→「②自ら課題を設定した探究活動の中での知識や技能の活用」という流れを、各学年で繰り返します。学年ごとに学びの段階を進めることで、最終的には生徒が身に付けた力や、活動を通して獲得した自らの問題意識、「志」を進路実現に結びつけられるようになることをめざしています。

①の講義・演習は香川大学創造工学部造形・メディアデザインコースの協力を受けていますが、将来的には本校教員が実施していく予定です。

②の探究活動では、PDCAサイクルを複数回重ねながら知識や技能を身に付けさせ、鍛えることを重視しています。

生涯を通して探究し続ける態度



② 3年間の指導の流れ

第1学年

○チームワーキング講座

他者と協働するためのスキルや知識を身に付けるため、自己理解や他者理解、効果的なチームマネジメントの方法を学ぶ。

チームワーキングの基本的な考え方に「チームを作ると、メンバーとうまくやっていく努力をしなければならないが、最初から相性のよいチームなら最小限の努力ですむ」という考えがあります。webサイトで「16の性格診断テスト」を受け、あらかじめ自他の性格類型を知った上で、グループを作って複数のワークを行うことで、似通ったタイプだけで作るグループよりも、異なるタイプを集めて作ったグループの方が創造性は高くなるということを感じます。



生徒の感想より

同じタイプの人だけだと共感することが多くて発言することがなくなっていったけれど、違うタイプの人と話し合うといくつも意見が分かれるので発言が多くなったのを感じました。

○ロジカル思考講座

社会に必要とされるアウトプットを身に付けるため、思考力を強化する知識やスキルを学ぶ。

未来予測が難しく、ニーズの多様化した現代では、効率的に正解を求める従来のやり方ではなく、新たなやり方で独創的に最適解を求めること、また、それを他者に分かりやすく伝える論理力が必要とされています。そこで、「皆がそう言っているから」「今までそうやってきたから」といった、根拠の弱い思考に陥らないために、物事や考えをわかりやすく伝えるための思考法やツールについて学びます。知識を学んだあと、論点を絞って枠組みで考える演習として、「100円ショップの商品のセールス大会」を行います。



教師の視点

生徒は新しい思考法に刺激を受けたようでした。演習では、普段大人しい生徒が生き生きと活動しており、新たな一面を見ることができました。

○探究・スキル学習

情報収集・分析の仕方、問いの立て方など、探究活動に必要な知識や技能を身に付け、「善通寺市の課題」をテーマにプチ探究に取り組む。

善通寺市役所の職員による善通寺市の魅力や課題についての講話をもとに、生徒がリサーチクエスチョンを設定して探究活動に取り組みます。

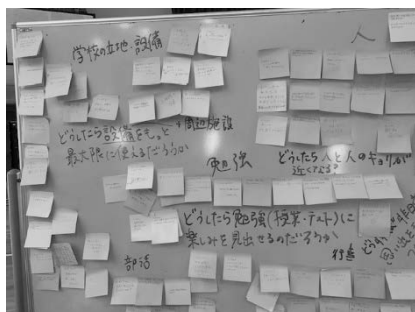
教師の視点

善通寺市の課題には毎年取り組むため、テーマや活動、得られる結果が似通ってしまうという実態はあります。しかし、学校の所在する地域についてまず知る事、地域の大人に自分たちでアポをとり、関わることは、生徒の主体的、協働的な態度の育成に寄与すると考えています。「善通寺市の名産品であるダイシモチムギの消費量を伸ばそう」というテーマは毎年複数のチームが取り組みますが、その方法は様々で、中には市の職員も驚くようなアイデアが飛び出します。「新庁舎周辺の再開発に関連して、人の集まるアイデアを出してほしい」など、直接市から与えられた課題に取り組むこともあります。探究として、結果よりも過程を重視するという視点も大切だと感じます。

○デザイン思考講座

不確定性の高い現代社会で自ら問いを見つけ、最適解を導く方法を「デザイン思考」の観点から学び、探究活動に生かす。

まず講話のなかで、デザイン思考の一連のプロセスを順にたどり理解を深めます。またその中で、「問題定義(リサーチクエスションの設定)」や「アイデア創出」のための着眼点や実践的な考え方についての説明も行われました。その後で、「善通寺第一高校を日本一楽しい学校にするために、どうしたら私たちは〇〇できるだろうか。」という仮説を含む問いを作る演習を行いました。生徒は難しい課題に戸惑いながらも、大学生のサポートを受け、楽しく活動しました。



○探究

探究の授業において、自らの興味・関心に基づき身の回りから問いを見つけ、SDGsの視点も取り入れ実践的な活動に取り組む。

自分の希望する進路や興味・関心に基づき、「①経済・文学分野」「②教育・国際分野」「③家政・生活分野」「④医学・看護分野」「⑤理・農・工分野」の5つの分野から一つを選び、チームで問題解決に取り組みます。

有効なテーマを立てるため、テーマと自分との関係を考えさせる「じぶんごと化」と、前提を廃して観察・洞察することにより、本当に困っている人がいる「困りごと」を見つけることを重視しています。

「復元力」を身に付けるためにはPDCAサイクルを複数回重ねる必要があるため、テーマ発表会、中間報告会、最終報告会と、アウトプットして外部の方の指導助言を受ける機会を設けています。

身近な問題は根っこの部分では持続可能な社会を目指す世界共通の目標であるSDGsとつながっています。ミクロからマクロへ、視点の転換を促し、視野を広げます。

第3学年

○ロジカルコミュニケーション講座

探究を通して得た、自らの課題に対する知見や意見を効果的に発信する表現力を身に付ける。

3年生の探究の目的は、1、2年生でやってきたこと(過去)と進学先、あるいは社会に出てやりたいこと(未来)とを結びつけ、自分の物語として伝えられるようになることです。

そのため、2年生で学んだロジカル思考の枠組みを用いて、課題に対する意見と、それを支える根拠を効果的に論じる演習を行います。

○探究

表現への意識を高め、「論理的思考力」や「表現力」を鍛えるとともに、自分の問題意識や「志」を、進路実現に結びつける。

2年生でグループで取り組んだ探究のテーマを、さらに個人で探究して深め、レポートにまとめます。最終的には探究の成果を小論文や面接においてどのように表現していくかに繋がるような指導も行います。

○全校的な取り組み

「ロジカル思考講座」の内容の一部である「100円均一ショップの商品をアピールしよう」というワークを独立させ、全校でプレゼンテーション大会を実施し、優秀者や優勝者を決める。



教師の視点

担任がファシリテーターを務めた。実施後「最初はどうか不安だったが、生徒が楽しんでやっていたので良かった。」といった感想が聞かれた。

- ・各教科の授業で「ロジカル思考」を鍛える学習を実施し、共有する。
- ・生徒の「復元力」を鍛えるため、「質問力」を身に付ける方法について、教員間で議論し、実践していく。

③ 評価のあり方

担当者が達成度を3段階で評価します。次の表は、2年生の総合的な探究の時間における、評価規準の達成度の判断に用いるものです。

観点	評価項目	達成したと認められる生徒の姿
知識・技能	③ロジカル思考	適切な時期に効果的な方法で調査活動を実施し、集めた情報を分析することができた。
	地域との連携	自ら積極的に地域の人と関わることができた。
思考・判断・表現	⑤デザイン思考	課題を発見して困っている人に共感し、適切かつ具体的なテーマを設定し、問題について深く考え、自分事として捉えることができた。
	④表現力	成果をまとめて分かりやすく発表することができた。
主体的に学習に取り組む態度	①他者と協働する態度	自他の考えを大事にしつつ仲間と協働して探究に取り組むことができた。
	②復元力(打たれ強さ)	他者の意見や批判を受け入れ、改善することができた。
	将来社会の形成者としての自覚の高まり	社会の一員としての役割を理解しその自覚が大いに高まった。

(5) 取組を校内に浸透させる工夫

① 目標の可視化

「協働のための基本的な態度や表現力を身に付ける7つのポイント」をラミネート加工し、HR教室に掲示するとともに全職員に配付しています。探究だけでなく、日々の授業で繰り返し取り組むことで身に付くものと考えからです。

② 職員の共通理解

以前から生徒を対象に「探究の手引き」は配付していましたが、令和4年度から教員に向けて「探究指導の手引き」を作成し、4月の職員会議で配付・説明することにしました。本校ではそれぞれの学年の担任・副担任が探究の指導を担当しており、本格的に探究活動に取り組むのは2年生の時です。しかし、探究のカリキュラムはそれぞれの学年で独立し

リーディングスクール「イノベーション創出力」の取り組み
協働のための基本的な態度や表現力を身に付ける
7つのポイント

1. 教師の問いかけに対し、うなずく、目を見て話すなど、双方向的なコミュニケーションをしよう。
2. グループ活動に積極的に取り組もう。4つの性格類型を考慮したグループを結成しよう。
3. グループ活動では、話している人に対し、うなずく、目を見て話すなど、お互いに話しやすい雰囲気づくりをしよう。
4. 1分間スピーチやプレゼンテーションの際には、意識して大きな声で話すようにしよう。
5. 時間を意識しよう。モニターのタイマーで実際に時間を確認しながら作業しよう。
6. 自分の考えを話す時には3つのポイントに絞って話したり、「主張—根拠—具体例」の構成で述べたりしよう。
7. 上記のポイントを常に意識しよう。

※グループ活動では、一人の意見ばかりが通る状況は避け、グループ全員が発言できるよう協力しよう。
※他者の意見を聞くときは「なぜ?」「どうやって?」「本当?」など質問や疑問も考えよう。

① 7つのポイント

ているのではなく、全て1本のPDCAサイクルのらせんの線上にあります。リーディングスクールの目的を始めとし、3年間の指導の流れやそれぞれの目標、他学年の取組などについて共通理解を図ることで、より教師が一体となり、効果的な実践が行えると考えました。効果は出ていると感じます。テーマ決定、校外学習、探究活動といったそれぞれのフェーズで担当者が手引きに立ち回り、注意すべき点を確認できるようにしています。

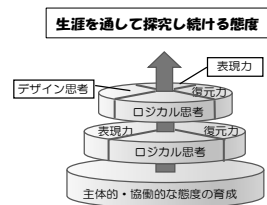
I はじめに

平成32年度から始まった「探究」は、指導書も無く、専門の指導者もいない中、試行錯誤で進捗しつつあります。係としても、何とか体裁を整えるのが精いっぱい、先生方の「何をどう指導していいかわからない」「なぜ、やらなければならないのか」といった戸惑いを置き去りにしてしまっていた感があります。それでも、年を重ねるごとに少しずつ、ほんの少しずつではありますが、改良が加えられ、より良いものになっている実感があります。この度、いままでの実践を振り返って、改めて探究の意義や目的、なかでも、本校では探究で何をを目指すのかということを示し、職員全体で共有したいと思います。

1 「総合的な探究の時間（探究）」とは？

これまでの高校教育では既存の知識を教えることが重視されていたのに対し、正解の無い問いに対し「自ら考える」力をつけることが求められるようになり、課題解決学習である「探究」が始まりました。また、小中学校が地域との結びつきが強いことに対し、高校は進路実現に重きを置き教科の学習しかしてこず、地域との連携はほとんど無かったといえるでしょう。そうして進学や就職で県外へ転出した生徒は、そのまま地域とのつながりを感じないまま個人の充足だけを目指して生活してゆく…。そのような現実に楔を打ち、高校生が在学中から地域社会の問題に興味を持ち、自分事としてとらえ、探究活動の中で地域の企業やNPOで活躍する人に接し、刺激を受け、将来社会で自分が輝ける姿を描く…。そんな壮大な期待が、「探究」には込められているのです。

2 本校の探究の目的



何を探究の目的とするのか、我々教員はどうしても成果や結果を重視しがちですが、もともと探究は「商店街の活性化」や「少子高齢化」など、大人でも解決できていない、答えの無い問題に取り組むもので、効果的な答えなど、見つけられなくて当たり前です。ですから探究で大事なものは成果ではなく、それを導くまでの過程で得られた自他の変容・成長と考えます。具体的には、①他者と協働する態度が身に付いたか。②協働の中で、他者

- 1 -

② 指導の手引き(冒頭部分)

(6) 成果と課題

ビジネスの世界で用いられる「ロジカル思考」「デザイン思考」といった概念について理解することは教員にとって難しく、最初は大学教授の講座を生徒と一緒に受講して学ぶという感じでした。それを少しずつ、探究や普通の授業にも取り入れられるよう校内での学びを進めていますが、まだまだ不十分です。しかし、まずは知る事が大事だと考えます。「ロジカル思考」「デザイン思考」の一端に触れただけでも、十分、その有用性が感じられました。今後多くの高校で取り入れられ、実践の報告や協議ができるようになると、香川県の高校生の論理力や思考力の向上が期待できると思います。過去2年にわたって塩江町で実施されている「かがわイノベーションプログラム」では、「ロジカル思考」「デザイン思考」について知ることができます。ぜひ、教員にこそ、参加していただきたいと思います。

生徒の表現力については、協働の場面を繰り返し設定することで、他者と協働することや集団の中で自分の意見を述べること、全体の前で表現することなどについて、大きく向上したと考えます。しかし、問いを見つけるための洞察力、根拠となるデータの収集能力、外部への発信力などはまだまだあまりついていません。教員がいつ、どのようなタイミングでどのようにサポートできるのか、結局は個々の教員任せになってしまっている部分もあるので、係として、学校全体でサポートできる仕組みを作ることが今後の課題です。

3 グローバル社会への対応

高松西高校では、「総合的な探究の時間」を中心に、日本や香川の魅力を世界に発信するとともに、世界や地域が抱える課題を自分事として捉え、その解決をめざす「西高発 COOL JAPAN」と題した取組を行ってきました。そうした中で、先の見えない、答えのない課題が山積する現代、そして、ヒト・モノ・カネが国境を越えて行き来する「グローバル社会」を生きる生徒たちに、どのような力が必要なのか、どうすればその力を養うことができるのかを考え、日々試行錯誤を続けています。



(1) 育成したい資質・能力

本校では「総合的な探究の時間」を MDP(マイドリームプロジェクト)と名付け、次のような目標を設定し、達成に向けて取り組んでいます。

本校における「総合的な探究の時間」の目標（令和4年度）

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することをめざす。

- (1) 現代社会が抱える課題について理解するために必要な情報を正確かつ効率的に集め、それらを基に探究の問いを立て解決策を模索する中で、問題解決に活用できる知識及び技能を身に付けるようにする。
- (2) 得られた知識に自分自身の考察やアイデアを加え、新たな知見を創造しようとする中で、論理的・具体的で、説得力のある文章作成とプレゼンテーションに関する技能など、思考力・判断力・表現力を磨く。
- (3) 多様な人々と連携して課題の解決策を探る中で、主体的に学ぶ姿勢を育てるとともに、さまざまな困難を他者との対話や協働などによって乗り越え、粘り強く解決に取り組む態度を養う。

こうした目標の中で、「グローバル社会への対応」に関する資質・能力として育成したいのは、次の4つです。

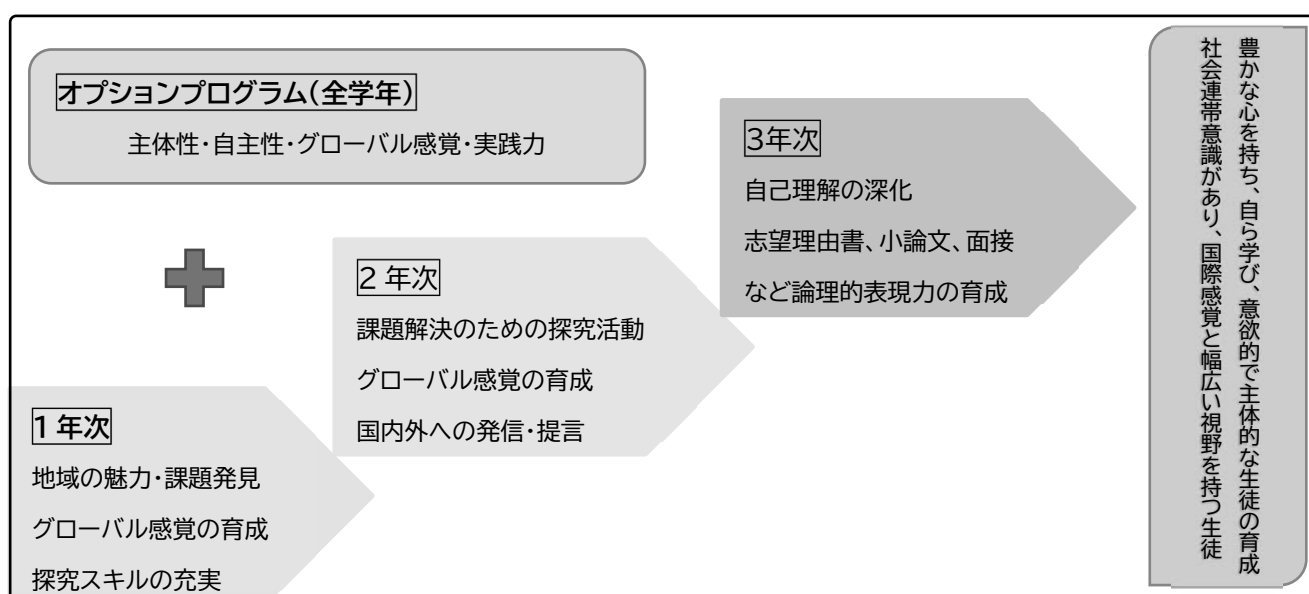
- ① 現代社会が抱える課題を自分事として捉える主体性
- ② 現代社会が抱える課題を多面的・多角的な視点から考察するグローバル感覚
- ③ 課題解決にむけて筋道立てて考える論理的思考力
- ④ 課題解決にむけて導き出した対策を実現する実践力

(2) 総合的な探究の時間を中心とした3年間の指導の流れ

本校の「総合的な探究の時間」では、1年次にはグループ単位、2年次には原則として個人単位の探究活動を実施しています。1・2年次とも、フィールドワークや講演会などを起点に、探究の問いを自ら設定し、探究活動を行い、中間発表における自己評価・他者評価を経てさらに内容を深め、ポスター発表を行うという流れになっています。

こうした探究活動の中で、「グローバル社会への対応」に関する資質・能力を育成するために、具体的に生徒に伝えていることは以下の4点です。

- ① 課題を自分事として捉える
- ② 課題に対する現状や対応策について、当該地域と他国・地域とを比較する
- ③ 課題に対する対応策や改善策を検討する際に、SDGsの視点を取り入れる
- ④ 課題解決にむけてアクション(具体的な行動)を起こす



(2) 具体的な取組の中で工夫していること

① 外部との連携

- ・1年生「ブラ☆きなし」(地元鬼無でのフィールドワーク)において、鬼無町の盆栽園の方や大学教授、ジオガイドの方々に講師を依頼しています。
- ・2年生 MDP の計画発表会、中間発表会、ポスター発表会における指導・助言を、大学教授、県や市の職員(令和4年度は危機管理課、瀬戸内国際芸術祭推進課、地域活力推進課、県立ミュージアム、高松市保健師)、県内企業(本校卒業生)、料理研究家(本校卒業生)等に依頼しています。
- ・講師は、本校教職員からの紹介や各種探究プログラム等で出会ったことをきっかけに依頼することが多いです。

(生徒からの感想)

- ・どういふうに探究活動を進めていくか悩んでいた時に、専門的な視点から親身になってアドバイスをたくさんしてくださったことが心強かったです。
- ・自分では気づかなかった間違いや直した方がよいところを、一から細かく教えてくださり、よく分かりました。アドバイスを参考に、自分なりに工夫してみることで、よりよいものになることに気づきました。

② 生徒が夢中になれる機会の提供

生徒たちには、人前で話したり、文章を書いたりすることを面倒がることなく、「自分もやればできるものだ」という感覚を持ってもらいたいものです。そこで、自分の好きなことや心動かされた体験を誰かと共有したいという思いが、何かを表現する原点であり、原動力となるようにしたいと考えています。

例えば、1年生の MDP 最初の活動として、各自が自分の好きなことについて調べ、クラス内で発表する活動を取り入れました。

(授業を担当している先生方の感想)

- ・多くの生徒が思っていた以上に熱心に調べていて、「高校1年生がここまでできるのか！」と驚かされた。

探究に今ひとつ乗り気になれない生徒たちも、様々な人やモノと出会い心を揺さぶられる体験をしたり、友人と協働したりすることで、意欲的に取り組む姿勢を見せることがあります。そこで、1年生全員が地元鬼無地区を散策し、地域の主要産業の一つである「盆栽」や、古墳などの史跡、地形や地質等について学ぶフィールドワークを行っています。



(生徒の感想)


- ・鬼無の盆栽が世界一なんて！知らなかった！！
- ・登下校時には気づかなかった鬼無地域のよさを知ることができ、これまでと見える風景が変わりました。

③ 教員同士の共通理解

2年生の MDP では活動単位を原則個人とし、自分の興味・関心、進路から問いを設定し、自分なりの答えを求めて探究活動を行うこととし、その個別指導を教員全員が分担しています。基本的には各教員の裁量で指導をしていますが、定期的に教育研究部から「探究通信」を発行し、探究活動における目的や進め方について共通理解を図っています。

【探究通信の例】

R4年5月号



通信

正門付近のつつじが満開になり、学校周辺の緑が鮮やかな季節となりました。中間考査や総体を控え、お忙しい先生方をお願いするのは心苦しいのですが、4月27日の職員会議でお話しました2年生のMDPに関する個別指導について、改めてお知らせします。

- ご担当いただく生徒は別紙のとおりです。
生徒たちには、5月20日までに担当の先生に挨拶に伺い、指導していただく日程を調整するよう連絡します。指導の方法、内容、時間等は各先生にお任せいたします😊
- 今から夏休みにかけて、先生方をお願いしたいことは下の表のとおりです。
※ 生徒は別添「探究だより」にそって、テキスト『課題研究メソッド』(ページは「探究だより」参照)を参考に活動を進めています。

生徒のおもな活動	時期	先生方をお願いしたいこと
リサーチクエストの決定 課題の設定	～5月末	リサーチクエスト決定の確認 対象生徒が、リサーチクエスト(探究の問い)を決めているかの確認をお願いします。決まっていない場合は、5月末までにリサーチクエストが決まるよう、ご支援をお願いします。
活動計画の作成	～6月末	課題探究計画発表会準備の確認 課題探究計画発表会の準備ができているかの確認をお願いします。 準備ができていない生徒は、教育研究部が放課後に集めて作業をさせる予定です。6月末までに準備ができていない生徒がいましたら、教育研究部にご連絡ください。
	7/13 6限	課題探究計画発表会 授業のない先生方はぜひご参観ください。
フィールドワーク等の実施 情報収集	夏季休業中	指導・助言をお願いします。 <u>生徒が施設訪問等、外部との接触について把握していただき、7月20日までに教育研究部に報告してください。渉外が必要な場合は生徒のサポートをお願いします。</u>

○ 先生方には、生徒の活動が下記指導計画に沿って進むよう、ペースづくりをお願いします。また、

「調べ学習」で終わらせず、「課題を自分で見つけて解決する活動」になるよう、サポートをお願いします。

○ リサーチクエストを導くための生徒へのアドバイス例を下に掲載しています。

※あくまで参考です。先生方のやりやすいようにしてください😊

【意見を引き出すヒント】

- ・ 課題について知っていることを書き出してみる
- ・ 課題と関連する経験やニュースを思い出してみる
- ・ ほかのもの(類似のもの・正反対のもの)と比較してみる

【リサーチクエストを導き出すための声かけの例】

問い	タイプ	声かけの例
香川の福祉の問題を解決するには？	漠然型	「対象は香川県全体？特定の市町村に絞る？」、「福祉とは具体的に何を指しているの？」「具体的にどのような問題を解決したいの？」など
高松市の福祉について、独居高齢者にどのような課題があるのか？	対象明確、課題漠然型	「独居高齢者とは？(言葉の定義を確認)」、「高松市に独居高齢者はどれくらいいるの？」、「あなたはどのような課題があると思う？」、「その課題の解決に取り組んでいる人は誰(どこ)なの？」など
鬼無地区の独居高齢者に他者とのつながりを得る機会を提供するために、行政はどのような取り組みをしているのか？	課題明確型	「鬼無地区の独居高齢者はどれくらいいるの？」、「独居高齢者が他者とのつながりを得る機会を求めていると考える根拠は？」、「なぜ他者とのつながりが必要なのかな？」、「この取り組みをしたい理由は？」、「どこに行けば、誰に聞けば、その取り組みに関する現状を知ることができるのかな？」、「あなたなら何ができる？何がしたい？」など
鬼無地区の独居高齢者が、他者とのつながりを得るために地域で気軽に集まれる活動をしてみたい。そして、その活動を行政に提案したい。	課題解決型	「具体的にいつ、どこで、どのような活動を行うことを想定しているの？」、「どのような効果が期待できるの？」、「独居高齢者の方たちはその活動についてどう思うだろう？」、「他の地域では同じ課題に対してどのような取り組みが行われているのかな？」など

【リサーチクエストのポイント】

※詳細については、テキストp. 190 MISSION2 チェックリストをご覧ください。

- ① 何らかの答えが出る問いになっているか。
(「人生に生きる意味はあるか？」という問いは、探究の問いに適さない。
「どのような時に人は生きる意味を感じるか？」という問いであれば、何らかの答えを提示することが可能。)
- ② 将来の進路(学問分野・職業)、社会の抱える課題と結びついているか。
- ③ 言葉の定義は明確か。(教育とは家庭教育？学校教育？生涯教育？)
- ④ より具体的に(対象となる地域、時代、世代等を絞り込む)
- ⑤ 大きな問いは小さな問いに分解する。
(「地球温暖化のゆくえ」→「これまでの100年間で地球温暖化はどれくらい進んだのか」)

④ タブレット端末の活用

1年生は、令和4年6月から一人一台タブレットを貸与されていることから、「ブラ☆きなし」など、「総合的な探究の時間」での記録は、Teams やロイロノートを活用し、教員と生徒、生徒同士がワークシートを共有したり、意見を交換したりできるようにしています。また、2年生の探究活動では、個人での活動を原則としているため、定期的に同じコース内で、活動の進捗状況を報告し合い、互いの探究活動についてアドバイスし合う機会を設けています。このように、他者と情報を共有したり、他者に説明したりする機会を日常的に取り入れることで、論理的・具体的な言語表現を意識させ、他者との対話をとおして自己理解・他者理解を深めています。

⑤ 生徒個人の振り返りと生徒同士の相互評価

1・2年生の「総合的な探究の時間」では、活動ごとに個人の振り返りを行うことで、メタ認知を意識させ、生徒自身がPDCAサイクルを回せるよう習慣づけを行っています。また、生徒同士の相互評価を定期的に行うことで、自分のよさを知り、他者のよさを認め、協働してよりよい社会をつくらうとする姿勢を互いに引き出せるよう工夫しています。

【1年生ポスター発表評価シートの一部】

ポスター発表評価シート						
※「良い：5」「まあまあ良い：4」「どちらとも言えない：3」「あまり良くない：2」「良くない：1」で評価する。						
各項目に数字5～1を記入し、最後に合計してください。						
1班 テーマ：						
	評価項目	良い 5	まあまあ 良い 4	どちらとも 言えない 3	あまり 良くない 2	良くない 1
資料 し り	課題に対して知りたい情報が掲載されているか					
	結論は明確か					
	結論に至るまでの筋道は納得できたか					
	誤字・脱字などのミスはなかったか					
発 表	与えられた時間を有効に使えたか					
	身だしなみ・あいさつ等、発表のマナーは守られているか					
	声の大きさ、話す速さは適切か					
	話の長さは適切か					
	説得させる熱意（表情、目線、ジェスチャー）は感じられたか					
1班の合計						点

【2年生ポスター発表後の振り返りシート】

探究発表会の振り返りシート

() 年 () 組 () 番 氏名 ()

これを見て、1年後（入試の面接や志望理由書で課題探究のことを説明する際）にポスター発表当日のことを思い出せるように、具体的に記述しよう。担当の先生から返却されたら、ファイルに挟んでおくこと。

○今日の自分の発表についてよかった点

○今日の自分の発表について改善すべきと感じた点

○今日の他の班の発表を見て、気付いたこと・学んだこと

○1年間の課題研究の取り組みを通してうまくいかなかったこと

○1年間の課題研究の取り組みを通して、学んだこと・身についた力

⑥ 希望者対象のオプションプログラム

本校では、「グローバル社会への対応」に必要な資質・能力を育成するために、希望者を対象とした様々なプログラムを実施しています。その一部を紹介します。

○ グローバル・クラスメート・プログラム

令和元年度から、外部団体主催のグローバル・クラスメート・プログラムに参加しています。希望者を募り、アメリカのパートナー校と半年間毎週英語と日本語による交流を続けています。令和4年度は33名が参加し、火曜日の放課後、「好きな食べ物は？」「将来の夢は？」といった身近なトピックについて意見交換を行ったり、お土産を送り合ったり、「ビデオ甲子園」に参加したりと、楽しく活動をしています。アメリカの高校生と信頼関係を築き楽しくおしゃべりをする中で、自然に英語力や国際感覚を磨くことができるプログラムで、海外の人々と交流することが難しい状況の中で、貴重な国際交流の機会となっています。

○ エンパワーメント・プログラム

令和元年度より、外部団体主催のエンパワーメント・プログラムに参加しています。日本国内の大学に留学中の外国人大学生をリーダーに、世界の諸問題やポジティブ・シンキングの重要性、自分の夢などのトピックについて英語で意見を交わし、プログラムの最後には、生徒全員が5分間で英語のスピーチをします。今年は夏休みに5日間で実施し、1～3年生40名が参加しました。参加費としての生徒の費用負担がありますが、生徒の真剣な取組により、英語力のもとより、世界に視野を広げ、将来への夢を明確化し、自分に自信をつける有意義なプログラムです。



○ 日本の魅力発見ツアー

令和3年度から、奈良・京都の名刹や庭園を訪ね、世界から注目されている日本の古都の魅力を体感し探究する「日本の魅力発見ツアー」を実施しています。人気ツアーガイドに講師を依頼し、日中は講師が提示した問いについて考えながら各施設を見学し、夕食後は宿舎で講師からの解説を聞き、質疑応答を行い、学びを深めました。また、最終日の夜は、グループに分かれ、特に印象に残ったことをテーマに話し合い、学びの成果を一枚のポスターにまとめました。完成したポスターは、校舎内に掲示し、他の生徒にも情報共有できるようにしています。



(参加した生徒の感想)

・この3日間で、寺院や仏像への興味が大きく変わりました。これまでは、ただテストのために情報を覚えるだけでしたが、仏像の成り立ち、時代背景などを知ると、これほ

どおもしろいものになるんだ!!と新たな発見をすることができました。大変有意義な3日間でした。

○ バリ島 SDGsオンライン研修

生徒たちにグローバルな視点から物事を考える機会を提供するために、インドネシアを拠点にSDGsに関する活動に取り組んでいる団体に企画・運営を依頼し、4日間の研修を行いました。当初は、現地へ行く予定でしたが、コロナウイルスの感染状況を鑑み、オンラインでの研修に切り替えました。その結果、現地研修であれば参加することが難しかった生徒たちも参加することができました。

オンライン研修であっても現地の様子を感じられるよう、現地の高校生と英語で交流したり、現地を散策する様子をライブ映像で視聴したりする等、様々な工夫をしました。また、東京からインドネシアの伝統楽器奏者を招き、生徒たちが一緒に演奏したり踊ったりする活動も取り入れました。生徒たちは、こうした楽しい活動を体験し、インドネシア・バリ島の美しい自然を生かした観光業について知る一方で、現地で起こっている深刻な環境破壊や妊産婦をめぐる厳しい現実を目の当たりにし、大きな衝撃を受けていました。そして、バリ島で妊産婦の支援を行っている助産師やビニール袋の使用ゼロをめざして活動する現地の高校生の活動について話を聞き、自分たちも何かできることをしたいという思いが自然と湧き上がってきたようでした。その思いを形にするために、研修の最後に、各自が課題を設定し、その解決策を提言するプレゼンテーションを行いました。この研修を通じて、「自分は高校生だし、自分一人が何かしても社会を変えることなんてできない」と思っていた生徒たちが「高校生だからこそ周りの大人を動かし社会をよりよくしていくことができるのかもしれない」と思えるようになったと感じています。



(3) 成果と課題

この2年間、生徒たちに「世界や地域が抱える課題を自分事として捉える」、「課題解決にむけてアクションを起こす」ことの大切さを、折に触れて伝え続けてきました。その間、新型コロナウイルス感染症の感染拡大や緊迫するウクライナ情勢もあり、世界と自分の暮らしが繋がっていることに気づき、物事を自分事として捉える姿勢が生徒たちに見られるようになりました。また、課題解決にむけて、高松市議会の方たちに研究成果を発表したり、鬼無駅トイレを清掃したりするなど、アクションを起こす生徒が増えてきていることに生徒たちの成長を感じます。一方で、外部講師の方々から、「問いから結論に至るまでに、論理的飛躍が見られる」、「友人の発表を聞いている生徒から質問が出ないことが残念」といった指摘を頂いており、論理的思考力、批判的思考力を鍛えていくことが今後の課題です。その第一歩として、本校生徒の現状と課題を教職員全体で共有し、各教科の授業においてどのような取組ができるのかを具体的に検討する研修を現職教育として行いました。今後は、各教科での学びを活かした総合的、横断的な学習が行えるよう総合的な探究の時間の内容を再構築していきたいと思います。そして、自分の言動が他者や社会によい影響を与えることができるという自信と希望を生徒たちが感じられる環境づくりに努めたいと考えています。

おわりに

本書では、「香川型探究学習」を実現させるための考え方や方法論を論じるにあたり、「リーディングスクールの実践の中で考えられたことや生み出されたものを大切にすること」「具体的な取組がイメージしやすいような方法論にすること」「学校現場における探究学習の実践において課題となっていると考えられる部分を詳細に論じること」に重点を置きました。

そのため、探究学習の中で生徒に習得させたい個々のスキルや、探究学習の指導体制の構築等について網羅的に述べることは、あえて行っていません。本書で言及していないことの例としては、前者では、「情報収集の方法」「アンケートや実験等の調査の方法」「考えるための技法」の活用の方法」「論文の構成や執筆の方法」「プレゼンテーションの作成と発表の方法」等が、後者では「総合的な探究の時間等における目標の設定や評価の方法」「探究学習を円滑に進める校内外の組織作りの在り方」等が挙げられます。これらについては、各教科・科目等における学習内容を活用しつつ、各高校で独自に工夫を凝らすことで、それぞれの高校において特色のある魅力的な取組が展開されることが期待されます。また、それを学校を越えて共有することで、県立高校が一丸となった指導の在り方への研究が深まっていくことが望まれます。

本書の内容は、「香川型教育メソッド」のうち、主に総合的な探究の時間における探究学習の在り方に焦点を当てたものとなっています。今後は、これをさらに発展させ、カリキュラム・マネジメントによる、STEAM 教育等の教科等横断的な学習の追究を進めていく必要があります。また、専門教育を主とする学科における「課題研究」等のさらなる高度化の方法を探り、これからの専門高校の在り方を模索していく必要もあります。このような取組を通して各教科・科目等が探究化し、香川県ならではの在り方による「主体的・対話的で深い学び」を確実に実現していくことが、「香川型教育メソッド」構築の方向性であると考えられます。

最後になりましたが、本書の作成にあたっては、香川大学、関係経済団体や企業等の皆様、探究学習に御協力いただいた地域の皆様、県立高校の先生方等、数多くの方々の御協力をいただきました。また、令和 4 年度に、ピクテジャパン株式会社様から、本事業に対しての御寄付をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

香川県教育委員会
香川型教育メソッド研究会

【資料編】

本事業における各取組の状況をまとめています。

- 1 香川県立高瀬高等学校(「郷土への理解や郷土愛」リーディングスクール)の取組
- 2 香川県立善通寺第一高等学校(「イノベーション創出力」リーディングスクール)の取組
- 3 香川県立高松西高等学校(「グローバル社会への対応」リーディングスクール)の取組
- 4 香川県教育委員会主催の取組

※ 掲載した方への敬称は省略し、掲載順は順不同としています

1 香川県立高瀬高等学校（「郷土への理解や郷土愛」リーディングスクール） 取組の名称：高瀬高校ミライ塾 ～郷土を見つめ 未来を拓く～

令和3、4年度の取組

（1）総合的な探究の時間（1年生）

テーマ：「三豊市の課題を発見し、その解決方法について考える」

- 市長メッセージ及び三豊市各課のプレゼンテーション視聴
(実施時期：5月)

三豊市の現状や抱えている課題を理解し、探究活動のテーマ選択につなぐことを目的とします。



- SDG s の学習

- ・ 講話（実施時期：令和3年6月）

演題：「はじめよう！SDG s」

SDG s への理解を深めるため、講師を招聘し講話を行いました。

- ・ 2030 SDG s ワークショップ（実施時期：令和4年10月）

講師（ファシリテータ）：西原 澄子、森本 未沙

SDG s への理解を深めるため、ファシリテータを招聘してカードゲームを含むワークショップを実施しました。

- 中間報告会（実施時期：10月）

各クラスでの中間発表。プレゼンテーションソフトを活用して発表を行いました。



- 地域の方を囲む会（実施時期 令和4年10月）

探究する11の分野ごとに市役所担当課や公民館など地域の方を本校に招いて、生徒が質問したり、アドバイスをいただいたりしました。自分たちの話を大人に真剣に聞いてもらう体験は、生徒の自尊感情を育てる上でも重要と考えています。

- データサイエンス講演会（実施時期：令和4年11月）



<講師と演題>

山本真理乃 「私たちの身の回りにあるデータサイエンス」

小林 寛子 「データサイエンティストとしての取り組み
— データってなんだろう —」

<授業後のアンケート>

「授業前、データサイエンスについて知っていましたか」の質問に「いいえ」と答えた生徒は89%でしたが、「授業後、データサイエンスについてわかったことを教えてください」の質問に、「特になし」「わからなかった」「難しい」と答えた生徒はあわせて6%でした。また、「データサイエンスについてもっと知りたいと思いましたか」の質問に、「強く思った」「少し思った」と答えた生徒はあわせて71%でした。データサイエンスやA Iの可能性について多くの生徒が興味をもったようです。

データサイエンスを活用してみたい場面を尋ねたところ、地域の課題解決や人助けと答えた

生徒も多く、このような取組みで地域課題の解決に貢献する生徒の育成も可能であると思われます。

○ 校外研修（実施時期：令和3年12月）

三豊市との比較の視点を得ることを目的に、各地域を訪れて地域への理解を深める現地研修。栗島、坂出、宇多津、琴平の4コースに分かれて実施しました。

栗島コース



坂出コース



宇多津コース



琴平コース



○ 震災対策訓練（全校生対象の避難訓練後、1年生のみ実施 実施時期：12月）

三豊市危機管理課及び三観広域北消防署の協力の下、地震体験、煙道体験、土のう作りを実施しました。煙道体験では、南海トラフ地震について探究をしている生徒が説明をしました。



○ クラス内発表会（実施時期：2月）

○ 総合的な探究の時間 研究発表会（実施時期：3月）

<令和3年度> 県内各所とZOOMで繋いで、オンラインで開催しました。代表生徒8名による発表を行いました。

講評：山下 昭史（三豊市長）

参加者：三豊市各課職員、香川短期大学、香川型教育メソッド研究委員、高校教育課、県内高校教員、他関係機関のみなさま

<令和4年度> 対面で実施する予定です。

○ 「郷土への理解や郷土愛」等に関するアンケート（実施時期：5月、2月）

取組の事前と事後に生徒にアンケート調査をして意識の変化を調べました。各項目とも「よくあてはまる」を3点、「ややあてはまる」を2点、「あまりあてはまらない」を1点、「まったくあてはまらない」を0点としました。令和3年度は1年生116名、令和4年度は1年生128名を対象に調査しました。表1は「令和3、4年度の取組前・取組後のアンケート結果」から平均点をまとめたものです。図1、2はそれを箱ひげ図にしたものです。Microsoft Excelを用いて、令和3年度の取組前・取組後で検定を実施し、優位水準を0.05としました。その結果、1、4、5、9、10、11、13、14、15の項目について、有意差が得られました。特に1、5、11、13、14、15の項目について非常に有効であったという結果が出ています。一方、6、7、8の項目については、有意差が得られなかったものの、取組前から意識が高かったことがうかがえます。

表1 総合的な探究の時間 令和3、4年度の取組前・取組後アンケート結果

番号	項目	3年度		4年度	番号	項目	3年度		4年度
		取組前	取組後	取組前			取組前	取組後	取組前
1	三豊市の良さについて、良く知っている	1.41	1.84	1.14	9	SDGsとは何か説明できる	1.42	1.69	1.53
2	三豊市の良さについて、知りたいと思う	2.08	2.20	2.05	10	SDGsの各目標について、課題の解決に向けて実践してみたい	1.91	2.09	1.98
3	三豊市で生活したいと思う	1.72	1.74	1.44	11	ICTを用いて、必要な情報等を収集することができる	1.97	2.31	2.24
4	三豊市のことを、他の人にPRしたいと思う	1.59	1.79	1.45	12	調べた情報から、自分なりの仮説や解決方法を考えることができる	1.84	1.98	1.75
5	地域の抱える課題について知っている	1.17	1.88	1.00	13	調べた情報を整理して、レポートやスライドにまとめることができる	1.76	2.18	1.52
6	地域の課題の解決に向けて取り組みたい	2.00	2.09	1.91	14	自分の考えや調べた情報を、他者にわかりやすく説明することができる	1.48	1.77	1.34
7	地域の課題を解決することは、自分たちの生活をよくすることだと思う	2.49	2.52	2.37	15	社会や身近な生活の中から、自ら課題を発見し、解決策を考える力が身についている	1.43	1.75	1.43
8	地域の課題を解決することは、自分たち若者の役割だと思う	2.09	2.12	1.93					

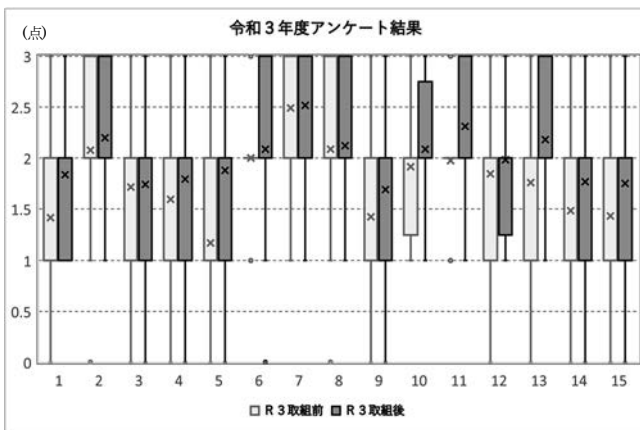


図1 令和3年度の取組前・取組後アンケート結果

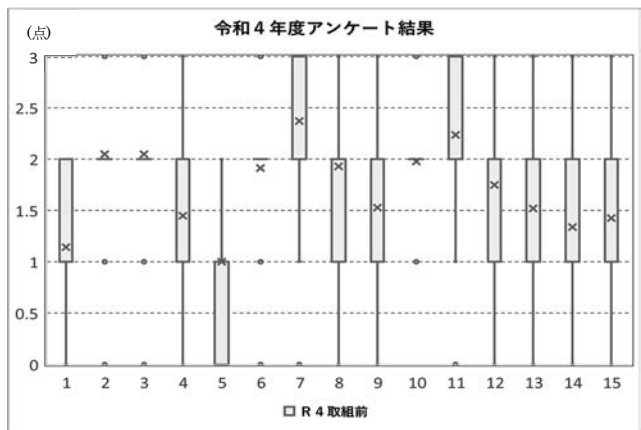


図2 令和4年度の取組前アンケート結果

(2) その他の取組(「郷土への貢献活動」を含む)

- 三豊市SDGs推進パートナーへの登録(令和3年4月)

SDGs未来都市
みとよSDGs推進パートナー

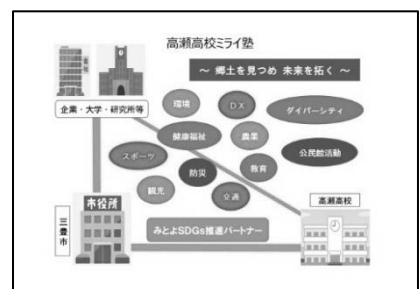
香川県立高瀬高等学校

高瀬高校ミライ塾
～郷土を見つめ 未来を拓く～

三豊市との連携(1年生 総合的な探究の時間)

「地域のミライを見据えた課題研究」として、『健康福祉』、『交通』、『観光』、『まちづくり』等11の分野に分かれて進める。三豊市長から、1年生全員に今年度の重点項目等について直接講話をいただき、各部署担当者からのプレゼンテーションも全員が受けて、各自がそれぞれ希望分野を選択し、研究テーマを定める。普段の授業では各教室でそれぞれが個人研究を進め、コラボ活動など分野ごとの活動がある場合は全員が集まったり、直接三豊市役所や、関係機関に訪問する。

三豊市を通じて多くの企業や研究所と繋がり、『SDGs未来都市』に選定されている三豊市とともに「みとよSDGs推進パートナー」として、SDGsの各目標について、ゴールへの道を探る。



三豊市WEBサイト(みとよSDGs推進パートナーの紹介)より

- 「変えようみんなの公民館」キックオフミーティング（実施時期：令和3年10月）

公民館活動をテーマとした生徒たちが、三豊市公民館の方と協働して新しい三豊市公民館を考えることを目的に、本校生と地域の方々のミーティングを企画・実施しました。生徒16名、地域の方々約20名が参加しました。



- 高瀬クリーン作戦（実施時期：10月、2月）

高瀬高校周辺、高瀬駅構内及び周辺の清掃美化活動を実施しました。

参加者：生徒希望者

- ハワイの高校生とのオンライン交流（実施時期：令和3年11月、令和5年1月）



2年生「異文化理解」の選択者が、日本文化及び本校の紹介動画等をグループごとに英語で作成し、ハワイのMid-Pacific Instituteの生徒とオンラインで交流を行いました。広い視野に立ち、外から郷土を見つめる姿勢が養われました。

- 総合的な探究の時間 出張講座（実施時期：令和4年2月）

数学的な考え方、もののとらえ方を身に付け、探究活動へ活用することを目的にオンラインで講演を実施しました。

講 師：野原 雄一（明治大学 理工学部 准教授）

演 題：「数学で語ること、数学が語ること」

参加者：1年生希望者

- スポーツコース 「地域交流 ダンス発表」（実施時期 令和4年12月）

スポーツコース2年生の生徒が地域（三豊市高瀬町）の文化祭で、「専門体育」の授業の学習成果としてダンス発表を行いました。ダンス発表をした後は、ボランティアとして行事を手伝いました。

- 野球部 少年野球教室「高瀬エンジョイベースボールプロジェクト」（実施時期：12月、1月）

小学生を対象とする野球教室を生徒による運営で実施しました。



- 生物部

- ・「香川県ため池調査」（令和3年度）

地域の小学生と合同で調査を実施し、交流を進める予定でしたが新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止となりました。

- ・「科学体験交流会」（実施時期 令和4年10月）



高校で学んだことを地域の保育所の子供たちに伝えることで、地域貢献の精神や主体的に学ぶ気持ちを育むことと、子供たちとの交流を通して、将来の進路実現へ向けて具体的なイメージを持たせることを目的として、高瀬中央保育所の年長児を招いての科学体験を交えた交流会を行いました。保育所年長児24名と本校生21名が参加しました。

- ・「科学体験ツアー」（実施時期 令和5年2月）

観音寺市沿岸のマイクロプラスチック等の調査をするうちに、瀬戸内海全域を一つのまとまりと考えるようになりました。対岸の岡山県笠岡市のカブトガニ博物館での研修等とおしてさらに郷土への理解を深めることを目的としています。また、生きる化石ともいわれるカブトガニは身近に住んでおり、その血液が新型コロナウイルス感染症のワクチン開発にも活用されるなどしています。

- 陸上競技部 「三野津中学校との合同練習会」

（実施時期：令和3年4月）

中学生20名と、本校生32名による合同練習会を行いました。陸上競技を通して、交流を深め、陸上競技の楽しさにふれるとともに、地域の陸上競技のレベルアップを目指して取り組みました。



- 吹奏楽部



- ・「参加型ワークショップ」（実施時期：令和4年9月）

講師：佐藤 采香（桐朋学園大学 音楽部門非常勤講師）

参加者：本校吹奏楽部生徒18名、

観音寺総合高等学校吹奏楽部生徒11名、顧問4名

- ・「地域に元気を届けるコンサート」（実施時期：令和5年3月予定）

12月に実施を予定していましたが、新型コロナ感染拡大防止のため3月に延期しました。

- 校内現職教育 「学習評価に関する研修会」（実施時期：令和4年11月）

最初に、生徒たちが培う多様なコンピテンシー（「見えにくい学力」「ほとんど見えない学力」）をとらえ、見取り、可視化する方法が必要であることを確認し、評価に必要な能力観について学びました。後半は、生徒のコンピテンシーを育む評価をデザインするグループワークを行いました。

講師：木村 優（福井大学大学院 連合教職開発研究科 教授）

演題：「新時代を生きる子どもたちの主体的な学びと育ちの評価」

参加者：本校教員32名



2 香川県立善通寺第一高等学校(「イノベーション創出力」リーディングスクール) 取組の名称:「ロジカル思考」・「デザイン思考」による地域の魅力創出プロジェクト

令和3年度取組

(1)「イノベーション創出力」に関する講座・研修

- チームワーキング講座(対象:1~3年生全員 実施時期:6月)
他者と協働するためのスキルや知識を身に付けるため、自己理解や他者理解、効果的なチームマネジメントの方法を学ぶ講座(2時間)
実施前に、全職員が研修として講座を受講しました。
講師:荒川 雅生(香川大学創造工学部)
- 「ロジカル思考」講座(対象:1年生 実施時期:6月)
社会に必要とされるアウトプット(解釈力)を身に付けるため、思考力を強化する知識やスキルを学ぶ講座(2時間)
教員向けの講座を現職教育として実施しました。(令和2年度)
講師:山中 隆史、柴田 悠基(香川大学創造工学部)
- 「デザイン思考」講座(対象:2年生 実施時期:6月)
不確定性の高い現代社会で自ら問いを見つけ、最適解を導く方法を「デザイン思考」の観点から学び、探究活動に生かす講座(2時間)
講師:石塚 昭彦(香川大学創造工学部)
- 「ロジカル・コミュニケーション」講座(対象:3年生 実施時期:9月)
探究を通して得た自らの課題に対する知見や、意見を効果的に発信する表現力を身に付ける講座(3時間)
講師:山中 隆史、北村 崇義、柴田 悠基(香川大学創造工学部)
- 「かがわイノベーションプログラム」(対象:1~2年生希望者 実施時期:12月)
香川県と香川大学創造工学部が主催する香川型イノベーションプログラム事業に協力校として6名の生徒が参加し、冬の塩江の新しい遊び方を提案するアイデア創出ワークショップに取り組みました。

(2)総合的な探究の時間における取組

- 中間報告会(対象:2年生 実施時期:10月)
分野別に分かれてポスターセッション形式で実施しました。
指導助言者:善通寺市職員、大学教員、NPO法人職員、地元企業関係者等10名



〈ポスターセッションによる中間報告会〉

- 成果報告会（対象：2年生 実施時期：2月）
各分野の代表者がスライドによるプレゼンテーションを行いました。新型コロナウイルス感染症拡大予防措置として、発表動画を各教室にリモート送信する形を取りました。

指導助言者：善通寺市職員、大学教員、NPO法人職員、地元企業関係者等
11名



〈リモートによる成果報告会〉

令和4年度の実践

(1) 「イノベーション創出力」に関する講座・研修

- チームワーキング講座（対象：1年生 実施時期：5月）
他者と協働するためのスキルや知識を身に付けるため、自己理解や他者理解、効果的なチームマネジメントの方法を学ぶ講座を本校教員が実施しました。（2時間）
- 「デザイン思考」講座（対象：2年生 実施時期：6月）
不確定性の高い現代社会で自ら問いを見つけ、最適解を導く方法を「デザイン思考」の観点から学び、探究活動に生かす講座（2時間）
講師：石塚 昭彦（香川大学創造工学部）
- 「ロジカル思考」講座（対象：1年生 実施時期：7月）
社会に必要とされるアウトプット（解釈力）を身に付けるため、思考力を強化する知識やスキルを学ぶ講座を「現代の国語」担当者が実施しました。（2時間）
- 「かがわイノベーションプログラム」（対象：3年生希望者 実施時期：8月）
香川県と香川大学創造工学部が主催する香川型イノベーションプログラム事業に協力校として7名の生徒が参加し、夏の塩江の新しい遊び方を提案するアイデア創出ワークショップに取り組みました。

(2) 総合的な探究の時間における実践

- テーマ発表会（対象：2年生 実施時期：6月）
分野別に分かれて「探究計画書」を元に口頭発表で実施しました。
指導助言者：山中 隆史、勝又 暢久、竹内 謙善（香川大学創造工学部）
- 中間報告会（対象：2年生 実施時期：10月）
分野別に分かれてKP（紙芝居プレゼンテーション）法で実施しました。
指導助言者：善通寺市職員、大学教員、NPO法人職員、地元企業関係者等10名



〈K P法による中間報告会〉

- 成果報告会（対象：2年生 実施時期：2月）
分野毎の代表者がスライドによるプレゼンテーション形式で発表しました。
指導助言者：善通寺市職員、大学教員、NPO法人職員、地元企業関係者等10名

（3）その他の取組

リーディングスクールの取り組みを全校的で継続的なものとし、本校の特色とするため、普通科だけでなくデザイン科においても以下の2つのことを実践しました。

- 全校プレゼンテーション大会（対象：全校生徒 実施時期：7月）
「ロジカル思考講座」の内容の一部である「100円均一ショップの商品をアピールしよう」というワークを独立させ、全校でプレゼンテーション大会を実施し、学年における優秀者や全校優勝者を決めました。



- 各教科における取組（対象：全校生徒 実施時期：学期毎）
教科のグループで学期に一度、「ロジカル思考」や表現力を鍛えるために、「プレゼンテーション」「3つのポイント」「時間の意識」の3つの要素を備えた学習を実施し、方法や成果を共有しました。

※実践例

教科	デザイン科	実施日	令和4年 4月 8日
授業者	中西・橋本		
単元名	工芸絵画 (3年)		
実施内容	鉛筆デッサン・水彩画・油彩画の制作 デッサンや絵画制作を行うときに必要な制作プロセスは、自身が描いている作品の完成を思い描き、それに向けていかなくてはならない。 当然、制作を進めていく中には、目標からの変更なども伴うが、特にデッサンに関しては、理論と表現が組み合わさり、情報を作品の中にどれだけ表現できるかが、必要不可欠になる。そのうえで、論理的な思考を踏まえつつ制作を進める。 思考の定着により、枚数を重ね進めていけば、確実に表現力は身につけ、効果的な制作を行うことができる。		
反省	制作の進め方に関しては、個人差が大きく左右し、どのような表現を完成させたいかによっても、制作手順が変化する。それに対応した指導や説明を、言葉で表現することが難しく、手ほどきが増えていくと作品の完成に影響が出る。		

教科	地歴公民科	実施日	令和4年 9月～11月
授業者	金丸		
単元名	内陸アジア・東アジア・イスラーム・ヨーロッパ世界の形成 (2年)		
実施内容	夏休みの課題として「対比してみた 2022」と題して、2人組で、2つの事象を対比させながら、「楽しく、わかる、ためになる」のコンセプトに合わせて、プレゼン用PowerPoint、Wordのレジュメ資料(A4 1枚)と発表用Word原稿を作成させ、授業の進捗に合わせて折々に発表の場を設けた。パワーポイントの枚数は自由、発表時間は8分を目安とし、クイズを2問はさむことを条件とした。 発表をみて良かった点と改善すべきことについて具体的な根拠を持ってコメントを考え、全員がWordシートに入力したものを、各自にフィードバックした。		
反省	普段PowerPointと連動したプリントを使った授業を受けているので、見よう見まねで授業を作ってみる感じで取り組んだようであった。対比のために2つの事象を調べその情報を分析していくことが難しいが、一致点や相違点を探していく作業に根拠強く取り組み、うまく精選した形でプレゼンできたチームが多かった。1チームがプレゼンを行ったが、評価のコメントを見るとただん生徒たちの目が肥えていくのが感じられた。夏休み中だったので、家庭にパソコンがなくスマホで作成する生徒が多かった。全員がパソコンを紙と鉛筆として使える環境があれば、もう少し楽にいいものができたと思う。		

教科	理科	実施日	令和4年 6月 13日
授業者	大西		
単元名	第1章 地球史の読み方 第1節 堆積岩とその形成 (2年)		
実施内容	教科書の単元を4つのテーマに分け、予習としてテーマごとにノートに要点をまとめさせた。授業では、ノートを用いて班員に教科書内容のプレゼンテーションを行わせ、学習内容の相互理解を図った。 ①単元の内容をABCDの4つに分け、予習用のノートにテーマごとに要点をまとめる。 ②誰がどのテーマを担当するかを最初に発表し、同じテーマの生徒どうして集まって10分ほどの作戦会議を行う。 ③班に戻り、一人5分程度のプレゼンと質疑応答の時間を設ける。他の班員は、発表者を評価し、最後に班の中のベストプレゼンターを決める。 ④授業の終わりに単元の演習問題を解き、自身の発表のリフレクションを行わせる。 ⑤次の時間に教員が単元内容の解説を行い、評価や問題のプリントを回収し、チェックする。		
反省	・4つのテーマすべての予習になるので、時間がかかる点や、生徒の負担が大きい点は改善したい。 ・10分間の作戦会議の時間に、わからないところを教え合ったり、追加でノートをまとめたりするなど、他の人にうまく説明しようと努力する姿が見られた。 ・5分間という持ち時間に対して早く発表が終わる班が多く、質疑応答の時間があまり有効に活用できていないと感じた。		

教科	家庭科	実施日	令和4年 9月 20日
授業者	大路		
単元名	ホームプロジェクト発表 (1年)		
実施内容	自分が生活をしている中で不便に感じていること、よりよくしたいと思うことについてテーマを設定し、実践・反省までを夏休みの課題として行う。テーマ設定の理由から実践の計画、実践と評価を各自が行い、夏休み明けに6人のグループとなって1人3分以内で発表を行う。2時間目には発表したグループ内で代表者を一人決め、全体の前でテレビモニターに写真などを映しながら発表を行う。ただ実践をするだけでなく、細かな実践計画や実践後の自己評価、反省を重点的に行うことを事前に伝えた。また、発表の際には相手に伝わるように話すことや時間を意識して行うように伝えた。		
反省	テーマ設定は各自で考えるようにしたため、「防災対策」や「オンラインショッピングでの失敗しない買い物のために」など、興味深い内容を見ることができた。自分で課題を設定することで詳しく調べられており、発表も写真やグラフを効果的に活用しながら3分でまとめることができていた。グループ代表者はしっかりとわかりやすく発表ができていたため、発表者とはならなかった生徒にも良い例として刺激になっていたようである。		

教科	国語科	実施日	令和4年 7月 8日
授業者	石川		
単元名	時事問題についての意見をプレゼンしよう (3年)		
実施内容	新聞記事から自分の進路に関連する記事を切り抜き、要点をまとめ、意見を明確にし、グループでプレゼンテーションを行った。 1時…新聞記事から自分の進路に関連する記事を切り抜き、要点と意見をメモ 2時…1時でメモしたワークシートをグループで話し読みし、記事や意見について質問を書いてもらう→宿題として、情報を調べてくる 3時…調べてきた内容をもとに、改めて記事の要点と自分の意見(最初よりも多角的な視点が入ったもの)をまとめ、1分～1分30秒でグループ内で発表・評価		
反省	・時間の意識はよくできていた。 ・発表前に、時間を測って練習したのが良かった ・最初のグループの発表では聞き手を見ながらプレゼンできていた人が少なかったが、一回ごとに来ていた人のことを全体に向けて褒めると、回を追うごとに改善できた。		

教科	保健体育科	実施日	令和5年 1月 25日
授業者	川田		
単元名	ダンス(現代的なリズムのダンス) (1年)		
実施内容	前時に行った中間発表会の映像の振り返りを行った。 まず、グループ内(5~8人)で映像を視聴した後、各自で①良かった点②改善点③これからの授業で意識するべきところ、を考え、グループ内で発表、共有した。 その後、グループで出した案をまとめ、全体で発表をした。各グループ2分以内でiPadを用いて発表を行った。		
反省	良かった点、改善点をiPadで示しながら発表ができていた。聞いている生徒ではなく、モニターを見ながらの発表になってしまうことが多かった。①~③のポイントをまとめて、今後の創作ダンスにつなげようとする意識ができていた。		

3 香川県立高松西高等学校（「グローバル社会への対応」リーディングスクール） 取組の名称：西高発「COOL JAPAN!」

令和3・4年度の取組

- かがわ創生講座@西高（対象：2年生 実施時期：令和3年度は5月、令和4年度は4月）
行政機関、大学、民間企業等から講師を招き、各分野の魅力や探究の意義等について熱く語っていただくことで、生徒たちの探究活動のエンジンを駆動するきっかけをつくる講座。
講師：（令和3年度） 地元企業関係者、香川大学教員、歴史研究者、県危機管理課職員、県瀬戸内国際芸術祭推進課職員、県高校教育課職員、高松市職員、本校OG等11名
（令和4年度） 地元企業関係者、盆栽園代表、香川大学教員、県危機管理課職員、県高校教育課職員、高松市職員、本校OG等11名



- 探究学習アドバイザーによる講演会（対象：1・2年生 実施時期：令和3年5月）
「探究活動とは何か」「探究活動を通じて身に付けるべき力」など探究活動の目的と在り方についての講演。
- 探究学習アドバイザーによる教職員研修（対象：教職員 実施時期：令和3年5月）
「今なぜ探究的な学習が必要なのか」「探究的な学習における教師の果たすべき役割」などについての講演。
- ブラ☆きなし（対象：1年生 実施時期：令和3年度は6月・7月、令和4年度は6月）
地元鬼無地区の史跡や盆栽園などを探索し、地域の魅力について考える体験的な学習。令和4年度は、「鬼無はなぜ世界の盆栽の里になったのか？」をテーマに実施しました。
講師：令和3年度 勝賀城跡保存会の方々
令和4年度 香川大学教員、盆栽園代表



- SDGs 講演会（令和3年度 対象：全校生徒 実施時期：7月 令和4年度 対象：1年生 実施時期：5月）

インドネシア・バリ島と本校をZOOMでつなぎ、『高松西高校から世界をアップデートする～心に火をつける～』をテーマに、今の世界で起こっている環境問題、社会問題と未来予想について学んだ後、「地球を救える最後の世代」としての私たちにできることを考えました。

- 課題探究計画発表会（対象：2年生 実施時期：令和3・4年度とも7月）

各コース内で探究活動におけるテーマや問い、夏季休業中の探究活動計画等について個人またはグループごとに発表。外部講師や担当教員、同じコースの別のグループからのアドバイスを受けました。

指導助言者：（令和3年度） 地元企業関係者、県危機管理課職員、県瀬戸内国際芸術祭推進課職員、県地域活力推進課職員、県国際課職員、県高校教育課職員、高松市職員、本校OG、本校養護教諭等11名

（令和4年度） 地元企業関係者、県危機管理課職員、県瀬戸内国際芸術祭推進課職員、香川県立ミュージアム職員、県高校教育課職員、NPO法人代表、本校OG等11名

- オプション・プログラム「エンパワーメント・プログラム」（対象：西高生希望者 実施時期：令和3年度は3月～4月、令和4年度は7月）

外国人大学生・大学院生と共に、異文化やグローバル社会について英語で考え意見を交わす中で、日本を客観的に見る目を養うとともに、自己のアイデンティティーについて考え、自らが社会の中で何ができるかを考えることを通して将来の目標を具体化させることを目指して実施。令和3年度は2、3年生33名、令和4年度は1～3年生40名が参加しました。



- オプション・プログラム「高校生のための瀬戸内アートサマープログラム」(SASP)（対象：1・2年生の希望者 実施時期：令和3年度は7・8月、令和4年度は8月）

香川県教育委員会主催のプログラムに参加し、瀬戸内の島々で他校の生徒たちとフィールドワークを含む課題探究学習を行い、その成果を発表しました。本校から令和3年度は1・2年生5名、令和4年度は2年生3名が参加しました。

- オプション・プログラム「かがわイノベーションプログラム」（対象：1・2年生の希望者 実施時期：令和4年度は8月）

香川県教育委員会・香川大学創造工学部主催のプログラムに参加し、新たな価値の創造力を育成する体験することを通して、ロジカル思考やデザイン思考を学びました。本校から令和4年度

に2年生2名が参加しました。

- オプション・プログラム「ブラハセ@西高」(対象：1年生の希望者 実施時期：令和3年10月)
香川大学と連携して行いました。「鬼無はなぜ世界の盆栽の里になったのか？」を解き明かすフィールドワーク。令和4年度は「ブラ☆きなし」として1年生全員を対象に実施しました。



- オプション・プログラム「グローバル・クラスメート・プログラム」(対象：1・2年生希望者 実施時期：9月～2月)

日米の参加校がそれぞれ1校ずつのペアを組み、9月から翌年2月までの半年間教育交流用ウェブサイト上でディスカッショントピックに基づいて「カジュアルに」「楽しく」、意見交換を投稿し合う外部団体主催のプログラム。西高からは令和3年度は26名、令和4年度は33名が参加し、日本語と英語で投稿しました。10月にはお土産エクステンジを行いました。この交流は今年4年目を迎えました。パートナー校は2年連続ミネソタ州ミネアポリスのサウスウェスト高校。



- 探究学習アドバイザーによる教職員研修 (対象：教職員 実施時期：令和3年10月)
「課題研究実施に向けた改善の仕組みとポイント」をテーマとした、生徒の探究活動に対する具体的な指導方法、言葉のかけ方などについての研修。
- かがわの魅力発見ツアー (対象：1年生 実施時期：令和3年度は10月、令和4年度は6月)
クラスごとに、香川県内の農園・牧場・寺院・美術館等を訪問してフィールドワークを実施。この研修で学んだことなどをもとに、グループごとに探究活動を行いました。



○ 課題探究中間発表会（対象：2年生 実施時期：令和3・4年度とも10月）

各コース内で各グループの探究活動の成果について個人またはグループで発表。外部講師や担当教員、同じコースの別のグループからの講評を受けた。

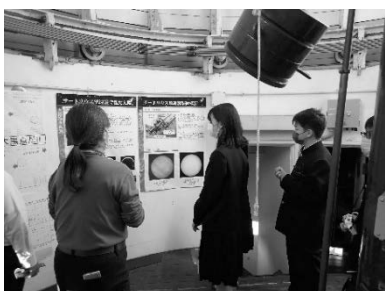
指導助言者：（令和3年度） 地元企業関係者、県危機管理課職員、県瀬戸内国際芸術祭推進課職員、県地域活力推進課職員、県国際課職員、県高校教育課職員、高松市職員、本校OG、本校養護教諭等12名

（令和4年度） 地元企業関係者、JICA 四国職員、NPO法人代表、職員県危機管理課職員、県瀬戸内国際芸術祭推進課職員、県地域活力推進課職員、香川県立ミュージアム職員、高松市職員、本校OG、県内他校職員等14名

○ オプション・プログラム「サイエンス・ツアー」（対象：1・2年生の希望者 実施時期：令和4年度11月）

大学での学びや博物館、研究施設の見学を通して、学校での授業では得られない体験を味わい、自然科学に対して幅広く興味・関心を高め、今後の学習の動機づけになることを目指して、本校の企画で実施しました。

訪問先：大阪自然史博物館、京都大学附属花山天文台、防災科学技術研究所、理化学研究所他



○ オプション・プログラム「日本の魅力発見ツアー」（対象：1・2年生の希望者 実施時期：令和3年度は12月と1月、令和4年度は12月）

世界から注目されている日本の古都の魅力を体感し探究することを目指し本校の企画で実施。2泊3日で、奈良・京都の寺院、史跡、庭園等をめぐり、ツアーガイドの先生から宿舎で講義を受け、各自が見つけた日本の魅力についてポスターやレポートにまとめました。



○ オプション・プログラム「マイプロジェクト・アワード」

（対象：1・2年生の希望者 実施時期：1月 主催：認定NPO法人カタリバ）

認定NPO法人カタリバ主催の探究の祭典マイプロジェクト・アワード・オンラインサミットに1次選考を通過したチームが参加しました。令和3年度は2年生5チーム、令和4年度は1年生3チームが出場しました。



○ 1年生課題探究発表会（対象：1年 実施時期：令和3・4年度とも2月）

「ブラ☆きなし」や「かがわの魅力発見ツアー」などをもとに行った探究活動の成果を、ポスターにまとめ、クラス内で発表しました。



○ 2年生課題探究ポスター発表会（対象：2年生 実施時期：令和3・4年度とも2月）

探究活動の過程や成果等をポスターにまとめてグループごとに発表しました。

指導助言者：（令和3年度） 地元企業関係者、県危機管理課職員、県瀬戸内国際芸術祭推進課職員、県地域活力推進課職員、県国際課職員、県高校教育課職員、高松市職員、
※令和4年度は招聘せず



○ オプション・プログラム「バリ島グローバル研修」（対象：1・2年生の希望者 実施時期：3月 共催：一般社団法人 Earth Company）

オンラインでインドネシア・バリ島とつなぎ、SDGsについて体験的に学び考えるプログラムを実施。東京からインドネシアの音楽に詳しい講師を招くなど、観光の島バリ島の魅力を五感で感じながら、現地の環境破壊や貧困の現実を学び、SDGsが掲げる「誰ひとり取り残さない世界の実現」に続く新しいスローガンを考え、世界が抱える課題を解決するために自分には何ができるのかについて一人一人が発表しました。令和3年度は1・2年生29名が参加し、香川県青年センターで4日及び西高で1日の計5日間で実施。令和4年度は25名が参加し、塩江町で2泊3

日・本校で1日の計4日間で実施予定です。バリ島の魅力を肌で感じられるよう、東京から講師を招聘し、踊りと音楽を教えてもらいました。令和4年度は、現地の高校生とのお土産・手紙の交換とオンライン会議システムによる交流を予定しています。



○ オプション・プログラム「海外の高校生との交流」

・オンライン会議システムでの交流（希望者対象 令和3年度3回実施）

1. インドネシア・ブミ・シャラワット宗教高校（対象：1・2年生の希望者 令和3年4月7日）
2. モロッコ・IBM SINA High School（対象：希望者8名 令和3年11月10日）
3. インドネシア・ブミ・シャラワット宗教高校（対象：希望者16名 令和4年1月21日）

・お土産交換（対象：希望者20名 実施時期：令和4年3月）

西高生とインドネシア・スラバヤのブミ・シャラワット宗教高校の生徒と、お互いの文化を紹介するお土産と手紙を送り合いました。メールアドレスを交換し、その後の交流につなげました。



・クリエイティブ・ライティング・プロジェクト

（対象：1・2年生希望者 実施時期：令和4年12月～令和5年3月）

西高生10名とモロッコのイブン・シナ高校生11名が小説等を書き、お互いに交換して感想を送り合うプロジェクトを実施しました。



モロッコから届いた物語

4 香川県教育委員会主催の取組

1 香川県高校生探究発表会

目 的 香川県内の高校生及び特別支援学校高等部の生徒による、総合的な探究の時間等における、地域課題やその他のテーマに関する探究活動の研究成果を発表し、探究的な学びを広く普及させる場とする。

実施内容

○令和3年度

実施方法 オンデマンド配信による発表
配信期間 令和4年3月10日(木)～24日(木)
発表校 三本松高校、三木高校、高松高校、高松商業高校、高松東高校、高松西高校、高松北高校、香川中央高校、丸亀高校、善通寺第一高校、琴平高校、笠田高校、高瀬高校、観音寺第一高校、観音寺総合高校、英明高校
発表件数 42件(紙面発表2件を含む)
指導助言者 香川型教育メソッド研究会研究委員他

○令和4年度

実施方法 対面開催
開催日 令和5年3月12日(日)
会場 香川県社会福祉総合センター コミュニティホール及び大会議室、香川県庁ホール
発表校 小豆島中央高校、三本松高校、三木高校、高松高校、高松東高校、高松南高校、高松西高校、高松北高校、香川中央高校、坂出商業高校、坂出高校、丸亀高校、飯山高校、丸亀城西高校、善通寺第一高校、琴平高校、笠田高校、高瀬高校、観音寺第一高校、英明高校、穴吹学園高校
発表件数 43件
指導助言者 香川型教育メソッド研究会研究委員他

2 かがわイノベーションプログラム

目 的 各学校から参加する生徒や参観する教員が、新たな価値の創造力を育成するプログラムを体験することを通して、各校で核となる生徒および教員のリーダーを育成するとともに、イノベーション教育の裾野を広げる。

主 催 香川県教育委員会 香川大学創造工学部

協 力 一般社団法人トピカ 株式会社ドコモCS四国 善通寺第一高等学校

実施内容

○令和3年度

開催日 令和3年12月11日(土)、12日(日)、18日(土)、19日(金)
会場 香川大学会場：香川大学(幸町キャンパス)
塩江会場：道の駅「しおのえ」周辺、旧上西小学校体育館等
内 容 冬の塩江(高松市塩江町)の新しい遊び方を提案するアイデア創出ワークショップを行う
参加者 生徒21名 教員1名
講師 山中 隆史(香川大学創造工学部 教授)
石塚 昭彦(香川大学創造工学部 准教授)
柴田 悠基(香川大学創造工学部 講師)
村山 淳(一般社団法人トピカ)
香川大学創造工学部造形・メディアデザインコース学生

○令和4年度

開催日 令和4年8月1日(月)～4日(木) 4日間
会場 香川大学会場：香川大学(幸町キャンパス)、イノベーションデザイン研究所
塩江会場：大滝山県民いこいの森、旧上西小学校体育館等
内容 夏の塩江(高松市塩江町)の新しい遊び方を提案するアイデア創出ワークショップを行う
参加者 生徒31名 教員2名
講師 山中 隆史(香川大学創造工学部 教授)
石塚 昭彦(香川大学創造工学部 准教授)
柴田 悠基(香川大学創造工学部 講師)
村山 淳(一般社団法人トピカ)
香川大学創造工学部造形・メディアデザインコース学生

3 グローバルシンポジウム

目的 県下の高校生、県内在住の外国人が集い、持続可能な社会づくりに向けたシンポジウムを開催することを通じて、参加者が持続可能な社会の実現を目指してグローバル課題に主体的に取り組む姿勢を涵養するとともに、グローバル人材としての資質を高める。

協力 株式会社リンク・インタラック

実施内容

○令和3年度

開催日 令和3年12月24日(金)
会場 サンポートホール第2小ホール
テーマ 「2050年の地球を生きる私たちへ、What will 2050 look like?
2050年に生きる自分を想像することで、今できること、すべきことに思いをはせよう！」
内容 外国人在住者によるパネルディスカッション(使用言語：英語)
(テーマ：それぞれの母国から見た2050年の世界)
グループワーク(テーマ：2050年の教育、気候等 使用言語：日本語または英語)
参加者 生徒16名
講師 外国人在住者 6名

○令和4年度

開催日 令和4年12月23日(金)
会場 香川県社会福祉総合センター 第1中会議室
テーマ 「未来の私たちへ、What will we need to survive?」
将来の変化を予測することが困難な時代を生き抜いていく上で、私たちには何が必要なのだろうか?グループごとに与えられたテーマについてディスカッションしよう!
内容 外国人在住者によるパネルディスカッション(使用言語：英語)
(テーマ：それぞれの母国のSDGsへの取組)
グループワーク(テーマ：教育、ジェンダー平等、エネルギー等 使用言語：日本語または英語)
参加者 生徒24名
講師 外国人在住者 5名
香川大学留学生 5名

4 魅力発信プロジェクト会議

目的 県立高校が実施している魅力発信の取組について、現状を把握しつつ、協議を通してよりよい発信の方法に関する意見を聴取する。

実施内容

○第1回会議

開催日 令和3年6月21日(月)
 会場 県庁北棟403会議室
 参加者 吉馴 奈緒美 (四国リレーションズ 代表)

○第2回会議

日時 令和3年9月29日(水)
 会場 教育センター第5研修室
 参加者 千切谷 耕一郎 (香川県高等学校PTA連合会 会長)
 前川 佐永子 (香川県高等学校PTA連合会 理事)
 吉田 誉範 (香川県PTA連絡協議会 会長)
 川田 浩子 (香川県PTA連絡協議会 副会長)
 槌谷 昌晃 (高松西高等学校 校長)
 安藤 公紀 (株式会社瀬戸内海放送 取締役執行役員：広報アドバイザー)

5 香川型教育メソッド研究会

目的 各リーディングスクールの活動を支援するとともに、研究を通して得られた知見をまとめることで、他の県立高校が魅力化を推進していく際の指針として活用できるよう、「香川型教育メソッド」として集約していくことを目的とする。

○協議会

回	開催日	主な内容
1	令和3年 7月19日(月)	(1) 取組の全体計画及び年間活動計画について (2) 現時点での取組の振り返り及び今後の見直し
2	令和3年 10月14日(木)	課題別協議 ①学校外と連携した探究活動を行うなどの場合に、探究のテーマをどのように設定するか ②生徒に取組のねらいを浸透させ、学びに向かわせるためにはどうすればよいか
3	令和4年 2月15日(火)	(1) 「香川型教育メソッド」の作成計画について (2) 各リーディングスクールにおける教育プログラムの開発
4	令和4年 7月22日(金)	(1) 令和4年度の各リーディングスクールの取組について (2) 「魅力あふれる香川型教育メソッド〈1〉」原稿案の検討
5	令和4年 10月14日(金)	(1) 「魅力あふれる香川型教育メソッド〈1〉」進捗状況について (2) 「魅力あふれる香川型教育メソッド〈1〉」原稿案の検討
6	令和5年 2月20日(月)	(1) 令和5年度におけるメソッドの普及について (2) リーディングスクールの取組の振り返り

○リーディングスクール視察

年度	実施日及び視察した学校
令和3年度	①9月21日(火) [高瀬]、②10月26日(火) [善通寺第一]、 ③10月27日(水) [高松西]、④1月25日(火) [善通寺第一]、 ⑤2月9日(水) [高松西]
令和4年度	①6月21日(火) [善通寺第一]、②7月13日(水) [高松西]、 ③9月6日(火) [高瀬]、④9月13日(火) [高瀬]、 ⑤10月25日(火) [善通寺第一]、⑥10月26日(水) [高松西]、 ⑦2月7日(火) [善通寺第一]、⑧2月8日(水) [高松西]

香川型教育メソッド研究会（令和3、4年度） 参加者一覧

（敬称略）

区分	団体名 役職	氏名
リーディング スクール 担当教員	高瀬高等学校 教頭（令和3年度）	真鍋 卓二
	高瀬高等学校 教頭（令和4年度）	圖子 謙治
	高瀬高等学校 講師（令和3年度）	森 千紘
	高瀬高等学校 教諭（令和4年度）	田中 真弓
	善通寺第一高等学校 教諭	久保 静江
	高松西高等学校 主幹教諭	横井 透
	高松西高等学校 教諭	高橋 真弓
	高松西高等学校 教諭	芳重 香奈
協力校 担当教員	高松東高等学校 教諭	佐藤 大輔
	琴平高等学校 教頭（令和3年度）	山田 知子
	琴平高等学校 教諭（令和3年度）	桑田 麻里
	琴平高等学校 教諭（令和3年度）	堀内 麻樹
	琴平高等学校 教諭（令和3年度）	安富 裕二
	観音寺第一高校 教諭	床田 太郎
研究委員	株式会社瀬戸内海放送 取締役執行役員	安藤 公紀
	香川大学創造工学部 副学部長	石井 知彦
	四国地方ESD支援センター 事務局長	宇賀神幸恵
	香川大学経済学部 教授	西成 典久
	香川大学教育学部 准教授	松下 幸司
	四国リレーションズ 代表	吉馴奈緒美
香川県教育委 員会事務局	高校教育課 課長補佐(兼)主任指導主事	渡邊 謙
	高校教育課 主任指導主事	鎌田 高明
	高校教育課 主任指導主事	濱口 大
	高校教育課 主任指導主事（令和3年度）	笠井真希子
	高校教育課 主任指導主事（令和4年度）	栗田 隼人

役職名は参加時のもの

魅力あふれる香川型教育メソッド〈1〉
 ～ 社会と出会い、問うことを楽しむ「香川型探究学習」編 ～
 令和5年3月

編集・発行 香川県教育委員会 高校教育課
 〒760-8582
 香川県高松市天神前6番1号 天神前分庁舎
 TEL (087)832-3750
 FAX (087)806-0232

